HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アレクサンドル・ネフスキー : 史料の検討（下）
Author(s)	栗生沢, 猛夫
Citation	西洋史論集, 7, 1-71
Issue Date	2004-02-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37459
Type	departmental bulletin paper
File Information	7_1-71.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

アレクサンドル・ネフスキー
――史料の検討（下）――

栗生沢　猛夫

二　『アレクサンドル・ネフスキー伝』

いわゆる聖者伝が歴史研究においてどのように扱われるべきかについては、クリュチェフスキーやセレブリャンスキーの名を挙げるまでもなく[1]、古来多くの研究者を悩ませてきた。クリュチェフスキーを含む多くの研究者は、聖者伝が歴史「史料」としてはさまざまな欠陥をもつにもかかわらず、それを何とか歴史研究に利用する手だてを求めて苦闘してきたといえる。なかにはブドーヴニッツのように積極的にそれを生かした研究に挑み、ある程度の成果を生み出した研究者もいないわけではない[2]。しかし逆にルリエーのように、聖者伝がその見せかけのもっともらしさによって素朴な歴史家を信じ込ませてしまう、「きわめて危険な『史料』」であることを指摘し、その歴史史料としての価値を疑問視する研究者もいる[3]。本稿はこの問題を全面的に論じることを目指すものではない。アレクサンドル・ネフスキー『伝』に限定して、このことについて考えてみようというにすぎない。

そのためには『伝』の記述内容をできるだけ詳しく分析することが求められてくるが、その前に、『伝』そのものが今日どのような形で伝えられているかを確認しておく必要がある。

『伝』のテクストは今日までさまざまな形で多数伝えられている。それは早くは何よりもまず『ラヴレンチー（スーズダリ）年代記』（一四世紀末の成立）と『プスコフ第二年代記』（一五世紀末）のなかに含まれて伝えられるが[4]、独立した作品としても多数の写本で知られている。さらにはすでにみたように、他の後代の諸年代記のなかにおいても、初期の記述と『伝』の諸断片とが結びつけられた形で、伝えられることがある。Iu・K・ベグノーフによれば、『伝』は今日二〇にのぼる版（redaktsiia）、五〇〇余りの写本（rukopis'）で伝えられているという[5]。その総合的検討は今後の研究に待たなければならない。本章の課題は限定されたものである。すなわち、『伝』に関わるいくつかの問題の所在をごく簡潔に示した上で、アレクサンドル研究における『伝』のもつ意味について考えてみたいということである。

これまで『伝』は独立の作品としては、掌院レオニード（一八八二年）、V・マンシッカ（一九一三年）、S・A・ブゴスラフスキー（一九一五年）、N・I・セレブリャンスキー（一九一五年）、V・I・マールィシェフ（一九四七年）、G・N・モイセーエヴァ（一九六四年）らによって刊行されている。[6] とくにマンシッカが刊行した版[7]は、N・K・グッズィーのよく知られた『古ルーシ文学読本』やドイツのR・トラウトマン、スウェーデンのA・ステンダー＝ペーターセンによる同種の編集本に採用されている。またI・P・エリョーミンの現代ロシア語訳、W・フリッツェのドイツ語訳、中村喜和氏による最初の邦訳もこれを底本として用いている。[8]

もっとも一九六五年に研究史上画期となる著書[9]を出版したベグノーフによれば、これらはすべて写本伝統を十分に考慮に入れた刊行とは言いがたく、それぞれが利用する写本数も限定されたものであった。たとえば八本の写本を集め、テクスト批判に基づく刊行を企図したブゴスラフスキーにおいてすら、決して原初的とは言えない一六世紀のモスクワ宗教アカデミー写本を底本とするという誤りを犯しているという。[10] モイセーエヴァの刊本も、一六世紀第三四半期の写本（アルハンゲーリスキー写本）を誤って一六世紀初頭のものと考えて底本にしてしまっているという。[11] ベグノーフ自身はそれまでの諸研究とテクスト刊行史に対するこのような批判の上に立って、先の一九六五年の著書において写本伝統の綿密な検討を行い、『伝』の第一版の写本一三本を確定し、そのなかの一つ（rukopis' GIM, Sinodal'noe sobranie, No. 154、一四八六年ごろ。ll.156-162 ob. これはすなわち『プスコフ第二年代記』中に含まれるテクストのこと。以下これをPsと表記する。本章注(4)を参照）を底本としたテクストを校訂出版している。近年新たに『伝』テクストを刊行したV・I・オホートニコヴァも、ベグノーフと同じ写本を底本としていることは、現在のところ、ベグノーフの研究がもっとも妥当なものであるとみなされていることを示しているといえよう（本章注(5)を参照）。

さてベグノーフは、『伝』第一版に属する一三写本（それぞれ一四世紀から一七世紀にかけてのもの。各写本の詳細かつ具体的な記述はここでは省略し、[12] ベグノーフに従ってLv, Ps, P, L, A, V, M, Ar, Pg, B, R, O, Uと記しておく。各写本の紹介は必要がある場合に限りその都度行う。そのうち欠損箇所がなく完全な形をしているのは七写本、L, A, V, Ar, B, R, Oである。もっとも早い時期の写本はLv、すなわち『ラヴレンチー（スーズダリ）』の一二六三年の項にまとめておかれた『伝』で、一三七七年のものとされる。ただしこの『伝』は中途で切れており、後半部分が欠けている）を二グループに分けている。[13] その際の分類の基準は、各写本に一二六二年（この年代は『伝』の各写本中には出てこない）のドミトリー・アレクサンドロヴィチ公（アレクサンドル公の八ないし九才になる子）のユーリエフ遠征に関する記述があるかどうかである。この記述を含む写本群を第一群（Ps, B, R, Uの四写本）、含まない写本群を第二群とする（P, L, A, V, M, Ar, O, Pgの八写本）。後者においては先のドミトリー公の遠征記事に代わって、類似の、しかしヤロスラフ・ヤロスラヴィチ（トヴェーリ公、アレクサンドル公の弟）を主人公とするユーリエフ遠征記事が現れる

のである。この一見『伝』とはなんの関係もない記事を規準とする理由は、それが『伝』編纂時の政治状況に深く関わっていると考えられていることにある。

すなわち、『伝』第一版、第一群の記述は、全体として、この記事について伝える諸年代記、『ノヴゴロド第一（古輯）』、『シメオーノフ』、『ロゴシュキー』、『トヴェーリ』、『アヴラムカ』等の記述に近いといえる。これらの年代記によれば、一二六二年にノヴゴロドの人々は自らの公ドミトリー・アレクサンドロヴィチとともにユーリエフに遠征しているし、ウラジーミル大公アレクサンドルは自身の子への援軍として、弟のヤロスラフ（トヴェーリ公）を派遣している。そして後者はいわば幼い甥の指揮下に大人しく入っているのである。もっとも『伝』第一版、第一群は上の諸年代記とまったく同じというわけではない。前者（『伝』）では、ドミトリー公への言及はなされるが、援軍として派遣されたというヤロスラフの名はみられない。諸年代記において遠征軍の中核であるとされるノヴゴロド人についての言及もない。また重要なのは、『伝』第一版、第一群の方には、大公アレクサンドルが「己の近しい家の子ら」に対し、「汝ら、わが子に、余に対するが如くに、生命を賭して仕えよ」と命ずる文言が含まれているのである。これは諸年代記には見られない文言である。（なお本章において『伝』からの引用がなされる場合、基本的には邦訳によるが、時に独自に訳し直している場合がある。引用に際し、邦訳の頁数を挙げることは煩瑣になるため控える。）

ベグノーフによれば、この最後に引いた文言は、やがて世を去ることになるアレクサンドルの、ドミトリーを後継者としようという決意を示す政治的遺言のように響いているという。というのも『伝』の原初版が成立したとベグノーフが考える一二八〇年代初頭（おそらく一二八二～八三年）というのは、後述するように、まさに一二七六年にウラジーミル大公位に登ったドミトリーに対し、その弟アンドレイが叛旗を翻し、アレクサンドルの二人の子供の間にタタールを巻き込んだ激しい大公位争いが起ったからである。従って、ベグノーフによれば、『伝』第一版、第一群は親ドミトリー的な立場に立った作品群ということになるが（ベグノーフはこれも後述のように、『伝』の原初版が一二八〇年代初頭にウラジーミルのロジェストヴェンスキー（聖母生誕）修道院で編まれたと考えている。当時同院の保護者とみなされていたのが、ほかならぬドミトリー・アレクサンドロヴィチ公であった。『伝』の作者がドミトリー公に特別の配慮を示しているのも頷けるところであるという）、これがどのようにしてドミトリーの名が削られ、ヤロスラフ公を主人公とする作品群（つまり第二群）に変っていったのか、ベグノーフの説明は今一つ明確さに欠ける。すなわち、かれによれば、一方ではユーリエフ遠征の主人公をヤロスラフ・トヴェーリ公とする記述が最初に現れるのは、一五世紀三〇～四〇年代の「ノヴゴロド－ソフィヤ集成」（それはたとえば今日では『ノヴゴロド第四年代記』に反映されているという。ただこの集成の存在に関しては最近強い批判が出されている。それについては本論文（上）七三－七四頁を参照されたい。）においてである。『ノヴゴロド第四』ではヤロスラフ公の名前がまず記され、その後にドミトリー公が言及されてい

るのである。ベグノーフによれば、『ノヴゴロド第四』の一二六二年の記事は、『伝』第一版、第二群のテクストの影響を受けているという。というのもこの第二群の最古の写本の一つが『伝』第二版の史料となっており、この第二版が「ノヴゴロドーソフィヤ集成」に入り込んだからであるという。なお『伝』の第二版の成立も「ノヴゴロドーソフィヤ集成」の成立時期とほぼ同じで、一五世紀三〇～五〇年代のことであるという。他方、ベグノーフは次のようにも記す。すなわち、ユーリエフ遠征の主人公のドミトリーからヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公への転換は、おそらくはすでに一三世紀末、ドミトリーと大公位を争ったアンドレイ・アレクサンドロヴィチ公（一二八二年、一時大公位をドミトリーから奪うが、やがて手放さざるを得なくされ、一二九四年に再度獲得し、今度は一三〇四年に没するまで大公位にあった）の周辺で、後者に近い人物によってなされたというのである。アンドレイ公の側近著述家は自己の庇護者に都合の悪いドミトリー公の名を『伝』原初版から削除したというのである。これが第一版、第二群というわけである。

さて以上のように、ベグノーフによれば『伝』第一版、第一群の諸写本、なかでも筆写年代がもっとも早いPsが、もっとも原初版に近いテクストを伝えているということになるが、ここで問題となるのは写本Lv（『ラヴレンチー（ズーズダリ）』年代記本）である。[14] それも第一版の一三写本のうちでもっとも早い時期のものであるからである。ベグノーフが後者ではなく、前者をかれの刊行テクストの底本とした理由は、Lvがいかに最初期のものとはいえ、後半部が欠けていて第一群に属するのか、第二群に属するのか定かでないことにある。研究者によってはPsと比べてLvの方が古く、後者こそもっとも原初的であることを主張する者[15]もいるなかでの、この見解は注目されるところであるが、この点では最近のオホートニコヴァもベグノーフ説に同意したところであった。[16]

さらにベグノーフによれば、これら第一版に属す一三写本は、古い読みを含む度合いによって、次のように順序づけられるという。まずもっとも古い段階を示すと考えられるのが第一群で（Ps, B, R, U）、次にLv、さらに第二群第一グループ（P, L）、そして最後に第二群第二グループ（A, V, M, Ar, O, Pg）がくるという。（なお第二群を第一及び第二グループに区分する規準は、アレクサンドル公の埋葬と死後の奇蹟に関する記述が詳細であるかどうかにある。詳細なものを第一グループ、簡潔なものを第二とし、前者の方がより古い形を伝えているとするのである。なおここでいう詳細な記述は、第一版第二群第一グループのみならず、第一版第一群の諸写本も、さらには第二版、また後期のいくつかの版にも含まれているという。[17]）

それでは『伝』はそもそも何を史料として、どのようにして、またどのような人物により、どこで執筆されたと考えることができるであろうか。これに関しても研究史上さまざまな説が出されている。まず考えておきたいのは、『伝』の初期の写本の一つ（ベグノーフのいうLv）が上記『ラヴレンチー（スーズダリ）』で伝えられていることから、この『伝』と『ラヴレンチー（スーズダリ）』とがいかなる関係にあるかである。『伝』は最初から年代記の一部として執筆され、そ

のまま『ラヴレンチー（スーズダリ）』とともに伝えられることになったのか、[18] それとも『伝』はいつかの時点で独立の作品として執筆され、後に『ラヴレンチー（スーズダリ）』の原史料である一四世紀初の全ルーシ的年代記集成に取り込まれたのか、[19] 議論がある。

これに関するベグノーフの立場は次の如くである。すなわち、かれは『シメオーノフ』及び『トロイツカヤ』両年代記（ともに、『ラヴレンチー（スーズダリ）』と同様に、一四世紀初の年代記集成に遡及される）の分析を通じて、一四世紀初の年代記集成には『伝』が含まれていなかったことをつきとめ、『伝』はすでに独立の作品として存在していたこと、それは一三七七年にラヴレンチーが一四世紀初の年代記集成を基に『ラヴレンチー（スーズダリ）』を編んだときに取り込まれたことを主張するのである。[20]

それでは独立の作品としての『伝』の作者は誰か、いつ執筆されたのかが次に問われることになろう。これに関しては、まず『伝』は最初、だれか俗人（たとえばアレクサンドル公の従士）により執筆され、それが後に教会（聖職者）の手により聖者伝にふさわしく改作されたとする見解について考えておく必要がある。この見解は、『伝』がウラジーミル大公を主人公としているがゆえにごく理解しやすい自然なものである。すなわちそれが通常の聖者伝とは異なって、世俗的、軍記物語的な特徴を強く示していることから提起されたものである。それは最初セレブリャンスキーによって唱えられた。セレブリャンスキーの説は、実は、『伝』研究史上の大問題である『伝』と『ルーシの地の滅亡の物語』との関係をめぐる問題との関わりで出されてきたのであるが、これについては後に改めて記す。いずれにせよかれによれば、『伝』は最初、公の没後間もなく、公の従士の一人によって公の軍功を称えるために執筆されたが、一三世紀末に聖職者の手で教会の立場から書き直されたという。世俗的及び教会的二種の『伝』はしばらくの間、一四世紀になっても併存したが、やがて後者が優勢になり、今日に伝えられるようになったのは教会関係者によって改作された方の『伝』であるという。[21]

セレブリャンスキーの説は、反教会、反教権主義的な雰囲気が強かった時代の研究者にとってきわめて魅力的であったのであろう、多くの者の支持を集めたが、[22] 逆にN・K・グッズィー（かれは最初はセレブリャンスキー説に傾いていたが）、I・P・エリョーミン、W・フィリップ、ベグノーフ、オホートニコヴァらはこれを批判し、聖者伝、とりわけ諸公伝（プスコフのドヴモント伝、ガーリチのダニール・ロマーノヴィチ伝、ヴォルィニのウラジーミル・ヴァシリコヴィチ伝など）においては、世俗的、教会的要素が混在することは珍しくないことを強調している。[23] セレブリャンスキー説は、『伝』を上記の『滅亡の物語』と結びつけるために考え出されたようなところがあり、しかも後述するように両者を結びつける必然性は、今日大方の研究者の考えでは、必ずしも存在しないので、成立しがたいものとみなすことができよう。

そこで改めて作者と成立時期の問題に移ろう。この問題もいうまでもなく諸研究者の重大な関心事の一つであった。すでに『伝』そのものに作者の個性を窺わせる特徴が数多くみてとれる。[24] たとえば、作者

は公の生涯について「わが父たちの口から」聞いたとする一方、自身が「公の壮年期の目撃者」であるとも述べている。またネヴァ河畔の戦の描写に続いて、作者は戦の様子を「おのが主人アレクサンドル、またこのとき戦に加わっていた他の者たちから」聞いたとも記している。公のやや若い同時代人といったところであろう。作者が公に近い俗人のような印象もするが（もっとも戦の当時は「公の従士」ではなかった。自らは戦に参加していないからである）、これだけでは聖職者説を排除することもできない。むしろ作者としての自己を大いに卑下したり、全編にわたって聖書に記された事例やそこからの引用、奇蹟の描写がみられたりするので、もし現在みられるような『伝』が基本的に原初的な形を伝えていると考えるならば、作者が単なる武骨の俗人とは考えにくい。ネヴァ川方面に攻め寄せてきた勢力を、たとえばスウェーデン人とではなく、「ローマの地の北国の王」の勢力と記していることは、作者が敵を何よりもカトリック勢と認識していることを示していると考えることができる（後にこの敵は単に「ローマ人」とも表現される）。作者の反カトリック的態度は、後に「大ローマの教皇」からの使者が公のもとに現れたときの描写にもはっきりと現れている。公は教皇からのカトリックへの改宗（とおそらくは同盟締結）の提案を断乎拒絶したと記されているのである。ここにも聖職者的な性格がでているといえるかもしれない。

さて『伝』では、先の敵に対し公が「わずかばかりの従士団」とともに出撃したと記され、ノヴゴロド人の参戦には言及されていないのであるが、このことは著者がノヴゴロド人の活躍ぶり（それについてはたとえば、『ノヴゴロド第一（古輯）』に鮮明に描かれている）に無関心であったことを物語っているようにみえる。すなわちかれはノヴゴロド出身者ではなかったと考えられよう。また作者は、「ニェムツィ」をチュード湖上で破り凱旋した公を出迎えたプスコフ人を、「おお、愚かなるプスコフ人よ」に始まる言葉で威嚇し警告する公の言を紹介しているが[25]、これなども作者がプスコフとは無縁の人物であることを物語っているといえよう。こうしたことと、作者がウラジーミル及びその聖母生誕修道院と深い関係にあるとみられること（さらに公が没後この修道院に葬られていること）、また『伝』の末尾で公が府主教キリルによって「スーズダリの地の太陽」と表現されていることなどから、多くの研究者は、作者がスーズダリ・ウラジーミル地方に関わりのある者と推測している[26]。

『伝』そのものから推測できる作者像は以上を出るものではない。もしここで『伝』の基となった史料、すなわち作者が執筆にあたって利用した諸史料の検討に進むなら、作者がどのような知的文化的環境にあった人物かがさらに浮かんでくる可能性があるのであるが、ここではそれを行うことをせず、諸研究者の見解をみるなかで、その点をも考慮に入れるということにしたい。研究者たちが作者像のさらなる具体化をはかって奮闘している、その成果から学ぼうということである。

なかでもこの点で重要な貢献をなしたのは、D・S・リハチョフである。かれは一九四七年の論文で、それまでの諸研究の成果によりつつ、『伝』において利用されている諸史料について考察しながら、そ

れら、とくに『デウゲーニー・アクリト［ディゲニス・アクリタス］物語』がガーリチ・ヴォルィニ地方で翻訳され、その地の文学的伝統に属していることを確認し、さらに『伝』のテクスト中に『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』（イパーチー年代記の最後の、一二〇一～一二九二年の部分）との類似性を思わせる多数の箇所のあることを主張した[27]。たとえば、『伝』には公の名を出してわが子を脅す遊牧民の話が出てくるが（「モアビトの女たちは『アレクサンドルが来る』と言ってその子供を脅すようになった」）、『ガーリチ・ヴォルィニ』の六七五九（一二五一）年の項にも、ロマン・ムスチスラヴィチ公のことについて、ポーロヴェツがかれの名を出してわが子を脅かしたとする記述がある。リハチョフによればこうした箇所は外にはないという[28]。

さらに『伝』の、チュード湖上の戦から凱旋する公をプスコフ人が、「君主である大公［実はかれはこの時点ではまだ大公ではなかったのだが、『伝』はそのような、いわば「些細な事実」にはまったく煩わされない。］アレクサンドル……に対し歌を歌って栄光を称えながら」出迎える場面、また公のオルダーへの旅に際し、かれが大軍を率いて「到着」する様子が「威風あたりをはらう」が如くであったとされていること、さらには「西方の国のある勢力強き人物が」公の「みごとな姿を見ようとして」やってきたという記述など、リハチョフは『伝』と『ガーリチ・ヴォルィニ』の、多くはアレクサンドル公とダニール・ガリツキー公に関係する諸記述の間にみられる類似例を一〇例以上示し、『伝』はガーリチの文学的伝統のなかで執筆されたと結論づけるのである。

リハチョフによれば、一三世紀中葉から後半にかけての時期にガーリチ地方とウラジーミル・スーズダリ地方を文学的に結びつけた存在は具体的に特定できるという。それは府主教キリル（在位一二四七－八一年）である。このきわめて興味深い人物の経歴についてここで詳しく立ち入ることはできない。ただ本稿に関連する限りにおいて記すと、この人物はガーリチ公ダニールの推す「キエフと全ルーシ」の府主教で、すでにプリショールコフが明らかにしたように、府主教に就任する以前には、ダニール公の「印璽官 pechatnik」で、いわば宰相的な役割を果たしていた[29]。おそらく一二四六年に、オルダーから帰還したばかりのダニール公によって当時ニケーアにあったコンスタンティノープル総主教庁に派遣され（その旅の途上、かれはハンガリー王ベーラ四世の娘とダニール公の息子レフとの間の婚約を成立させている）、総主教マヌエル二世の手で翌年「キエフと全ルーシの府主教」に任じられた。ダニールはキリルを府主教につけることで、キエフさらには他のルーシ諸地方への自己の影響力の拡大を狙ったのであろう。ところがその後間もなく一二五〇年に、キリルは北東ルーシはアレクサンドル公のもとへ向かい、そのまま一二八一年に没するまで三〇年以上にわたって（もちろん一時的例外は除いて）北のウラジーミルに腰を落ち着けてしまう。これは奇妙なことであるが、こうした結果になった事情は推測することができる。

キリルの一二五〇年の北東ルーシへの旅はダニール公の命令により、あるいは少なくともその了解の下でなされたと考えることができる。キリルはこのとき、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公（アレクサンドル

の弟で、当時のウラジーミル大公）に嫁ぐダニールの娘を伴っていたからである。結婚式はウラジーミルのウスペンスキー聖堂で府主教自身の司式の下になされた。おそらくキリルはその後ガーリチに戻るよう指示されていたと考えられる。あるいはたとえばキプチャク・カン国によるルーシ支配の確立以来複雑化していた国際情勢に関しウラジーミル当局との交渉のため、しばらくは当地に滞在することぐらいは予定されていたかもしれない[30]。いずれにせよキリルはもはやガーリチに戻ることはなかった。決定的であったのは、リハチョフも指摘するとおり、ダニール公がキリルの出立後明確にさせた西方への傾斜、すなわちローマ教皇庁との同盟関係の締結であったように思われる。すでに一三世紀四〇年代半ばに教皇庁からガーリチ公への反タタール同盟締結の働きかけがなされていたが、それは一二五〇年代になって再開され（このときの教皇庁の攻勢はガーリチに対してのみならず、ボヘミア、モラヴィア、セルビア、ポメラニアなどにも向けられていた。ノヴゴロド公時代のアレクサンドルにも一二四八年教皇インノケンティウス四世から二通の親書が届けられているが、これも広く取れば教皇庁のこうした攻勢の一環であったといえよう）、一二五四年にはダニールは教皇庁による王位授与の提案を受けいれたのである。おそらくキリルは早くからダニールの西方カトリック勢力への傾斜（もっともダニールがカトリックそのものを受け容れるということはなかったのであるが）を苦々しく思っていた。かれはおそらくニケーア訪問の際に、カトリック勢力が正教の本拠である帝国とその首都に対し行った犯罪的行為（第四回十字軍のコンスタンティノープル攻撃占領）の結果（ラテン帝国の創設）を目の当たりにし、反カトリック的感情を強めていた。こうしたことが重なって、かれはガーリチに帰還することを拒否し、一方では、北東ルーシにおいて反カトリック、親モンゴル的立場を鮮明にしつつ新たに大公となったアレクサンドルとの同盟関係に入ったものと推測できるのである。

リハチョフによれば、このキリルが、あるいはかれがガーリチから同伴したその側近らが、『伝』の成立に関与していたことは疑いないという。キリルその人が作者であったのか、それともかれは執筆を依頼ないし指示しただけであったのかは、明らかにしがたい。しかし『伝』にみられる顕著なガーリチ文学的伝統に根ざす諸特徴はキリルの関与を強く示唆しているという。

およそ以上のような形で作者の問題が解決されるとするならば、『伝』の成立年と成立場所の問題は比較的容易に推測することができる。すなわちキリルはそのウラジーミル滞在中ほぼ当地のロジェストヴェンスキー（聖母生誕）修道院に居を構えていた。この修道院（創建は一二世紀末）は一三世紀半ばからモスクワに府主教所在地が移る一三二三年まで、府主教と密接な関わりをもつ修道院であったとみられているのである。しかもそれはアレクサンドル自身が埋葬されている修道院でもあり、アレクサンドル崇拝の中心であった。『伝』の末尾に公の埋葬と死後の奇蹟に関する詳しい記述がなされ、その情報源がキリルと修道院の執事セヴァスチアンであったとされていることを考慮するならば、『伝』はキリルないしその側近によって同院で作成されたと考えるのがもっとも自然であろう[31]。

成立時期については、ベグノーフが次のような状況を重視している。すなわち、『伝』第一版第一群の諸写本においては、既述のごとく、その末尾でアレクサンドルの子ドミトリーを正当な後継者とする視点が打ちだされていたが、このドミトリーは（おそらくは自らが大公位に就いた一二七六年以降）ウラジーミルのロジェストヴェンスキー修道院の保護者でもあったという。ところが一二八一年、大公ドミトリーに対しその弟アンドレイ・アレクサンドロヴィチ公が叛旗を翻し、かくして両者の間に熾烈な大公位争いが繰り広げられることになった。この大公位争いは、双方がそれぞれ当時分裂していたキプチャク・カン国の相対立する勢力（カンのモンケ・テミュル、その死後はトゥダ・モンケに対しエミールのノガイが対抗していた）と結びついて、長期にわたる凄惨な戦となったことで史上名高いのであるが、最初の段階では一度大公位を追われたドミトリーが、一二八三年にノガイの支持を確保することに成功し、大公位に復帰したことで、まずはドミトリー側の勝利に終わった。その後の大公位争いの経緯をここでたどることはできないが、このような時期に、具体的には一二八二年から一二八三年にかけて、『伝』はまさにドミトリーの正統性を証明する手段の一つとして、同院で作成されたというのである。すでに記した通り、『伝』はアレクサンドルの没後間もなく世俗的な作品として編まれたとする説も存在したが、それはベグノーフを含む多くの研究者によって否定されているので、今のところここに記したベグノーフ説がもっとも整合的な説となっている。一二八二～八三年と特定されるもう一つの理由は、『伝』のテクストからニェムツィが一二四〇／四一年に建てたとされる町コポリエの名が削除されていることである（このときニェムツィが建てたとされる町の名は『ノヴゴロド第一（古輯）』の六七四八～六七四九（一二四〇～一二四一）年の項にみえる。『伝』では、ネヴァ川の戦の後二年目のこととして、「西方の国から再び［敵が］やってきて……町を築いた」とのみ記されている）。この町の名はドミトリーにとっては不愉快な思い出と結びついていた。かれは一二七八年にノヴゴロド領内に石造の要塞コポリエを築こうとして、ノヴゴロド人と対立したことがあったが、一二八一年にタタール部隊の助力を受けたアンドレイの挑戦を受け、ノヴゴロドへ逃れようとしたときにも、かれに反感をもつノヴゴロド人によって受け容れを拒絶されたのであった。おそらくドミトリーと深い関係のある作者は（というのもドミトリーは作者の関係する修道院の保護者であったからである）、『伝』のテクストからドミトリーにとって忌まわしい思い出の因であるこの町の名を、しかもその忌々しさの感覚が薄れないでいる時期に、削ったと考えられるという。ベグノーフの以上のような説は一九六五年の著書でまとまった形で提唱されたが、その後これを本格的に論駁する試みはなされていない。それゆえ、今のところベグノーフ説を一つの到達点として考えておくことにする。(32)

『伝』の第一版、またそれを通して垣間見られる原初版（これをベグノーフは一二八〇年代初頭の成立としたのであるが）について、これまで研究者によって議論されてきたことは、本稿との関連で述べる限りでは、およそ以上のようなものであった。ただし一つのことに言及しないでは、『伝』研究史の重要な部分を見落としてしまうことに

なる。それは『伝』と『ルーシの地の滅亡の物語』との関係性の問題である。むしろ次のように言うべきであろう。『伝』はこれまで、主として、『滅亡の物語』との関連で研究されてきた、と。具体的には以下の如くである。

『滅亡の物語』は今日二本の写本で伝えられている。一つはプスコフ・ペチェールスキー修道院所蔵の一五世紀末の写本で（Rukopis' GAPO, f.449, No.60）、他はロシア文学研究所（プーシキン館）所蔵の一六世紀中葉のもの（Rukopis' IPLI, R.IV, op.24, No.26）である。問題は、この二写本では『滅亡の物語』が『伝』とともに現れ、しかも前者が後者の前に置かれているという点にあった。この二写本は、ベグノーフが『伝』第一版の写本としてあげた一三写本のなかで、それぞれP及びLと命名したものであった。

この事実から研究者間には、両作品の関係をめぐって激しい議論が展開されたのである。すなわち、『滅亡の物語』（それは冒頭のわずか二〇〇語あまりの断片でしか伝わっていない）は独立の作品の一部をなすものなのか、それともヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ大公（アレクサンドルの父）の死に関する物語、ないしはとくにアレクサンドル『伝』の序文をなすものなのか、という問題である。これについての研究史は、すでに我が国でも一九六一年の中村喜和氏の行き届いた紹介[33]があるので、ここでは立ち入らない。中村氏は多岐にわたる論点を整理しつつ、両者が別物で、『滅亡の物語』は独立した作品の一部であるとするグッズィやベグノーフの説をより妥当なものとする立場に傾いている。実はその四年後に出たベグノーフの上掲書が、『滅亡の物語』のテクスト論的研究を主題としたものでありながら、その第一章をもっぱら『伝』研究にあてているのも、この両作品の関係問題に最終的決着をはかるという著者の強い意志の表れなのであった。その論証の詳細にここで立ち入る必要はないと考える。いずれにせよ、ベグノーフはまさにこの書において、両作品がそれぞれ独立の作品であることを最終的に結論づけたのであった。かれによれば、『滅亡の物語』があたかも『伝』の序文であるかのごとくに、上記二写本でまとめられたのは一五世紀五〇～八〇年代、プスコフ地方においてのことであったという。[34]

さて以上で『伝』の第一版に属する諸写本の状況、またそれをめぐる諸問題についておおよそのことは記された。この第一版に伝えられている、ないしそこに反映されていると考えられる『伝』の原初的なテクストの内容についての分析が次の課題であるが、その前に、『伝』のテクストのその後の変遷の状況について若干記しておきたい。

すでに記した通り、『伝』はこれまで五〇〇もの写本で知られている。これらの写本はさまざまな「版」の存在を示しているが、各版の成立の歴史は複雑である。上に第一版の成立の状況は記した。その後、第一版とは大きく異なる版が何度かにわたって作成され、今日に至っているが、どれだけの版が数えられるかについては研究状況が錯綜しており、現時点で一致した結論をえるのは難しい。たとえば、V・I・オホートニコヴァは一九八七年の『古ルーシの著述者並びに著述活動事典（一一～一四世紀前半）』中の「アレクサンドル・ネフスキー伝物語」の項目において、『伝』の九つの版についてその詳しい紹介を

行っているが、[35] ベグノーフは、これを批判し、少なくとも二〇の版が存在することを主張している。[36] 一方、このベグノーフにたいしてもルリエーのような批判者がおり、[37] ベグノーフの見解をそのままうけいれてよいものかどうか、判断が難しくなっている。ただここでは、一応この点についてもっとも整合的かつ総合的な見解を表明しているベグノーフに従って、『伝』のその後の写本伝統について見ていくことにする。[38]

ベグノーフによれば、『伝』の成立と写本伝統形成の状況は、一部繰返しになるところもあるが、以下のごとくである。

アレクサンドル公は、すでに生前に教会から救国の英雄とみなされていたと考えられる。『伝』の末尾で、かれと親密な関係にあった府主教キリルが、亡くなった英雄のことを、「わが子らよ、すでにスーズダリの地の太陽は沈んだものと知るがよい」と言って悲しみ、それに続いて、人々も「もはやわれらは滅びるであろう」と応じているが、これは『伝』の作者が、公の死に大きな衝撃を受けた公の同時代人に共感をもっていることを表わしており、そのことはまた公が生前から人々にとって特別に大きな存在であったことをも物語っているようにみえる。それゆえ公にたいする崇拝は生前に、あるいは少なくとも没後間もなく始まったと考えることができる。ヴォルガ河畔の町ゴロジェツで没した公の亡きがらは首都ウラジーミルに運ばれ、そこのロジェストヴェンスキー修道院に埋葬されたが、その際、これも『伝』によれば、死せる公自らが両手を広げて、府主教キリルから贖宥状を受け取ったという。この奇蹟は府主教と執事のセヴァスチアンから人々に伝えられたと記されているが、換言すれば、このことも、すでに公の没後間もなく、少なくとも『伝』原初版が執筆されるころまでには、ウラジーミルのロジェストヴェンスキー修道院を中心にその聖化の過程が始まっていたことを暗示しているように思われる。

その延長線上に『伝』が成立することになるが、それはベグノーフによれば、上述のごとく一二八〇年代初めのことであった。このときキリルないしロジェストヴェンスキー院修道士のいずれかの者（ら）が『伝』のいわゆる第一版にあたるものを執筆ないし編纂した。それはエウセビオスの『コンスタンティノス大帝伝』の精神と南西ルーシのガーリチ地方の軍記物語の文学的伝統の影響のもとに執筆されており、その構成は次の如くである。まず修道士と思われる著者による序文、ついで公の生涯における一〇のエピソード（ネヴァ河畔の戦における勝利、ノヴゴロド、プスコフ地方からのニェムツィの撃退、チュード湖上の戦における勝利、リトアニア人の撃破、バトゥによるアレクサンドル召喚と公のオルダー行き、バトゥのアンドレイ公に対する怒りとネヴリュイの襲撃、ネヴリュイ軍撤退後のアレクサンドルによる国土復興、ローマ教皇使節の到来、子ドミトリーによるユーリエフ奪取、アレクサンドルのオルダー行きとその死）の記述（著者は「自らその目撃者」であると述べている）、そして最後に公の崩御を悼む記述（ここには公の遺骸の埋葬とその際の奇蹟についての記述も含まれる）。最後の部分は、すでに『伝』の原初版が書かれた時点で公は俗人でありながら聖人としても認識されていたことを示している。（もっともこの段階で『伝』がどのように呼ばれていたかは不明であるとい

う。必ずしも『聖者伝』とは呼ばれていなかった可能性もある。写本伝統上『伝』はその外に『物語』(povest'、またskazanieないしslovo—後者はたとえば、『伝』第四／第五版＝ミハイル編の『伝』のタイトルにみられる。Slovo pokhval'noe,,,,)として伝えられることもある。[39])

その後の数百年間の歴史のなかで、ルーシの庇護者にしてモスクワ大公家の祖としてのアレクサンドルの名声はさらに高まり、『伝』の第一版も繰返し写筆された。その際様々な形で修正を受け、部分的には加筆、また逆に削除されたことはいうまでもない。その修正が大幅なものであったり、新たに執筆され直したりすると、新たな版が成立するということになる。[40]

こうして、一五世紀三〇～五〇年代に『伝』のテクストを諸年代記のために用いる過程でまず第二版(ノヴゴロド—モスクワ版)が成立した。[41]第三版(ノヴゴロド版)は一五世紀後半(内容的に世俗的色彩の濃い教会暦用簡略版)、第四版(モスクワ版)は一六世紀二〇年代(『ニコン年代記』用に)、第五版(ウラジーミル版)は一五四九／五〇年府主教マカーリーの『大聖人暦(ヴェリーキエ・チェーチー・ミネイ)』のために、[42]第六版(プスコフ版)はサヴィン・クルィペツキー修道院修道士ヴァシーリー—ヴァルラーム(V・M・トゥチコフ)により同じころ同じ『大聖人暦』のために、第七版(モスクワ版)は一五六三年に府主教アンドレイ—アファナーシーの側近著述家により(『スチェーペンナヤ・クニーガ』のために)、第八版(ノヴゴロド版)は一六世紀第三四半期に(ある集成のために)、第九版は一六世紀末に(新たな『教会暦』用に)、内容的にもっとも詳細な第一〇版(ウラジーミル版)は一五九一年に(ヴォログダ府主教ヨナ・ドゥミンにより)編纂され、成立した。

アレクサンドル・ネフスキーの英雄化・聖人化は一七世紀以降もより強力に進められた。ロマノフ朝初代ツァーリ、ミハイルの父、大君フィラレート総主教が一六三〇年ごろモスクワ・クレムリのタイニツキエ門上に聖人を記念する最初の聖堂を建立したのもその一つの現れである。『伝』の写筆、修正も続けられ、一七世紀中に第一一から第一五までの版が成立した。

一八世紀になると、ピョートル大帝がアレクサンドルのさらなる英雄化を推し進めた。一七一〇年には、建造に着手されたばかりの新都サンクトーペテルブルクに聖三位一体アレクサンドル・ネフスキー修道院が開かれ(一七九七年よりラウラ、すなわち宗務院直属の大修道院となる)、一七二三～二四年には聖人の遺骸がウラジーミルからペテルブルクへ移送され、ニシュタットの和約が締結された日(旧暦八月三〇日、新暦九月一〇日)に新修道院に安置された。その日は聖人の教会祭日と定められ、宮廷説教師G・ブジンスキーにより『伝』の第一六版が執筆・出版された。エリザヴェータ治世には、新たな版(第一七、第一八)が成立した。第一九版は一七九七年にアレクサンドル・ネフスキー修道院(ラウラ)内で、最後の第二〇版(古儀式派版)は一八世紀末から一九世紀初めにかけて成立した。

かくしてベグノーフによれば、今日の研究者の前には二〇もの異なる種類の『伝』が存在しているのである。ただ、『伝』がいかにアレクサンドルの歴史的存在を考究することを目的としない作品であると

しても、その第一版と後代の諸版とを同じように扱うことは正しくなかろう。後述するように、後代の版には第一版とは異なる性格があり、それゆえこれを無意味なものと決めつけることはもちろんできない。ただ歴史的存在としてのアレクサンドルに出来るだけ迫ろうとする本稿では、『伝』におけるアレクサンドル像をみていくにしても、主に第一版を取り上げることに異存はなかろう。その他の版の取り扱いについては後述する。

『伝』は俗人を主人公とし、非常に多くの場合、年代記中にも現れているにもかかわらず、単なる偉人伝や物語ではなく、あくまでも聖者伝とみなされるべきであろう。研究史上はこれが聖者伝であることを疑問視する者が少なからずみられた。たとえば、すでにV・O・クリュチェーフスキーは、『伝』の最古の版にみられる世俗的諸要素を強調して、それを「スケールの大きさ、世俗文学に対する造詣の深さにおいてまったく独自の作品、その独特な形態からして唯一無比の古ルーシ聖者伝文学」と表している。マンシッカも、『伝』が聖者伝でありつつも、それが主人公の「世俗的人格を示す諸特徴」に特別の関心を払っていることを指摘している。『伝』原初版が、アレクサンドルの「勇気」に関する世俗的物語として公の没後間もなくその従士の一人によって執筆されたと主張したセレブリャンスキーも、またかれの説を支持した多数の研究者群も、この点ではまったく同様であった。(43)

『伝』が世俗的な特徴を顕著に示していることは否定できない。しかしそのことが『伝』の聖者伝性をただちに否定することにはならない。そこにみられる世俗的、とりわけ軍記物語的特徴は、主人公が外敵と戦う公＝英雄であることからくる当然の帰結である。諸公を主人公とする伝記を聖職者が、教会当局の強い後押しを受けて執筆するならば、おそらく『伝』の様なものになることは容易に推測できる。

ここでは、年代記に特有の、あるいは物語などであるならばある程度予想される年代の指示が、『伝』においては欠けていることにまず注目したい。(44) それは永遠を希求してのことであろう、現世の移ろいやすい時の流れなどにはあまり注意を払っていないのである。もちろん『伝』において時期の表示が必要となる場合もある。その場合には、たとえば「……の第二年目に」、また「同じころ」とか、あるいは「聖なる教父たちと……聖殉教者……の祝日の七月一五日の日曜日に」とかいう具合に、きわめて曖昧、相対的に、あるいは教会暦的になされている。

次に『伝』においては、主人公は聖書の人物に準えられ、幻視や奇蹟が数多く語られる。アレクサンドルの敵は「ローマの地の北国の王」とカトリック勢力であることが示唆され、公にたいする「王」の挑戦的な言によってカトリック王が侵略的意図を抱いていることが暗示される（『伝』の成立に深い関係をもったと考えられる府主教キリルが、上述のようにラテン帝国期にニケーアに何年間か滞在したことがあり、反カトリック的意識が強烈であったであろうことが想起される）。公に敵の到来を告げるペルグイは、公に加勢しようとする聖ボリス、聖グレープの幻を見る。その後のネヴァ河畔の戦で、「数知れぬ戦死者」を出した敵は旧約聖書のアッシリア王セナケリブの軍勢に見立てられる。チュード湖上の戦においても、アレクサンドルの陣営は「いにし

えのダヴィデ王」のそれに比較され、「天空に現れた神の軍勢」の加勢を受ける。アレクサンドルの働きによって敵の手から解放されたプスコフ人は、もしこの恩義を忘れるようなら、エジプトの俘囚から解放されながら神にたいする恩義を忘れた、かのユダヤ人にもたとえられるだろうと威嚇される。『伝』の末尾では、サライからの帰路病没したアレクサンドルの亡きがらが聖龕に収められ、府主教キリルらが公の手に贖宥状を置こうとしたとき、公があたかも生ける者の如く自ら手を開き、その証書を受け取るという奇蹟を演じたことが記されるが、これなどはまさにこの作品が聖者伝であることを象徴的に示している。主人公の没後奇蹟が顕わされ、その遺体が朽ちぬものであると明らかにされることは聖者伝の必須の条件なのである。（アレクサンドルの遺体もかれの玄孫ドミトリー・ドンスコイのクリコヴォの戦の直後の一三八一年に、ウラジーミルにおいて府主教キプリアンによって朽ちぬ姿で「明るみにだされた」のである。）[45]

このように『伝』が宗教的、教会的な作品であることは明らかであり、内容的にも、いうまでもなくその基調は、アレクサンドルの賛美また聖化である。その意味でかれの大公としての存在の価値を低めるような記述はない。かれの行為は全てにおいて正当化され是認されるだけでなく、いわば誇大にその偉業が吹聴される。たとえば、『伝』のスウェーデン人にたいする、またニェムツイにたいする勝利の描写は、年代記などのそれを上回り、誇張されたものになっている。二つの「比較的小さな」戦、とりわけネヴァ河畔の戦がここでは叙事詩的な規模にふくらまされ、後にそれがロシアと西欧との関係史における転換点、またドイツ人や西欧人の侵略にたいするロシア人の英雄的・愛国的祖国防衛戦の走りとする見方の基にすらなる。だがこれにたいし、スウェーデン系の諸史料は言うに及ばず、『ラヴレンチー（スーズダリ）』ですらがネヴァ河畔の戦に触れていないのは象徴的である。ノヴゴロド系諸年代記はこれに言及しているが、たとえば『ノヴゴロド第一（古輯）』でも、先に示したように比較的淡々と伝えるだけである。これが大会戦であったという印象は必ずしも得られない。また一二四二年のチュード湖上の戦いについても同様である。『ラヴレンチー（スーズダリ）』などは記述自体がきわめて簡潔であるだけでなく、アレクサンドルではなくアンドレイが主役であるかのような扱いをしている。とても当時の人々によりロシア・ドイツ間の大決戦、ロシア側の大勝利と認識されていたとは考えられない、とするフェンネルの指摘もあながち非歴史的とはいえない。これらのことはすでに前章に記した通りである。[46]

『伝』には以上のように、公の全面的正当化や聖化、行為の是認また誇張がみられ、当然予想されることとはいえ、いわば伝記的「事実」の記録という意味ではいかなる意味においても決して客観的ではないのであるが、その点は、たとえば次のような事実に明確に現れている。すなわち『伝』にはスヴャトスラフ大公の即位（一二四六年）のテーマ、またモンゴル宮廷における、アレクサンドルがキエフ大公に、アンドレイがウラジーミル大公に任じられるというテーマ、とりわけアレクサンドルが弟に代わってウラジーミル大公位に就任する経緯に関するテーマ、いずれもウラジーミル大公位をめぐる微妙な問題で、解

釈の仕様によってはアレクサンドルの名誉を損なう恐れのあるものであるが、『伝』ではそれらに関する言及がみられないのである。『伝』では、バトゥの呼びだしに応じてサライに赴いたアレクサンドルをカンが厚遇したことが述べられた後、いわば唐突に「そののちバトゥ・カンは［アレクサンドル］公の弟アンドレイに対して怒りをもよおし、軍司令官のネヴリュニ［ネヴリュイ］を送って、スーズダリの地を討たせた」と記される。アンドレイに代わってアレクサンドルが大公位に就いた経緯は、すでに記したように、アレクサンドルの評判を落とす可能性があったので、『伝』はその点に立ち入ることを避けているようにみえる。『伝』はアレクサンドル大公の正当化をこのような形で行っているのである。それは全体としてはアレクサンドルやその子孫の立場を代弁していると考えられる『ラヴレンチー（スーズダリ）』などと比較しても、主人公への賛美と正当化の志向が格段に強いといえる。

『伝』が必ずしも事実を伝えていない、あるいはそのことを目的としていないという意味で最大のポイントとなるのは、当時のルーシにみられた反アレクサンドル的な動きにたいする沈黙であろう。すなわち、初期の諸年代記は既述の如く、一二五五年、一二五七～一二五九年、一二六二年にルーシ各地において、相当規模の反大公的運動が起ったことを伝えているのであるが、『伝』はそれについてもまったく口を閉ざしているのである。すでに別稿において詳しく検討したように、一二五七～一二五九年、一二六二年の蜂起・騒擾が反タタール税の、したがってそれを強行しようとした大公の親タタール政策にたいする反対運動であったことは、確かなようにみえる。[47] 一二五五年のノヴゴロド民によるヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公招聘とヴァシーリー・アレクサンドロヴィチ公追放も、いうまでもなくアレクサンドル大公の権威を否定する動きであった。『伝』のこの点に関する沈黙は、歴史的「事実」を曲がりなりにも、また部分的にせよ、そしてある特定の立場からにせよ、記録しようとする志向性を示す年代記類（もちろんそこにおいても「事実」に目をつぶることはしばしばみられるのではあるが）とは、『伝』が基本的に異なる作品であることを、もっともよく物語っているといえよう。

もちろんこのことは『伝』が歴史史料としてまったく価値を持ちえないことをただちに意味するものではない。とりわけ、史料（また資料）そのものの絶対量が極端に少ない中世前期において、これを考慮の外におくことはむしろ愚かしいことであろう。記述内容を額面通りにとったり、無批判に利用することが問題なのであって、利用すること自体が問題なのではない。聖者伝にあってとりわけ重要であると思われるのは、作者の意図の問題である。すでに示したように、『伝』においては作者が口をつぐんでいる（と、他の年代記などの史料との比較で明らかになる）ことが、大きな意味を持っていた。たとえば作者は何故、その件について触れないのかと問うことで、さまざまな事実が浮かび上がってくる可能性があるのである。『伝』はこのような意味で十分に歴史史料としての役割を果たしているように思われる。

『伝』の後代の版については、歴史的存在としてのアレクサンドルの把握のためにはその価値は下がってくるとはいえ、上に示したのと

はまた別の意味でもその存在意義を確認できるように思われる。この点で貴重な例を提供してくれるのは『伝』の第三、第五の二つの版である。これらについてもベグノーフがそれぞれ興味深い研究を発表しているので、それらを手掛かりにみてみよう。

まず第三版である。[48] この版はすでに示したように、一五世紀後半のノヴゴロドで成立したと考えられるが、ベグノーフによれば、一三世紀八〇年代にウラジーミルにおいて成立したと考えられる『伝』原初版は、しばらく（一三、一四世紀）の間はノヴゴロドではほとんど注目されてこなかった。それは共和制都市ノヴゴロドの存在と関わっている。ノヴゴロドは外部、とりわけ政治的力量を次第に増大させつつあるウラジーミルの、一四世紀に入ってはモスクワの、大公権力に警戒心を抱いており、たとえ一時はノヴゴロド公として深いつながりのあったアレクサンドルといえども、ウラジーミル大公としてのかれを手放しで礼賛することは憚られたのであった。つまり『伝』は成立後しばらくの間はウラジーミル地方の作品であり、アレクサンドル公自身もいわば地方的聖人に留まっていたのであった。『伝』がノヴゴロドの早期の年代記伝統のなかに反映されていなかったのも頷けるのである。それが『ノヴゴロド第一（古輯）』に欠けていることは、『ラヴレンチー（スーズダリ）』にその第一版が含まれているのを考慮に入れるとき、象徴的であるといえる。

ノヴゴロドの文学活動において『伝』が注目され出したのは、一五世紀前半である。ノヴゴロドと関係がある『ソフィースキー・ブレーメンニク』と呼ばれる一四三三年の集成に、『伝』の、ベグノーフの言う第一版第二群に属するテクストが現れるのである。[49] このころノヴゴロドでは『ノヴゴロド第一（古輯）』の記事と『伝』第一版とが組み合わされて、『伝』第二版（三群に分けられる。第一群は今日『ノヴゴロド第一（新輯）』に、第二は『ソフィヤ第一』、第三はリハチョフ写本にみられる）やさらには第三版も成立している。

そこでこの『伝』第三版（ノヴゴロドでやや前に成立した『伝』第二版を基に作成された）であるが、これは内容からして『伝』の諸写本のなかでもとりわけ「世俗的な」性格が強く現れた作品となっている。[50] マンシッカはこの版は『ソフィヤ第二』を基に、一六世紀前半（マカーリー府主教期以前）に作成されたと考えたが、[51] セレブリャンスキーはこれを批判して、この版と『ソフィヤ第一』の関係は逆で、前者が後者に影響を与えたこと、前者はおそらく一四世紀の成立で、その著者はおそらく『伝』の原初版を知っていたと考えた。セレブリャンスキーによれば、この世俗的色彩の濃い版（かれの言う「特殊」版）は、「一三～一四世紀の北東ルーシの文学活動における、至福なるアレクサンドル公の特殊な世俗的伝記の存在」を証明するものである。[52] つまりこれを換言すれば、『伝』はそもそもアレクサンドル没後間もなく、公の従士の一人によって世俗的、英雄伝的な作品として書かれたのだというのである。

すでに記したように、セレブリャンスキーの説は多くの研究者の支持を得たが、エリョーミンやフィリップ、とりわけベグノーフから強い批判を受け、今日ではもはや維持しがたくなっている。その論拠についてここで記すことはしないが、何よりもこの版が第二版、まして

や第一版に比して後代のものであることがテクスト論的に明らかにされたことが大きい。

それではこの第三版は研究上いかなる意味をもちうるのであろうか。まず注目されるのは、『伝』の第二、第三版の成立が一五世紀中葉であるということは、アレクサンドルはそれまでノヴゴロド地方では、おそらく聖人とは見られていなかったことを暗示している。これが具体的に何を意味するかは簡単には言えないが、少なくとも、ノヴゴロドとモスクワの次第に厳しさを増しつつある緊張関係が背景にあったことは確かなことのようにみえる。すなわちすでに述べたように、ノヴゴロドは、結局はウラジーミル大公となり、モスクワ王朝の祖となった（モスクワ初代公ダニールはかれの末子である）アレクサンドルにある種の警戒感を抱き続けたことがうかがえるのである。そしてそれはまたアレクサンドルの聖化、英雄化が全ルーシ的にはきわめてゆるやかに進んだことをも示している。広範かつ急速な聖化はこの後、イヴァン雷帝治世にモスクワ府主教マカーリーの下で大々的な教会改革が行われ、多数の修道士と並んでアレクサンドル自身が列聖された（一五四七年）後に進んだものと考えられる。後に検討する『伝』第五版はかれの列聖直後の成立で、このことをよく表わしている。

それでは一五世紀中葉にノヴゴロドに『伝』が登場するに至った理由は何であろうか。この時期がノヴゴロド大主教エウフィーミーの在職期（在位一四二九～一四五八）とほぼ重なることが注目される。ここでノヴゴロド最後の大物大主教であるこの人物のことを詳しく述べることはできない。ただかれがノヴゴロド教会の権威と自立性を守ろうとして奮闘したことは指摘しておかなければならない。かれは一四三九年に九人のノヴゴロドの高名な聖職者を列聖したが、その多くはウラジーミル・スーズダリ諸公の圧力の前にノヴゴロドを守ろうとした聖人たちであった。またかれは在職中に合わせて二〇にのぼる教会を新たに建てたり、ノヴゴロドの自治が実質的であった時期（一二世紀）の諸教会を再建したりしたが、このようにしてノヴゴロド教会の権威を全ルーシにむけて強調しようとしたといわれている。[53]

かくしてエウフィーミー期の名の知れぬ著述家が、かつてノヴゴロド公であったアレクサンドルの存在に注目し、これを何よりも自国の、しかも全ルーシ的英雄として取り上げようと考えたとしても不思議ではない。したがって、それまで北東ルーシの聖人として『伝』に描かれていたアレクサンドルを、「ノヴゴロドの英雄」として描こうというのが第三版の著者の意図するところであっただろう。アレクサンドルが一二四〇年と一二四二年に、それぞれネヴァ川河畔とチュード湖上でスウェーデン人とドイツ騎士団を撃破したその人に外ならなかったからである。そして著者のこうした志向が第三版の内容と性格を決定した。それは救国の英雄を描くのにふさわしい、軍記物語的読み物の特徴を強く帯びるに至った。「聖人性」やキリスト教的徳目に代わり、勇気、大胆、豪毅、沈着などの世俗的徳目が強調されることとなったのである。

このように考えるとき、『伝』第三版は、アレクサンドルの歴史的実像をさぐる目的のためにはやや価値が落ちるとはいえ、作成された時期のノヴゴロドの政治的、とりわけ思想的状況を明らかにするため

には、貴重な証言を提供していると考えることができる。『伝』の後代の版の一つの効用がここにはあるといえよう。

他方『伝』第五版（一九七六年時点でのベグノーフの呼び方である。かれは一九九五年にはこれを第六版としている[54]）の方は、ベグノーフによれば、一六世紀プスコフにおいて成立した。作者はよく知られた著述家、司祭ヴァシーリー＝ヴァルラームである。この版とその作成者に対する諸研究者の評価は、予想される通りきわめて厳しいものである。クリュチェフスキー、マンシッカ、セレブリャンスキーなどはおしなべて司祭ヴァシーリーを才能のない著述家、レトリックに関心を払うあまり、事実の記述をおろそかにする作家、さらに伝記作者としての明確な意識と独創性に欠ける人物、と低い評価しか与えていない[55]。アドリアノヴァ＝ペレッツも「この［ヴァシーリー＝ヴァルラームの］伝記は歴史的価値を有していない。プスコフの文学活動における聖者伝的紋切り型の普及を物語るだけである」と手厳しい[56]。おそらく歴史的存在としてのアレクサンドルの研究史料としては、これら、少なくともアドリアノヴァ＝ペレッツの評価は正しい。しかし『伝』、ないしその後代の版そのものの価値をこのように一方的に低めることは、この場合にも必ずしも正しいとはいえない。

ベグノーフによれば、ヴァシーリー＝ヴァルラームは新たな版を作成するにあたって、言うまでもなく先行する四つの版を利用したが、そのいずれにも満足できなかったという。とりわけ上記第三版には以下の理由で強い不満を抱き、それは史料としてはまったく利用されなかった。かれはウラジーミル版（第一版）におけるアレクサンドル公の事績の単純、素朴な列挙に同意できなかったし、ノヴゴロドの年代記情報と『伝』のそれをまとめた第二版における年代記的・物語的記述方法にも、ましてや、公を勇敢で雄々しい練達の戦士として、またマケドニアの英雄アレクサンドルや古代のアキレウスにも匹敵するルーシの地の防衛者として描く、叙事詩的誇張に満ち、世俗的色彩の強い、換言すれば、公を神から自立した存在として取り扱うような、あまりに人間的な第三版にはとくに大きな不満を覚えたという。かれは神をより前面に出す、よりキリスト教的で教会的な、純粋な聖者伝を著そうとしたというのである。

第四版はウラジーミルのロジェストヴェンスキー院修道士ミハイルが一五四七～一五五〇年に、多くの聖人を創りだした府主教マカーリーの流派に近い精神で書き表したもので、ある程度ヴァシーリー＝ヴァルラームの志向にもかなうものであった。ただかれは『伝』の聖者伝としての性格をより強調しようとした。アレクサンドルはかれにとってよりよきキリスト教徒、偉大なる奇蹟成就者にして聖なる尊師でなければならなかった。このようにして第五版はキリスト教的に理想化された『伝』となった。

後代に、このような精神で著されたヴァシーリー＝ヴァルラームの版が、アレクサンドルの歴史的実像をさぐるための史料としてふさわしいものであることはありえない。しかしこの版そのものの利用価値がないわけではない。ベグノーフはそのいくつもの特徴の中から特に目につく二点を挙げている。第一点は、プスコフ（及び言うまでもなくノヴゴロド地方）を防衛する戦闘に際して、アレクサンドルにたい

し聖三位一体と一二世紀プスコフの英雄フセヴォロドーガヴリール公（ウラジーミル・モノマフの孫）からの助力があったことを強調する場面が、少なくとも五箇所あることである。これは第五版がプスコフとの強いつながりをもつことを示すものであるが、これをプスコフの分離主義的傾向の残滓ととることはもちろん正しくなかろう。時はすでに一六世紀中葉、プスコフが最終的にモスクワに併合されて四〇年近く経過している。プスコフのトポスの強調は、プスコフの文化的伝統にたいするヴァシーリー修道士の愛着を表明していると考えるべきであろう。すでに統一国家の一部に成り果てたかのような一地方にも、すぐれた文化的伝統のあったことをこの版はさりげなく示しているのである。

第二の特徴は、本稿にとってより重要である。すなわち、第五版においてはアレクサンドルのオルダー参りの描写に際して、公がバトゥの前で毅然として振る舞ったことが強調されている。これは言うまでもなく事実とは考えられず、一種のフィクションであるが、そこではそれだけでなく、その主人公が、バトゥの陣営で現実に殉教の死をとげたチェルニゴフ公ミハイルの例とならべて描かれているのである。[67] これはベグノーフによれば、プスコフ（とノヴゴロドそして全ルーシ）の英雄であるアレクサンドルが、タタールに抵抗し、「信仰のために」殉じた聖人と同格の存在と見なされているということを示している。こうして第五版では、アレクサンドルの一層の聖人化、反タタール的英雄化がなされていることを知ることができるのである。後者の要素は、そもそもモスクワが公然とタタールに対し叛旗を掲げることとなった時期（一五世紀後半）以後において考えられるようになったのであるが、それが一六世紀中葉イヴァン雷帝期の愛国的精神の高揚の時代にふさわしく強調され、その後のロシア人のアレクサンドル観に大きな影響を与えることになったと考えられるのである。

注

（1）Kliuchevskii V. Drevnerusskiia *zhitiia sviatykh kak istoricheskii istochnik*. M., 1871; Serebrianskii N.I. Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia. Obzor redaktsii i teksty. *ChOIDR*. 1915, kn.3.

（2）Budovnits I.U. *Monasyri na Rusi i bor'ba s nimi krest'ian v XIV-XVI vv. (Po zhitiiam sviatykh)*. M., 1966.

（3）Lur'e Ia. S. O nekotorykh printsipakh kritiki istochnikov. *Istochnikovedenie otechestvennoi istorii*. I, 1973, s.78-100; ルリエーの否定的な見解にたいし、まずパシュートが、ついでベグノーフが、それぞれとりわけ『伝』に注目しつつそれを批判し、後二者は聖者伝の史料的価値を評価する立場を表明している。ここでこの問題について立ち入ることは控えるが、問題は、聖者伝に史料的価値を認めるか否かではなく（ルリエーもそれを否定するものではない）、それがどのように利用されるべきか、「史料」の批判的利用法はどうあるべきかという点にあることを指摘しておく。歴史的「事実」を求めるためには、聖者伝は慎重に取り扱われなければならない史料であることは明らかであるからである。その意味ではパシュートらの批判は問題を矮小化しているようにみえる。Pashuto V.T. K sporam o dostovernosti zhitii. *ISSSR*.18(1974), s.208-209; Begunov Iu.K. Die altrussischen Quellen zu Pelgusij-Filipp, dem Stammvater der Pelkonen. *FOG*. 28(1981), SS.14-15; Begunov Iu.K. Drevnerusskie istochniki ob Izhortse Pelgusii-Filippe, uchastnike nevskoi bitvy 1240 g. *Drevneishie*

gosudarstva na territorii SSSR. 1982 god, M., 1984, s.82-84.

(4) *PSRL*.I : 477-481 ; *Pskovskie letopisi.* Vyp.II, M., 1955, s.11-16.

(5) Begunov Iu.K. Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature XIII-XVIII vekov. v : *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha.* SPb., 1995, s.170. 今日用いられる一般的なテクストは、Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury. «Slovo o pogibeli russkoi zemli»* M.-L., 1965, s.159-180, 187-194（後者はベグノーフにより復元されたテクスト）; *Pamiatniki literatury Drevnei Rusi. XIII vek.* M., 1981, s.426-439 (V.I.Okhotnikova による校訂と現代露語訳); *Biblioteka literatury Drevnei Rusi.* t.5, SPb., 1997, s.358-369 (V.I.Okhotnikovaによる校訂と現代露語訳）にみられる。ベグノーフもオホートニコヴァも第一版に属する同じ写本（GIM, Sinodal'noe sobranie, No.154. 一五世紀末）を底本としている。

(6) これらの刊本については、Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.*s. 12-16を参照のこと。

(7) Mansikka V. Zhitie Aleksandra Nevskogo. Razbor redaktsii i tekst. *Pamiatniki drevnei pis'mennosti.* t.CLXXX., SPb., 1913.(Reprint, Leipzig, 1984), [Prilozhenie] s.1-10.

(8) マンシッカ本を底本とした一連の翻訳のリストは、Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.13, prim.2をみよ。邦訳は中村喜和「『ルーシの地の滅亡の物語』について」、『スラヴ研究』五、一九六一、八六―九五頁。同編訳『ロシア中世物語集』筑摩書房、一九七〇年、二四〇―二五一頁は、その後に刊行されたベグノーフ編のテクスト（注(5)参照）を底本にしている。

(9) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.*

(10) Bugoslavskii S.A. K voprosu o pervonachal'nom tekste Zhitiia velikogo kniazia Aleksandra Nevskogo. *Izvestiia Otdeleniia russkogo iazyka i slovesnosti Akademii nauk.* t.XIX, SPb., 1915, kn.1, s.261-290.

(11) Moiseeva G.N. Novyi spisok povesti ob Aleksandre Nevskom. *Russkaia literatura.* 1964, No.1, s.87-97.

(12) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.*s.16-17, 195-212.

(13) 以下の『伝』第一版、第一群及び第二群に関するベグノーフの解説は、Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury,* s.17-20, 46-55をみよ。

(14) 以下Lvと『伝』のその他の写本の関係については、Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.55-56.

(15) たとえばマンシッカである。かれは『伝』が独立の作品として執筆され、後に『ラヴレンチー（スーズダリ）』の原史料、すなわち一四世紀初の全ルーシ年代記集成に取り入れられたとする。Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo. s.49-51, 58. またドイツのフィリップもセレブリャンスキーを批判する中で同様の見解を表明している。Philipp W. Ueber das Verhaeltnis des «Slovo o pogibeli Russkoi zemli» zum «Zitie Aleksandra Nevskogo». *FOG.*5, 1957, SS.18-20.

(16) Okhotnikova V.I. Povest' o zhitii Aleksandra Nevskogo. *Slovar' knizhnikov i knizhnosti Drevnei Rusi. XI-pervaia polovina XIV v.* L., 1987, s.354-363. すでにセレブリャンスキーがこうした見解を表明していた。Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia. s.176-182.

(17) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.50-51

(18) プリショールコフやフィリップは、『伝』が一二六三年に北東ルーシ年代記集成のために執筆されたとする、Priselkov M.D. *Istoriia russkogo letopisaniia. XI-XV vv.* Podgotovleno k pechati V.G.Vovinoi, SPb., 1996, s.150-151（初版は一九四〇年）; Philipp, Ueber das Verhaeltnis.S.27.

(19) マンシッカ、セレブリャンスキー、リハチョフらの立場である。Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo. s.58 ; Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia. s.177 ; Likhachev D.S. Galitskaia literaturnaia traditsiia v zhitii Aleksandra Nevskogo. *TODRL.* t.V, M.-L., 1947, s.37-38.

(20) Begunov, Kogda Zhitie Aleksandra Nevskogo voshlo v sostav

Lavrent'evskoi letopisi ? *Die Welt der Slaven.* 16 (1971), SS.111-120.

(21) Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia. s.192-212.

(22) たとえば、V・M・イストリン（Istrin V.M. *Ocherk istorii drevnerusskoi literatury.* Petrograd, 1922, S.244ff.）、V・L・コマローヴィチ（*Istoriia russkoi literatury.* t.II, ch.1, M.-L., 1945, s.50-56）、D・S・リハチョフ（Galitskaia literaturnaia traditsiia. s.35-36）、またA・S・オルロフ（Orlov A.S. *Kurs lektsii po drevne-russkoi literature. Drevniaia russkaia literatura. XI-XVI vv.* 2-e izdanie, M.-L., 1939, s.127）、O・スクリーピリ（Skripil' O. Literatura vtoroi chetverti XIII veka-1380-kh godov. Vedushchaia rol' v literature natsional'no-osvoboditel'noi temy. v: *Istoriia russkoi literatury.* t.I, Pod red. D.D. Blagogo, M.-L., 1958, s.148-151）、I・U・ブドーヴニッツ（Budovnits I.U. *Obshchestvenno-politicheskaia mysl' drevnei Rusi. XI-XIVvv.* M., 1960, s.309-310）、M・N・チホミーロフ（Tikhomirov M.N. *Istochnikovedenie istorii SSSR.* M., 1962, s.121）などがセレブリャンスキーの説を受けいれている。

(23) Gudzii N.K. O «Slove o pogibeli Ruskyia zemli.» *TODRL.* t.XII, 1956, s.533; Eremin I.P. O khudozhestvennoi spetsifike drevnerusskoi literatury. *Russkaia literatura.* L., 1958, No.I, s.80; Philipp, Ueber das Verhaeltnis.SS.26-27; Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.66-69; Okhotnikova, Povest' o zhitii Aleksandra Nevskogo. s.354-355.

(24) 以下の論述に際しては Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo, s.11-32 が参考になる。

(25) 邦訳ではここはアレクサンドルの言としてではなく、作者のプスコフ人への警告の言と理解されている。これはこの邦訳が底本としたベグノーフの刊行テクストでは、アレクサンドル自身の言とされているので、やや理解に苦しむところである（中村編訳『中世ロシア物語集』二四七頁。Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.172.）。もっとも同じベグノーフが復元した「原初版」テクスト（『敬神なる大公オレクサンドルの伝記と勇気の物語』Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.187-194）では、ここは作者の言となっている（Ibid., s.191）。

(26) たとえば、Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo, s.15-16; Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.57-58; Okhotnikova, Povest' o zhitii Aleksandra Nevskogo. s.356-357.

(27) Likhachev D.S. Galitskaia literaturnaia traditsiia., s.36-56. さらに Likhachev D.S. *Russkie letopisi i ikh kul'turno-istoricheskoe znachenie,* M.-L., 1947, s.247-267 をも参照。

(28) *PSRL.*II: 813; Likhachev, Galitskaia literaturnaia traditsiia. s.44-45.

ここで一言説明が必要である。実は、遊牧民が公の名を出してわが子を脅かすという表現は『ルーシの地の滅亡の物語』中にもある。そこでは、ポーロヴェツがウラジーミル・モノマフの名を出して、わが子を脅かしている。リハチョフはこの『滅亡の物語』を『伝』の序文、つまり『伝』の一部をなすものと理解しているので、『伝』にはこうした箇所が二か所あり、外には上記『ガーリチ・ヴォルィニ』六七五九年の項だけだとしたのである。

(29) Priselkov, *Istoriia russkogo letopisaniia.* s.157. なお以下の府主教キリルに関する記述は、基本的にはリハチョフの上記論文に依拠している。

(30) Ibid., s.157-158.

(31) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.58-61.

(32) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.60-61. ただここでベグノーフの、大公位を争う両公とキプチャク・カン国の相対立する二勢力との結びつきの第一段階に関する具体的説明には混乱があるように思われることを指摘しておきたい。すなわちかれの描く像は次のようである。最初アンドレイが大公ドミトリーをノガイ「カン」（実際にはノガイはカンではなかった）の前に告発して、ノガイのタタール軍とともに北東ルーシを襲い、これを荒廃させた。大公ドミトリー

はまずノヴゴロドへ、さらにはプスコフへ逃れる。その間タタール軍は二度目の北東ルーシ攻撃を行っている。ドミトリーはそこでノガイのオルダーへ逃れ、正しい裁きを乞う。そしてかれは一二八三年に大公位に復帰することに成功する。以上である。しかしベグノーフに先立ってオルダーとルーシの関係を詳細に調べていたナソーノフによれば、アンドレイが頼ったのは正式のカン、トゥダ・モンケであり、これに対してドミトリーの方が、カンの対抗馬ノガイに助力を乞うたという。こちらの説明の方が正しいようにみえる。Nasonov A.N. *Mongoly i Rus'. Istoriia tatarskoi politiki na Rusi.* M.-L., 1940 (Reprint 1969), s.72-73.

(33) 中村喜和「『ルーシの地の滅亡の物語』について」七三一九五頁。

(34) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.71-83. ベグノーフのこの研究の後、両作品を結びつけて考えようとするのは、管見の限りでは、A・N・ウジャンコフのみである。かれは両作品のみならず、「ダニール・ガリツキー年代記（レトピーセッツ）」（『ガーリチ・ヴォルィニ年代記』に含まれている）をも結びつけて考えている。（著者はダニール公の印璽官、のちの府主教キリルとする。）Uzhankov A.N. Nekotorye nabliudeniia nad «Slovom o pogibeli Russkoi zemli». K voprosu o meste napisaniia i vremeni prisoedineniia ego k «Zhitiiu Aleksandra Nevskogo», *Germenevtika drevnerusskoi literatury.* Sb.9, M., 1998, s.113-126. しかしこれは例外で、たとえば以下に挙げるA・A・ゴールスキーなどのように、今日『滅亡の物語』について論じる者は、ベグノーフ説を受け入れながら、もっぱらその成立年代、また成立の事情などをめぐって議論を展開している。Gorskii A.A. Problemy izuchenii «Slova o pogibeli Ruskyia zemli», *TODRL.* t.43, 1990, s.18-38; Gorskii A.A. K voprosu o datirovke «Slova o pogibeli Ruskyia zemli», *TODRL.* t.51, 1999, s.311-320; Pliguzov A.I. Literatura. v: Fennell Dzh. *Krizis srednevekovoi Rusi.1200-1304.* M., 1989, s.268-269.

(35) Okhotnikova, Povest' o zhitii Aleksandra Nevskogo.s.355-362.

(36) Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature.s.171.

(37) Lur'e, *Rossiia Drevniaia i Rossiia Novaia.* SPb., 1997,s.101.

(38) Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature. s.163-165.

(39) Begunov Iu.K., Aleksandr Nevskii v pskovskoi literature XV-XVI vv. *Zeitschrift fuer Slawistik.* Bd.21, 1976, S.316.

(40) 第二版以後の諸版の成立については、Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature. s.164-165, 168による。

(41) Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury.* s.20, 57によれば、この第二版は『ノヴゴロド第一（新輯）』に含まれている。

(42) Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature. s.164 第五版はおそらくはウラジーミルのロジェストヴェンスキー院修道士ミハイルにより、府主教マカーリーの『大聖人暦』のために編まれた。イヴァン雷帝治世の一五四七年、アレクサンドルは全ルーシ的聖人として列聖されたが、それとの関連でであろう。ただし注意すべきは、ベグノーフは一九七六年段階ではミハイルの手になる版を第四版と呼んでいた（Begunov, Aleksandr Nevskii v pskovskoi literature. s.316）。

(43) Kliuchevskii V.O. *Kurs lektsii po istochnikovedeniiu.* Lektsiia X., Sochineniia v vos'mi tomakh. t.VI, M., 1959.s.70; Kliuchevskii, *Drevnerusskiia zhitiia sviatykh.* s.69; Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo. s.17-18. セレブリャンスキーの見解とそれを支持した研究者たちについては上述二一頁注(22)を参照。

(44) もちろんまったく例外がないわけではない。おそらく唯一の例外は『ラヴレンチー（スーズダリ）』中の『伝』における、六七四八（一一四〇）年の明示である。*PSRL.* I:479.（ただし他の年代記中の『伝』や、『伝』の個々の写本においてはこうした年代表記はみられない。）それゆえ『伝』に「年代」表記はまったくみられないとするエリョーミンは不正確である。Eremin I.P. *Lektsii i stat'i po istorii*

drevnerusskoi literatury. Izd.2-e., L., 1987, s.141.

(45) Makarii (Bulgakov), *Istoriia russkoi tserkvi*, Kniga III, otdel 1, M., 1995, s.156-158 ; Khoroshev A. S. *Politicheskaia istoriia russkoi kanonizatsii. XI-XVI vv.* M., 1986, s.124. なおベグノーフによれば、アレクサンドルの朽ちぬ遺体の発見は一三八一年の春、クリコヴォ戦の後のことであるという。Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature, s.164.

(46) スウェーデンの史料にこの戦についての記述が欠けていることは周知の事実であるが、これについてはさしあたり次を参照のこと。Lind J.H. Early Russian-Swedish Rivalry.The Battle on the Neva in 1240 and Birger Magnussons' Second Crusade to Tavastia. *Scandinavian Journal of History*, 16, 1991.pp.269-295 ; Lind D.G. Nekotorye soobrazheniia o Nevskoi bitve i ee znachenii. v : *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha*. s.44-54. アレクサンドルのスウェーデンおよびニェムツィに対する戦とフェンネルの見解については、本稿（上）六六－六七、六九－七〇、七二頁、また拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」二四－二六頁を参照。

(47) 拙稿「ルーシとモンゴル」。

(48)『伝』第三版に関する以下の考察は、Begunov Ju.K. Die Vita des Fuersten Aleksandr Nevskij in der Novgoroder Literatur des 15. Jahrhunderts. *Zeitschrift der Slavistik*. Bd.16 (1971), SS.88-109 に依拠している。

(49) *PSRL*.V [SPb., 1851] : 176-181 ; *PSRL*.III : 289-306.

(50) テクストは Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia. Teksty, s.121-123 ; Mansikka, Zhitie Aleksandra. [Prilozhenie] s.11-14 ; Begunov, Die Vita des Fuersten Aleksandr. SS.105-109. テクストの呼び名は研究史上さまざまである。マンシッカは「特別 osobennaia」版ないし第二版と、セレブリャンスキーは「特殊 osobaia」版と、コマローヴィチは「プロローク prolozhnaia」版（すなわち、教会暦用簡略版）と呼んでいる。本稿ではベグノーフに従って第三版と呼ぶ。

(51) Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo.s.106-107.

(52) Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia.s.194-203.

(53) エウフィーミーについては、さしあたり Raba J. Evfimij II. Erzbischof von Gross-Novgorod und Pskov. Ein Kirchenfuerst als Leiter einer weltlichen Republik. *JbfGO*. Bd. XXV (1977), SS.161-173 をみよ。

(54) Begunov, Aleksandr Nevskii v pskovskoi literature. s.311-318 ; Begunov, Zhitie Aleksandra Nevskogo v russkoi literature.s.164. なお以下の「第五版」の考察は、主にベグノーフのここに挙げた一九七六年論文（「プスコフ文学におけるアレクサンドル・ネフスキー」）に依拠している。またこのテクストは、Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo. [Prilozhenie] s.33-48 をみよ。

(55) Kliuchevskii, *Drevnerusskiia zhitiia sviatykh*. s.250-262 ; Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo. s.126-142 ; Serebrianskii, Drevne-russkiia kniazheskiia zhitiia.s.215-217.

(56) *Istoriia russkoi literatury*. t.II, M.-L., 1945, s.522.

(57) Mansikka, Zhitie Aleksandra Nevskogo.s.135-139.

三　結論に代えて－史的アレクサンドル像記述の中間的試み、生涯年表の作成－

以上に、アレクサンドル・ネフスキーに関する主要史料である諸年代記と『伝』についてその大ざっぱな特徴をみてみた。筆者はさらに別稿で、アレクサンドル公に関する主な研究、とりわけ最近のそれについて、分析を試みた。この史料と研究史の両方面にわたる分析の結果はじめて、アレクサンドルの生涯に関する幾分かでも正確な年表を

作成することが可能になってきたと感じている。

その際史料では、とりわけ初期の年代記、『ラヴレンチー（スーズダリ）』、『ノヴゴロド第一（古輯）』、『ニキフォルの簡略年代記』、部分的には『ソフィヤ第一』などが相対的に早い段階の認識を伝えている可能性の高いことが明らかになった。『伝』は、これを無視することはできないにせよ、歴史的事実の探求のためには、慎重に取り扱うべきものであることも判明した。それはたとえば、自ら伝えているアレクサンドルとスウェーデンやドイツ（リヴォニア）騎士団との戦が事実であることは否定できないとしても、その戦が何時のことで、現実にどのように行われたかについての史料とはなりえぬものであることが明らかであるからである。それはアレクサンドルがバトゥのもとに赴いたことは伝えるが、何の目的でかれが出かけたのか、またそれは何時のことなのか、何度目のことなのか、さらにかれは生涯で合計何度オルダーへでかけたのか、などについては語ってくれないのである。

一方アレクサンドルについてふれる研究者のなかにも、参考になる者とそうではない者がいた。以下に史的アレクサンドル像記述の試みを行うに際して、参考にできる研究者とは、精々のところ、ナソーノフ、パシュート、フェンネル、クーチキン、エゴーロフ、ゴールスキーなどに過ぎなかった。これに史料学・文献学的にアプローチした、ベグノーフ、ルリエー、スルミナなどを加えれば、比較的最近の主な研究者のリストはほぼ完全となる。

以下はこうした史料と、研究者の考察及び記述を参考にした史的アレクサンドル復元の試みである。

ベースとして、Iu・K・ベグノーフが一九九五年に作成した「アレクサンドル年表」[1]を用い、これに加筆・修正する形で記述を試みる。ただこの年表に記載されている事項でも、アレクサンドルへの関係性が直接的でない場合には、断りなしに削除した。またある程度直接的関連を有すると判断される場合でも、削除が適当と判断した場合もあった。すなわち初期の史料では事実として確認できず、後代の典拠に基づく可能性が大であったり、あるいは端的に誤りと判断される記述である。その場合は（　）を付してその旨を示した。

本稿では、ルーシ諸年代記の記述に主に依拠している。ベグノーフはより広範囲な史料を根拠にその年表を作成しているが、典拠を明記していないため、本稿では確認できない場合が多かった。これについては、その旨を記したが、確認作業は今後の課題としたい。

以下、年表中の（　）は、上述の通り、ベグノーフの年表中削除が適当と判断される記述。［　］は逆に本稿の筆者が新たに加えた項目、あるいはベグノーフを補ったり、説明したり、逆に批判し、訂正したりした年、あるいは箇所である。

〈アレクサンドル・ネフスキー年表〉

（一二二〇年五月三〇日）アレクサンドル公、父ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチと母フェオドーシヤの間に生まれる。[2]

（一二二三年、ペレヤスラヴリのスパソープレオブラジェンスキー聖堂で公としての剃髪式挙行。[3]）

一二二三年五月三一日、カルカ河畔でモンゴル軍とルーシ諸公・ポーロヴェツ連合軍が衝突、ルーシ側が大敗を喫す。[4]

一二二八年、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ、二人の息子フェオドルとアレクサンドルを［公代理として］ノヴゴロドに残す。[5]

一二二九年二月二〇日［「乾酪週の火曜日」］、ノヴゴロド人の反ヤロスラフ騒擾。フェオドル、アレクサンドル両公ノヴゴロドを脱出。[6]

一二三〇年一二月三〇日、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ、ノヴゴロド人の招聘を受け、ノヴゴロドに帰着。二週間後、フェオドルとアレクサンドルを残して、ペレヤスラヴリに戻る。[7]

一二三三年六月一〇日、兄フェオドル、婚礼を前に死去。聖ユーリエフ修道院に埋葬さる。[8]

（一二三四年冬、若きアレクサンドル、父ヤロスラフのユーリエフ［デルプト］遠征に同行）[9]

一二三六年、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ、キエフ大公位に就くべくキエフに向う。ノヴゴロドにはアレクサンドルを公として残す。[10]

［一二三六年秋、東の国からボルガルの地に神を知らぬタタールが襲来。］[11]

一二三七年冬～一二三八年春、「バティ［バトゥ］」の侵入。リャザンの地からはじまり、モスクワ、ウラジーミルと攻め落とし、三八年三月四日シチ河畔において時のウラジーミル大公ユーリー・フセヴォロドヴィチを敗死さす。バトゥ軍はトルジョクを落とした後ノヴゴロドまであと一〇〇露里のイグナト・クレストまで進出したものの、それ以上北上はせず、ノヴゴロドは直接被害を受けずにすむ。[12]

一二三八年、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ、シチ河畔で戦死した兄ユーリーの跡をついで、ウラジーミル大公位に就く。アレクサンドル、父に代わりノヴゴロド公となる。[13]

一二三九年、アレクサンドル、ポロツク公ブリャチェスラフの娘をめとり、トロペツで婚礼をあげる。シェロニ川沿いに砦を建設。[14]

一二四〇年、アレクサンドルに長子ヴァシーリー誕生。[15]

一二四〇年、「スヴェイ［スウェーデン人］」の「大軍」が「ノヴゴロドの領土をことごとくとろうと」攻め寄せる。七月一五日、アレクサンドルとノヴゴロド人、ラドガ人がこれを急襲し、打ち破る。スウェーデン側は軍司令官を含む「きわめて多く」の者が倒れ、一方ノヴゴロド側は、「一〇人、あるいはそれより少ない」犠牲に止まった。[16]

一二四〇年、「ニェムツィ［ゲルマン系を中心とする北西ヨーロッパ人、この場合おそらくはリヴォニア騎士団戦士］」らも侵入、イズボルスクを占領し、迎え撃ったプスコフ人を破る。[17]

一二四〇年冬、アレクサンドル、ノヴゴロドと対立し、同市を退去。ペレヤスラヴリの父のもとへ向う。[18]

一二四〇年冬、ニェムツィなどが「ヴォジ［フィン系の人々］」を攻め、さらにノヴゴロドに迫った。ノヴゴロド人は大公ヤロスラフに公の派遣を求める。大公は子のアンドレイを派遣する。ノヴゴロド人は再度大公に使いを送り、上の子アレクサンドルを求める。大公はアレクサンドルを派遣する。[19]

一二四〇年一二月六日［ニコラの日］、バトゥ軍キエフを攻略。[20]

一二四一～一二四二年、キエフ攻略後バトゥ軍は西進、ガーリチ・ヴォ

ルイニからハンガリー方面へ進む。[21]

一二四一年、「アレクサンドル公がノヴゴロドに来て、ノヴゴロドの人々は喜んだ。」アレクサンドル、ノヴゴロド人を率いてコポリエのニェムツィを討つ。[22]

一二四二年四月五日［土］、氷上の戦における勝利。騎士団との講和。[23]

［一二四二年～一二四三年、バトゥ軍西方から戻り、ヴォルガ川下流域、サライーバトゥを中心にキプチャク・カン国を創建。[24]］

［一二四三年、大公ヤロスラフ、「タタールへ、バティのもとへ」出かける。かれは同時に子のコスチャンチンを［カラコルムの］「カノーヴィ［大カーン］」のもとへ送る。ヤロスラフは、バトゥより「ルーシの全諸公の最年長者」に任じられ、帰国する。[25]］

一二四四年五月四日、ヤロスラフ大公の妻、アレクサンドル公の母フェオドーシヤ死去、翌日埋葬される。[26]

［一二四四年、ヴォロジーメル・コスチャンチノヴィチ公［ウグリチ公、アレクサンドルの従兄弟］、ボリス・ヴァシルコヴィチ公［ロストフ公、同再従兄弟］、ヴァシーリー・フセヴォロジチ公［ヤロスラヴリ公、同再従兄弟］「タタールへ、バティのもとへ」出かける。それぞれ自領を安堵されて帰国する。[27]］

一二四五年、「リトヴァ［リトアニア］」人、トルジョクなどを攻撃。ノヴィ・トルグ、トヴェーリなどのルーシ軍これと戦うも苦戦。アレクサンドルがノヴゴロド人を率いて加勢に来たり、これを打ち破る。またアレクサンドルは当時ヴィテプスクにいた長子ヴァシーリーを取り戻し、ノヴゴロドへ向う。[28]

［一二四五年、コスチャンチン・ヤロスラヴィチ公、「カノーヴィチ［大カーン］」のもとから帰還する。ヤロスラフ大公、兄弟や甥らとともに「タタールへ、バティのもとへ」行く。[29]］

［一二四六年、スヴャトスラフ公、イヴァン公［共にアレクサンドルの叔父］ら、「タタールから」帰国する。ミハイル・チェルニゴフスキー公「タタールの地で」殉教する。バトゥ、ミハイル公の孫ボリス［ヴァシルコヴィチ、ロストフ］公をサルタク・カンのもとへ送る。後者はボリスを手厚くもてなし、帰国を許す。同年九月三〇日、ヤロスラフ大公、「カノーヴィチ［大カーン］」のもとからの帰路「異族人の地で」没す。[30]］

［一二四七年、アレクサンドルらウラジーミルにおけるヤロスラフ大公の埋葬式に列席。[31]］

一二四七年、スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ［故ヤロスラフ大公の弟、アレクサンドルの叔父］ウラジーミル大公となる。新大公はアレクサンドルら甥たちを、「かれらに父ヤロスラフが指示したように」諸都市に任じた。[32]

［一二四七年、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公が「タタールへ、バティのもとへ」向う。アレクサンドルも兄弟の跡を追って「バティのもとへ」向う。バトゥは両名を「敬意をもって迎え、カネーヴィチ［大カーン］のもとへ行かせた。[33]］」

一二四八年夏、ローマ教皇［インノケンティウス四世］の最初の書簡［一二四八年一月二二／二三日付け］が［ノヴゴロド経由で、おそらくサライ逗留中でカラコルムへ出立直前の］アレクサンドルに届けら

れる。[34]

［一二四九年冬、アレクサンドル、アンドレイ両公、大カーンのもとから帰着する。アレクサンドルは「キエフと全ルーシの地」に、アンドレイはウラジーミル［大公位］に任じられた。[35]］

（一二四九～一二五〇年、ベグノーフはこの二年間にアレクサンドル、アンドレイ両公がサライからカラコルムに行き、前者は「キエフと全ルーシの地」を、後者は「ウラジーミル＝スーズダリ」を得て帰国したとするが、上記の如く、このときの二人のサライへの出立は一二四七年中、帰国は一二四九年冬、すなわちその年の末のことと考えられる。[36]）

［一二四九年末～一二五〇年］、アレクサンドル公、ウラジーミル及びノヴゴロドへ帰還する。[37]アンドレイ公もともに、ないし同じ頃ルーシに帰国。

［一二五〇年、スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ元大公「タタールへ」向う。[38]］

一二五〇年、府主教キリル、スーズダリの地に到来。[39]

［一二五〇年冬、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公がダニール・ロマーノヴィチ・ガリツキー公の娘と府主教キリルの司式によりウラジーミルで結婚する。[40]］

一二五一年、アレクサンドル重病になるも回復す。[41]

一二五二年、アレクサンドル公、タタールへ向う。全兄弟中の最年長者と認められ、「大いなる栄誉とともに」帰国を許される。同年、アンドレイ公、「ツァーリ」に仕えるよりは逃げる方がよいと考え、「見知らぬ地へ逃げる。」ネヴリュイ麾下のタタール軍がかれを追い、ペレヤスラヴリ付近で追いつく。だがアンドレイは無事逃れる。タタールはヤロスラフ公［アンドレイの弟］の妃を捕らえ、殺害する。同年、アレクサンドルがタタールからウラジーミルに帰着し、父ヤロスラフの座に就けられた。同年、元大公スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ没。[42]

一二五三年、リトヴァ人、ニェムツィがノヴゴロド領、またプスコフ領に侵入する。ノヴゴロド人、プスコフ人がニェムツィを破る。ニェムツィが和を乞うて使者を送ってくる。[43]

［一二五五年、コンスタンチン・ヤロスラヴィチ公没。[44]］同年、ノヴゴロド人がヴァシーリー・アレクサンドロヴィチ公を追放し、プスコフからヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公を招く。アレクサンドル大公ノヴゴロドへ進軍。ノヴゴロド市民内部で分裂。「小さき者たち」は抗戦を主張し、「大いなる者たち」はアレクサンドルを迎え入れようとする。結局三日の対峙の後四日目に妥協がなり、アレクサンドルはノヴゴロドにおける権威を回復する。[45]

一二五六年、ボリス［ヴァシルコヴィチ・ロストフ］公、タタールへ向う。アレクサンドル公は［タタールへ自ら行くことはせずに］贈り物を贈る。ボリス公はウラフチ［ウラグチ］・カンに拝謁し、「栄誉のうちに」帰国する。同年冬、アレクサンドルはスーズダリ人、ノヴゴロド人を率いてエミ［ヤミーフィン系種族］に対して遠征を行う。[46]

一二五七年、アレクサンドル、アンドレイ、ボリス［ヴァシルコヴィチ］らの諸公がタタールへ向い、ウラフチ［ウラグチ］・カンに敬意

を表し、帰国した。[同年冬、グレープ・ヴァシルコヴィチ［ベロオーゼロ］公が「カンの地から、ツェーサリから」帰る。かれはそこ「ヴォルダー」で結婚した。同年冬、タタールの人口調査人が来たり、全スーズダリ、リャザン、ムーロムの地を「数え」、十人長、百人長、千人長、万人長を定め、オルダーへ帰った。ただ修道院長ら聖職者が数えられなかった。タタールの使者はこの年さらに、アレクサンドル公を伴って、ノヴゴロドへも至る。ノヴゴロド人これに反発し、騒動を起こす。ヴァシーリー公はこれに同調し、その後プスコフへ逃亡する。結局ノヴゴロドへの課税は失敗し、タタールは贈り物を持たせられただけで去る。アレクサンドルはヴァシーリーをプスコフから追放し、ウラジーミル地方に送り、その従士団を厳しく罰す。」[47]

（一二五八年、人口調査に関する情報がノヴゴロドに届く。住民の騒擾。ヴァシーリー公も加わる。アレクサンドルが軍を率いて到着し、騒乱を鎮圧、首謀者を処刑。ヴァシーリー公はプスコフへ逃亡するが、その後戻る。アレクサンドルはヴァシーリーに失寵を下し、以後国政に関与させず。[48]）

一二五八年［秋以前］、アレクサンドル、アンドレイ、ボリス、ヤロスラフ［ヤロスラヴィチ］らの諸公がタタールへ向い、ウラフチ・カンに敬意を表し、帰国を許された。[49]

一二五九年冬、タタール調査人、徴税人ベルカイとカサチクが、アレクサンドルとともにノヴゴロドに到来。同市の動揺、市民間に分裂。「小さき者たち」を中心に抵抗強まるも、結局ノヴゴロドは課税に応じ、アレクサンドルは子のドミトリーを公位に就けてタタールとともに去る。[50]

一二六一年、アレクサンドルに子ダニール誕生。後の初代モスクワ公である。同年、サライ府主教座の設立［府主教がサライに主教ミトロファンを任ずる］。[51]

一二六二年、北東ルーシのロストフ、ウラジーミル、スーズダリ、ヤロスラヴリの諸都市で「ベセルメン［ムスリム］徴税人」にたいする暴動が起きる。とりわけヤロスラヴリでは背教者［イ］ゾシマが殺害された。秋、アレクサンドルの子ドミトリーらの［リヴォニア騎士団の都市］ユーリエフへの遠征。アレクサンドルのオルダーへの最後の旅。アレクサンドル、ベルケ・カンに「留めおかれ」、サライで越年する。[52]

一二六三年、サライで越年したアレクサンドル、同地で発病し、回復をみないまま、この年の秋、帰国の途につくが、ゴロジェツで没す。一一月一四日のことであった。遺体はウラジーミルに運ばれ、同月二三日その地のロジェストヴェンスキー［聖母生誕］修道院に埋葬された。[53]

＊　＊　＊　＊　＊

以上に、諸研究及び年代記と『伝』を中心とする諸史料の分析を通じて得られた知見に基づき、アレクサンドル・ネフスキー公の生涯を年表風に再現してみた。ここで検討できなかった史料もあるので、完全なものでは、言うまでもなく、ない。ただ主要な事柄に関してはある程度の精度をもって確定できたと考えている。

そこで最後に断っておくべきなのは、歴史研究における「推測」、あるいは「仮説」の問題である。本稿でもきわめて多くの点で推測を

行っている。場合によっては憶測になっているところもあるかもしれない。本稿の記述があくまでも「ある程度の」精度しかもちえないと考えるのも、もっぱらこのような事情によっている。しかしながら、もしこのことから歴史研究における「推測」の可能性を否定することになるとしたら、それはまた別の意味で問題である。本稿では、「推測」は手段を尽した上でのことなら、当然許されるし、むしろ必要になると考えている。そうではなく単に推測に推測を重ねるような方法（残念ながら、それはあまりに多く見られる現象である）が問題なのだということである。

注

（1）[Begunov Iu.K.] Letopis' zhizni i deiatel'nosti Aleksandra Nevskogo. v: *Kniaz' Aleksandr Nevskii i ego epokha.* SPb.1995, s.206-209.

（2）生年月日については年代記に記述はない。生年についてはベグノーフをはじめ多くの研究者は一二二〇年と考えるが確かな根拠はない。最近クーチキンは一二二一年（五月一三日）と推測している。母の名フェオドーシヤ（おそらくトロペツ公ムスチスラフ・ムスチスラヴィチ・ウダートヌィの娘。ベグノーフはかの女をリャザン公イーゴリ・グレボーヴィチの娘としているが、これにもクーチキンの批判がある）は『伝』の冒頭部に出てくる。アレクサンドルの生年や母親については、拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」三八―三九頁、またKuchkin V.A. Aleksandr Nevskii-gosudarstvennyi deiatel' i polkovodets srednevekovoi Rusi. *OI.*1996-5, s.18-20を参照。

（3）ベグノーフはこう記すが、初期の史料にこうした記述はみられない。

（4）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 445-447;『アカデミー写本によるスーズダリ年代記続編』*PSRL.*I: 503-509;『イパーチー年代記』（一二二四年の項で）*PSRL.*II: 740-745.

（5）*PSRL.*III: 66（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一一八頁。『アカデミー写本によるスーズダリ続編』*PSRL.*I: 511.

（6）*PSRL.*III: 67（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一一九頁。

（7）*PSRL.*III.70（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一二二頁。

（8）*PSRL.*III: 72（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一二五頁。『トロイツカヤ』によれば、フェオドルは六七二八［一二二〇］年に生まれている。これが正しいとすれば、享年一三才ということになる。Priselkov M.D. *Troitskaia letopis'.* M.-L., 1950, s.305.

（9）ベグノーフはこう記すが、可能性としては大いにありうるとしても、アレクサンドル本人の出征については確認できない。*PSRL.*III: 72-73（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一二五頁。ここにはアレクサンドルについての言及はない。『アカデミー写本によるスーズダリ続編』*PSRL.*I: 513でも同様である。

（10）*PSRL.*III: 74（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一二七頁。『アカデミー写本によるスーズダリ続編』*PSRL.*I: 513.にも同様の記述がある。『ノヴゴロド第四』にもみられる。*PSRL.*IV-1: 214.

（11）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 460.

（12）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 460-467;『アカデミー写本によるスーズダリ続編』*PSRL.*I: 514-522;『イパーチー年代記』*PSRL.*II: 778-782; *PSRL.*III: 74-77（『ノヴゴロド第一（古輯）』）の一二三八年の項、『古代ロシア研究』XVII、一二七―一二九頁。ノヴゴロドがモンゴル軍の襲撃を免れた理由については、さしあたり、次を参照。田中陽児「ノヴゴロド『民会』考」（上）『白山史学』第九号（昭和三八年）、一二頁以下、及び同（中）同誌第一〇号（昭和

三九年）一七－二一頁、さらに松木『ロシア中世都市』一〇八－一一〇頁参照。本稿の筆者は、モンゴル軍がノヴゴロド攻撃に至らなかった理由を、このときのノヴゴロド公、若きアレクサンドル（一七才）の巧みな外交に帰するような見解には反対である。

(13)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I: 467;『アカデミー写本によるスーズダリ続編』*PSRL*.I: 522. ヤロスラフの即位をこの年の夏とするのは、ベグノーフの推測である。アレクサンドルが父の後ノヴゴロド公についたとする記述は、『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I: 467や『スーズダリ続編』*PSRL*.I: 522にはみられない。『ノヴゴロド第一（古輯）』にもない。それがみられるのは『ニコン』である。*PSRL*.X: 113. 大公位をえたノヴゴロド公が、同市を去るに際し長子を代理として置いていくのは通常のことであったので、アレクサンドルの場合もそう考えても自然であろう。翌年アレクサンドルがノヴゴロドで婚姻の式を挙げていることもその傍証となる。ベグノーフはさらに、この年、アレクサンドルがドミトロフスクとトヴェーリをも父から与えられたと記すが、これは初期の史料では確認できない。この点は『ニコン』にも記述はない。

(14) *PSRL*.III: 77（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一三〇頁。ベグノーフはアレクサンドルの妻の名をアレクサンドラとするが、この名は初期の年代記にはでてこない。『ソフィヤ第一』、『ニコン』にもない。

(15) 初期の年代記に記述なし。『ニコン』にもない。ただ『ノヴゴロド第一（古輯）』では六七六一（一二五三）年の項に、ヴァシーリーがノヴゴロド人とともにリトアニア人と戦ったことが記されているので、その頃にはかれはすでにノヴゴロド公であったことが知られる（*PSRL*.III: 80;『古代ロシア研究』XVIII、一九頁）。父が前年結婚したことと合わせ考えて、この年長子が生まれたと推測することはできる。

(16) *PSRL*.III: 77（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一三〇頁。このいわゆるネヴァ河畔の戦は『ラヴレンチー（スーズダリ）』では言及されていない。ベグノーフはこのときのスウェーデン軍の侵入を「ローマ教皇グレゴリウス九世の承認をえた」ものとする。それはありえないことではないが、特に年代記にそう記されているわけではない。またスウェーデン軍の「司令官」（『伝』や『ニコン』では「王」とされている）の名は『ノヴゴロド第一（古輯）』ではスピリドンとされており（この名自体はおそらく誤りである。当時のノヴゴロド大主教の名と取り違えたのであろう）、ベグノーフのいうウルフ・ファシという名は年代記にはでてこない。

(17) *PSRL*.III: 77-78（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一三〇－一三一頁。ベグノーフは騎士団軍を率いたのが副団長アンドレアス・フォン・フェリヴェンと明記するが、この名も年代記にはでてこない。ただアンドレアス・フォン・ヴェリヴェンというリヴォニア騎士団副団長が実在していたことは知られている。クレイネンベルク／シャスコーリスキーはこれを一二四二年の氷上の戦のときの指揮官と考えている。ベグノーフはこのとき（一二四〇年）のニェムツィの侵入の際にも、かれが指揮したと考えているようである。*Ledovoe poboishche.1242 g.* s.225.

(18) *PSRL*.III: 78（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一三一頁。

(19) *PSRL*.III: 78（『ノヴゴロド第一（古輯）』）;『古代ロシア研究』XVII、一三一頁。ベグノーフはこの記事を一二四一年の冬のこととする。一二四〇年から一二四一年にかけてのことと考えることはできるが、年が明けてからと断定する根拠は存在しない。ただ『ノヴゴロド第一（古輯）』一二四一年の項に、「アレクサンドル公がノヴゴロドに来て、ノヴゴロドの人々は喜んだ」（*PSRL*.III: 78;『古代ロシア研究』XVIII、二六頁）とあるのを、このときの記事と同一のことをさすと理解するならば、一二四一年初冬のことと考えることはできる。もちろんその場合でも、一二四〇年から一二四一年にかけてのこと、

と理解するのが最善ではある。

（20）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I：470；『イパーチー年代記』*PSRL*.II：784-785.

（21）『イパーチー年代記』*PSRL*.II：786-794.『ラヴレンチー（スーズダリ）』一二四一年の項では、短く「タタールがウグル人［の地、ハンガリー］を征服した」とあるのみである。*PSRL*.I：470；『シメオーノフ』、『一五世紀末モスクワ集成』では、一二四〇年の項の後半部にキエフ攻略後のバトゥ軍のガーリチ・ヴォルィニからハンガリーへの進軍の様子が比較的まとまりよく記述されている。*PSRL*.XVIII：61；*PSRL*.XXV：131. ベグノーフは、バトゥ軍が「最果ての海」すなわちアドリア海まで進んだとするが、この語の典拠は明らかではない。『一五世紀末モスクワ集成』は、バトゥ軍がハンガリー人を「ドナウ川まで追って、かれらを破りそこに三年留まった。かれらはヴォロダヴィ［モルダヴィアか］まで、湖［バラトン湖か］まで［の地］を征服した」（*PSRL*.XXV：131）と記すのみである。他の多くの年代記も同様である。

（22）*PSRL*.III：78；『古代ロシア研究』XVIII、二六頁。『ソフィヤ第一（古輯）』*PSRL*.VI-1：311-312. ベグノーフは、ニェムツィを討ったのが「秋」であったとするが、『ノヴゴロド第一（古輯）』には（新輯にも）この語はない。『ソフィヤ第一（古輯）』の六七四九（一二四一）年の項ではさらに、「王を破ってから［すなわち、ネヴァ河畔の勝利の］三年目の冬に」ニェムツィが押し寄せ、プスコフを取ったが、アレクサンドルが、弟アンドレイ公やノヴゴロド人、下流（スーズダリ）地方人を率いてこれを奪還した、と記される。（ただし、後半部は一二四二年の項で述べられている。そしてこの後に有名な氷上の戦の記述に移っている。*PSRL*.VI-1：311-314.）また『ノヴゴロド第一（古輯）』でも、アレクサンドルによるプスコフ奪還の記事は一二四二年の項にはいってからでてくる。（*PSRL*.III：78；『古代ロシア研究』XVIII、二六頁。）従って、ベグノーフが「一二四一年一二月」と新たな項目を設けて「アレクサンドル……によるドイツ騎士団戦士のプスコフからの放逐」と記すのは、やや不正確である。「一二月」とする典拠も不明である。

（23）『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III：78-79；『古代ロシア研究』XVIII、二六―二七頁。『ラヴレンチー（スーズダリ）』では氷上の戦に関する記述はきわめて簡潔である。*PSRL*.I：470；『ソフィヤ第一（古輯）』*PSRL*.VI-1：312-314 になると記述は相当に詳細になり、『一五世紀末モスクワ集成』*PSRL*.XXV：132-135ではさらに詳しくなっている。

（24）これを明確に記す年代記記述はないが、前後の状況からこのように考えられるということである。エゴーロフはこの国の建国時期を一二四三年初としている。Egorov V.L. *Istoricheskaia geografiia Zolotoi Ordy v XIII-XIV vv.* M., 1985, s.26-27.

なおベグノーフは、この国を「大［ボリシャヤ］オルダー」また「アク・オルダー」と呼ぶが、これらの語は、管見の限りでは、この時期の年代記にはみられない。まず「大オルダー」であるが、ルーシではキプチャク・カン国（この語自体は学術用語であるが）やモンゴル人は、一三世紀には基本的には「タタール」と記されている。「オルダー」という語も一三世紀の年代記に見られないわけではないが（初期の年代記では『ノヴゴロド第一（古輯）』の一二四二年、一二五〇年 *PSRL*.III：79，80；『古代ロシア研究』XVIII、二七、二八頁や『ラヴレンチー（スーズダリ）』一二五七年の項 *PSRL*.I：475 などが早い事例であろう）、ただしこれは後代の改変の結果であるように思われる。ほとんどの場合「タタール」と記されるのが通例である。『ロゴシュキー・レトピーセツ』（一五世紀中頃の成立）*PSRL*.XV-1：31でも、一二四四年の項に「オルダー」の語がみえるが、これは明らかに一五世紀の編者がその時代の慣習に従ってそう記したとみるべきであろう。このように多くは後代の人の手になるものであったり、国というより「カンの本営」を指したりで（*PSRL*.V：213 の場

合など)、いずれにせよ例外的である。同じ『ロゴシュキー』でも、他の場合には「タタールへ」とか「バティのもとへ」という風に記されるのが普通で、「オルダー」という用語が一般化するのは一三世紀末(おそらく一二九三年)以降のことである(*PSRL.XV*:35を参照)。こうしたことから、ルーシでは一三世紀末まではキプチャク・カン国は「タタール」と、またはカンの名前を付して呼ばれるのが一般的であり、それ以後次第に「オルダー」が一般化し、一五~一六世紀の年代記作者らになると、すでにバトゥの建国した国まで、つまり遡求的に、「オルダー」で表記するようになったと考えることができる。「ボリシャヤ・オルダー」は通常一五世紀にキプチャク・カン国が分裂してできた国の一つを指すので、その意味ではここで用いることは明らかに時代錯誤である。確かに『ニコン』*PSRL.XI*:158, 159などは、トクタムィシュの支配地を「大オルダー」などと読んでいるが、より早い段階の年代記『一五世紀末のモスクワ集成』*PSRL.XXV*:277では、一四六〇年の項で初めてこの語が登場している。ちなみに後代の年代記や、またその後は歴史家によってもよく用いられる「黄金のオルダー、Zolotaia orda」であるが、これがバトゥやウズベク・カンの国を指して用いられた最初の例は、一六世紀中葉に成立した『カザン年代記』*PSRL.XIX*:5-8においてであろう。一方当時モンゴル人自身が自らの国をどう呼んでいたかといえば、モンゴリアではその帝国を「大モンゴル・ウルス」と、カーンのことを「大カン(ないしカーン)」と呼ぶのが通例で、これとの対応で、ジュチ(ジョチ)の子孫らもその国を単に「ウルス」(ときに「大ウルス」)と、またその支配者を「カン」と呼び習わしていたという(Fedorov-Davydov G.A. *Obshchestvennyi stroi Zolotoi Ordy*. M., 1973, s.63-67, 118-122; Egorov V.L. *Istoricheskaia geografiia*. s.152-155)。

次に、「アク・オルダー」(白いオルダー)であるが、この語については、たとえば、ティゼンガウゼンが紹介するペルシア語史料『無名のイスケンデル』(ムインーアッディンーナタンズィ)に解説がある。それによれば、ノガイの子らの敗北と逃亡の後、ジュチ・ウルスは二つに分裂した。一つはノガイの子孫らが治める「アク・オルダー」で、ジュチ・ウルスの「左翼」すなわち、東側部分を構成する。他はトクタ・カンの子孫が治める「コク[キョク]・オルダー」(青いオルダー)で、「右翼」すなわち西側部分を占めるという。*Tizengauzen V.G. Sbornik materialov otnosiashchikhsia k istorii Zolotoi Ordy*, II, s.127. Spuler, B. *Die Goldene Horde. Die Mongolen in Russland*. Wiesbaden, 1965(2.Auflage) S.25も、ジュチの長子オルダーの子孫が支配する東方部分を「白いオルダー」(すなわちアク・オルダー)とみ、バトゥの子孫の治める西方部分(ヴォルガ川流域方面)を「青いオルダー」とみている点で、これと同じ立場に立っている。しかるにヴェルナツキーも指摘するように、先のペルシア語史料の紹介者であるティゼンガウゼン自身が別の箇所で記すところでは、クトゥバの詩『ホスレフとシリン』ではキプチャク・カンであるウズベク・カンの子のテイニベク・カンが「白いオルダー」のカンとよばれており、またルーシの史料もジュチ・ウルスの東方部分を「青いオルダー」(『ニコン』一三九二年の項、*PSRL.XI*:152)と読んでおり、こちらの方が正確であるという。(Vernadsky G. *The Mongols and Russia*. New Haven and London, 1953, pp.139-140; Tizengauzen, *Sbornik*, II, s.4, prim.1) 研究者の間でもこちらの立場をとる者が多い。上記ヴェルナツキーの他に、Bartol'd V.V. *Sochinenita*, t.4, s.392; Fedorov-Davydov, «Anonim Iskendera» i terminy «Ak-Orda» i «Kok-Orda». v kn.: *Istoriia, arkheologiia i etnografiia Srednei Azii*. M., 1968, s224-230; Fedorov-Davydov, *Obshchestvennyi stroi*, s.55-60, 119, 159; Egorov, *Istoricheskaia geografiia*. s.160-163. また堀川徹「遊牧ウズベク史研究(1)」『コスミカ』20、一九九〇年。以上からバトゥの国を「アク・オルダー」と呼ぶこと自体は誤りとは言えないが、当時のルーシの人々がそう

呼んだという史料的根拠はない。「青いオルダー」は既述のごとく、ルーシの年代記にも現れるが、「白いオルダー」は、管見の限り、早い時代のルーシの年代記には現れない。『ウスチュグ』一四八一年の項*PSRL*.XXXVII:95に、大オルダーのアフマト・カンが「白い天幕vezha」で殺害されたという記事があるが、これ以外には検証できない。

この項に関して最後に、ベグノーフはバトゥのキプチャク・カン国創建をもって「ルーシ諸公国へのタタールーモンゴルの重いくびき」が樹立されたとしているが、これももちろん問題である。拙稿（「ルーシとモンゴル」）でも示したように、「くびき」は徐々に、あるいはしばらく時をおいて具現化されていったのである。

(25)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:470.『ノヴゴロド第一（古輯）』では一二四二年の項の末尾に記されている。*PSRL*.III:79;『古代ロシア研究』XVIII、二七頁。ここではヤロスラフはバトゥに呼ばれて出かけた、とされている（おそらくこちらの方が事実に近い）。『ノヴゴロド第一（古輯）』ではコスチャンチンに関する言及はない。

(26)『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III:79;『古代ロシア研究』XVIII、二七頁。ベグノーフは五月五日とする。これは*PSRL*.III [1841/1973]:54にみえる。

(27)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:470.

(28)『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III:79;『古代ロシア研究』XVIII、二八頁。なおエクゼムプリャールスキーは当時アレクサンドルの長子ヴァシーリーがヴィテプスクの母親の親戚のもとに逗留していたと推測しているが、これはかれがヴァシーリーの母親をポロツク公の娘と誤って考えているからであろう。Ekzempliarskii A.V. *Velikie i udel'nye kniaz'ia severnoi Rusi v tatarskii period s 1238 po 1505 g.* t.I, SPb., 1889, s.285.

(29)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:470-471.

(30)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:471. 大公が没した九月三〇日という日付は「『トロイツカヤ』*Troitskaia letopis'*:s.322や『ソフィヤ第一（古輯）』にみえる。*PSRL*.VI-1:326. また後者ではその死が「非業の死」であったとも伝えている。ベグノーフはプラノ・カルピニの記述に基づき、これをウゲデイ・カーンの寡婦トゥラキナの遅効性毒物による殺害と推測している。これについてはさしあたり拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」九三―九四頁（注86）を参照されたい。『ノヴゴロド第一（古輯）』にはヤロスラフの死の記述はない。なお『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III:79;『古代ロシア研究』XVIII、二八頁や『ソフィヤ第一』*PSRL*.VI-1:326には、この年にアレクサンドルがタタールへ出かけたとする記述があるが、これについては、下記注(33)を参照されたい。

(31) ベグノーフはこれを一二四六年一〇月のこととするが、その典拠は不明である。『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:471;『トロイツカヤ』*Troitskaia letopis'*. s.322などは、一二四七年の項に月の指示なしに記している。ヤロスラフが一二四六年九月末に、はるか東方モンゴルの地で、ないしそこからの帰路に死去したとするならば、その一ヶ月もたたないうちにウラジーミルで埋葬式を挙行するなど不可能であろう。一二四七年のことと考えたほうが合理的である。sm.Kuchkin, Aleksandr Nevski, s.30; Egorov V.L. Aleksandr Nevskii i chingizidy. *OI*.1997-2, s.49.

(32)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:471. ベグノーフはこのときアレクサンドルがペレヤスラヴリ、ズプツォフ、ネレフタを獲得したとするが、初期の年代記には「諸都市」とあるのみで、具体的都市名の記述はない。

(33)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:471.『トロイツカヤ』*Troitskaia letopis'*. s.322もほぼ同様である。『ソフィヤ第一（古輯）』*PSRL*.VI-1:326-327のこれに対応する箇所は一二四六年の項の後半部である。そこではアンドレイの「タタール」行きについては記さ

れず、アレクサンドルはバトゥの召喚に応じて「オルダー」へ赴き、バトゥの厚遇をえて、帰国したことになっている。この記述の問題性についてはすでに記したところを参照されたい。本稿（上）六八、七八頁。また拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」五二―五三頁。なおエゴーロフはこのときのアレクサンドルの出立をこの年（一二四七年）の「夏の初め」と推測している。

(34) 教皇からの書簡がいつ、どのようにして届けられたかについては年代記にも他のどこにも記録がない。一二四八年の二通の書簡が史料集（下記ゴールスキー論文参照）に収められているだけである。『伝』の伝える教皇使節の到来と関係があると考えられるが、そこには年月日の記述がない。なおベグノーフによれば、アレクサンドルは教皇の同盟締結及び教皇権承認の提案を拒否したとするが、これは『伝』の叙述に従ったものである。ゴールスキーはむしろアレクサンドルの回答は好意的なものであったと推測する。ただこれも十分に論証されたものとは言い難い。Gorskii A.A.Dva "neudovnykh" fakta iz biografii Aleksandra Nevskogo. v: *Aleksandr Nevskii i istoriia Rossii.* Novgorod, 1996, s.67-68. 拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」六九―七一頁参照。

(35)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I:472;『トロイツカヤ』*Troitskaia letopis'*. s.322. カラコルムで両兄弟が上記のように任じられたことの意味は判然としない。これについては別稿でも触れたが、研究者間にも見解に大きな開きがあった。ナソーノフは、これをカラコルムとサライ間の対立を背景に説明した。すなわちカラコルム（故グユク・カーンの寡婦オグルーガイミシュ）はアレクサンドルをバトゥ派と考え、アンドレイの方によりよい地位を与えたとするのである。こうした立場は、パシュートも表明している。フェンネルやゴールスキーもそれを受けいれている。これにたいし、I・B・グレコフは、カラコルムとサライの対立は一時的なものであることを指摘し、この要素を過度に強調することは誤りであるとする。その上で、かれはこれはモンゴル宮廷がルーシ諸公を相互に競い合わせ対立させて、統治しようとする政策の現れとするのである。(Grekov I.B. *Ocherki po istorii mezhdunarodnykh otnoshenii vostochnoi Evropy. XIV-XVI vv.* M., 1963, s.27-29) クーチキンもカラコルム、サライの対立はグユクの死後解消し、その後にカラコルムを訪れた両公であったが、単に前大公の長子アレクサンドルが強力になりすぎないようにという理由で、実質的に意味のないキエフに任じられたとする。またエゴーロフは、アレクサンドルがキエフに、アンドレイがウラジーミルに任じられたのは、キエフが歴史的また名目的にルーシ第一の都市であるので、何ら不思議なことではなく、当然のことであったと考えている。もっともかれの見解は誤解に基づいているので、結論はともかく、その論証方法は間違っている。すなわち、かれはグユク死後実権を握ったオグルーカイミシュを次期皇帝モンケの母で、従ってバトゥの同盟者と誤解しているのである。最後に本稿の筆者の見解を記しておきたい。両兄弟公がカラコルムを訪れたころ、アレクサンドルが親タタールないしバトゥ派で、アンドレイが反タタール派、反バトゥ派であるとする明確な証拠は存在していなかった。確かにアレクサンドルは現実主義者として、父ヤロスラフの政治路線を引き継いで、タタール支配を甘受しようとしていたと考えることはできるが、それはおそらくアンドレイとて同様で、両者の間に何か根本的に異なる政治・外交路線があったと決めつけることはできないように思われる。むしろ（クーチキンなども指摘するように）、アレクサンドルもサライからカラコルムへ向かい、帝国の勢威を自らの目で見て初めて、この強力な相手に対し軽はずみなことはできないと、その段階で初めて決定的に認識したものと思われる。これが親タタール路線ということである。しかしその点ではおそらくアンドレイも同様で、両者間にその点で大きな差はなかった。従ってカラコルムがアレクサンドルを、対西方戦役で勇名を馳せた優秀な兄と認識する限り、その地位が強力になりす

ぎないようにと慎重に考えて、実質的意味を失っているキエフに任じたという程度の「策」はあったかもしれない。あるいははるか東方のカラコルム宮廷がルーシの現況（すなわち、キエフの凋落、北東ルーシ＝ウラジーミル地方の台頭という状況）をよく認識しておらず、兄には名目と化していた首都キエフを与えたという可能性もあったかもしれない。これまでの史家はカラコルムの反応にあまりに巧妙、かつ精緻な対ルーシ政策を読み込みすぎていたのではないかと考える。拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」一二、二七、四三－四四、五二－五四頁参照。

（36）二人のサライ行きを一二四七年のこととするのは、『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I：471. や『トロイツカヤ』*Troitskaia letopis'*. s.322 などの比較的初期の史料である。またエゴーロフは、既述のごとく、これを同年初夏、ゴールスキーは同年末のこととさらに限定している。ちなみに両研究者、とりわけエゴーロフによれば、両公は翌四八年秋までサライに滞在し、その後カラコルムへと出立、四九年末にウラジーミルに帰着したという。（sm. Egorov, Aleksandr Nevskii i Chingizidy.s.50.）従って、ベグノーフのここでの年代設定は根拠薄弱、少なくとも説得力に欠ける。またかれは二人の公のサライ及びカラコルム行きは「バティとオグリーガミシュ［グユク・カーンの后妃］」の召喚によるものとするが、前者（バティ）については年代記に記述があるが、後者についてはその記述はない。従って、厳密に言えば、二人の公がカラコルムへ向ったのが、バトゥのみの判断の結果であるのか、それともカーン妃（あるいはグユク・カーンその人）の命令によるものなのかは不明としか言い様がない。エゴーロフは、両公はグユク・カーン死去（一二四八年夏）の知らせがサライに入った後、従ってバトゥの判断で、カラコルムへ向ったと考えている（ただ、既述のとおりエゴーロフがオグルーカイミシュをモンケの母と見ているのが誤りであることには注意を要する）。ベグノーフはまたここで、アレクサンドルのこのときのサライ行きは、かれ自身にとって最初のものとするが、この点に関しては（年代の問題は別にして）本稿の筆者も同意する。すなわち『ノヴゴロド第四』などは、アレクサンドルがあたかもすでに一二四二年にバトゥのもとへでかけたとしているが（そうだとするならば、それが最初のサライ訪問ということになろう）、これはおそらく誤りである。*PSRL*.IV-1：228. また既述の如く、『ソフィヤ第一（古輯）』の一二四六年にアレクサンドルがタタールへ出かけたとする記述は、一二四七年のことと理解すべきである。拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」九七頁（注99）を参照のこと。

（37）ベグノーフは『ノヴゴロド第一（古輯）』や『ソフィヤ第一（古輯）』の記述を採用して、これを一二五〇年としている。*PSRL*.III：79；『古代ロシア研究』XVIII、二八頁。*PSRL*.VI-1：327-328. だが上述の如く、アレクサンドルがカラコルムから帰国したのは一二四九年末と考えた方がよい。あるいはここは次のように考えることもできる。すなわち、モンゴルからウラジーミルに帰着したのは四九年の末で、そこから翌五〇年にノヴゴロドに帰還したと。

（38）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I：472. 初期の年代記『ニキフォルの簡略年代記』Tikhomirov M.N. Zabytye i neizvestnye proizvedeniia russkoi pis'mennosti. *AE za 1960*. M., 1962, s.239 によれば、大公スヴャトスラフは甥のアンドレイ公、あるいは別の年代記ではこれも甥のミハイル公によって、ウラジーミル大公位を奪われているが、このことは『ラヴレンチー（スーズダリ）』には記されていない。廃位された前大公がバトゥのもとへ向った理由も不明である。奪われた大公位の回復を求めたのであろうか。拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」二六、四二、五二、六九、八六（注55）、九五（注88）頁、また本稿（上）七六－七七頁を参照。

（39）アレクサンドルの親密な協力者となるキリルの、南西ルーシはガーリチから北東ルーシへの到来の記事である。キリルは元来はガーリチのダニール公の推す府主教であったが、北東ルーシへ来たり、こ

ちらに落ち着いたのであった。『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.* I: 472.

(40)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 472. 多くの研究者がアンドレイ公のこの結婚を、かれとガーリチ公ダニールとの間に反タタール同盟が締結されたことの、あるいは、両者が反タタール的志向で一致していたことの証拠とみなす。たとえば、Pashuto, *Aleksandr Nevskii.* M./Ekaterinburg, 1995, s.104 ; Gorskii, Aleksandr Nevskii, s.29 ; Fennell, *The Crisis.* p.111-112 など。しかし、これを根拠に、あたかもアンドレイ公が本来的に反タタール的気質の持ち主であったかのように考えることが正しいとは思われない。最初から反タタール派と親タタール派があったわけではあるまい。状況の中でそうした陣営ができていったと考えるべきである。アンドレイの上の結婚がそれ自体として、反タタール派、反アレクサンドル派の成立を意味したのでないことは、この結婚が府主教キリル、すなわちガーリチを離れ、ウラジーミルへの到来以来アレクサンドルとの親密な関係を打ち立てた府主教キリルの祝福を得て行われていることからも、推測できる。筆者の考えでは、アンドレイはウラジーミル大公位をめぐる兄アレクサンドルとの確執の中で、タタール軍の攻撃を受けて反タタール的態度を鮮明にせざるを得ない立場に追い込まれたのである。

(41) アレクサンドルの重病に関しては、『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 472 をみよ。ベグノーフはこの年、ノヴゴロドがノルウェーのトロンヘイムの、ホーコン王へ使節を派遣して、同盟条約締結の提案を行ったと記すが、年代記にそうした記述はみられない。ベグノーフはまた、アレクサンドル公の妃がこの年に没したとするが、これについても年代記に記述はない。

(42)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL.*I: 473. 他の年代記、たとえば『ソフィヤ第一（古輯）』*PSRL.*VI-1: 327-328 の記述（ただし一二五一年の項）は大きく異なる。そこではネヴリュイらのタタール軍がスーズダリを襲い、「大公」アンドレイはそれに反抗して戦うも敗れ、「スヴェイ」の地へ逃亡する。その後アレクサンドルが帰国し（かれがタタールへ行ったという記述はこの前にはない）、国を再建したとされる。『ニコン』ではさらに大きく異なり、年代記作者によるアンドレイ批判がなされる。ネヴリュイ軍の襲撃はアンドレイの国政上の怠慢により説明される。従ってアレクサンドルの大公即位は当然のこととされる。*PSRL.*X: 138-139. タチーシチェフになると、アレクサンドルはサライに出かけてカンの前で、弟アンドレイのことを告発したとされている。Tatishchev, *Istoriia Rossiiskaia,* V: 40. なおベグノーフはネヴリュイ軍の襲撃を五～七月のこととするが、典拠は不詳である。またこの年のアレクサンドルのサライ行きを生涯で二度目の訪問で（二度目とするのは妥当である）、六～七月のこととする。しかしすでに上に示した『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述からも推測しうるように、このサライ行き（少なくともその出立）はタタール軍の襲来より前のことと考えられるので、これは明らかに奇妙である。クーチキンもアレクサンドルのこの年のサライ行きはネヴリュイ軍襲来の前であったことを強調している。またベグノーフは、このときアレクサンドルはサライでアンドレイのことをカンに告発したとしているが、これは初期の年代記にはないことで、かれのここでの典拠は、上述のようにタチーシチェフである。だがかれはタチーシチェフの記述には信憑性の点で問題がありうることに留意していない。大公位を獲得したアレクサンドルの帰還を七～八月とするのも、かれの推測にすぎない。ベグノーフはさらに、同年秋のこととして、アレクサンドルがリャザン公イジャスラフ・ウラジーミロヴィチ公の娘、ダリヤ・イジャスラヴナと結婚したと記している。しかしこの結婚については年代記にはまったく記述がなく、典拠が不明である。そもそもリャザン公イジャスラフ・ウラジーミロヴィチは一二一七年に没しており、その娘なるものが本当に存在したとしても、このとき三五才以上になっているは

ずで、三一歳のアレクサンドルより四才以上年上ということになる。ありえないことではないが、その他の点をも合わせ考えると、やや不思議な組み合わせということになる。ベグノーフによれば、さらにこの年の秋に、アレクサンドルが子のヴァシーリーをノヴゴロドの代理公に任じたとするが、これも年代記には記述がない。ただ『ノヴゴロド第一（古輯）』の翌一二五三年の項にヴァシーリーがノヴゴロド軍を率いて行動したという記述があるので、この年大公となってウラジーミルに去った父に代わって、ヴァシーリーがノヴゴロドを治め始めたと考えられるという、状況証拠からの精度の高い推測ではある。

ところで既述の一二五〇年のアンドレイ公とダニール・ガリツキー公との「接近」、またこの一二五二年におけるアンドレイ公の大公位からの放逐との関連で、対タタール政策においてルーシ諸公は明白に対立する二つのグループに別れたとする見解がある。すなわち一方ではアンドレイやダニール公、またアンドレイの弟ヤロスラフ公らの陣営で、反タタール派である。かれらはタタールのルーシ支配をきらい、これに果敢に反抗しようとしたという。もう一方はアレクサンドルを中心とする多数派陣営で、タタール支配を受け容れ、内政に干渉しようとしないタタールの支配の下で、自領そしてルーシ全体の発展を図ったとする。こうした理解は複雑な事態をすっきりと説明し、理解しやすくしてくれるという点で、大変魅力的である。しかしおそらくこうした見方は事態の流動的な側面を見落としている。アンドレイは反タタール的な志向の持ち主で、アレクサンドルは逆に親タタール的なそれの持ち主であったわけではなく、状況に応じてそうなったと理解する必要があるように思われる。このように考えると、まさに一二五二年に、おそらくは大公位を求めるアレクサンドルのイニシアティブでネヴリュイ軍が派遣され、大公アンドレイは心ならずも、それに応戦しなければならなくなったというのが現実に起こったことであったようにみえる。なお松木氏は、一二五二年にサルタク・カンが北東ルーシのアンドレイと、南西ルーシのダニールの反タタール派を、あたかも一挙に叩くべく、同時に二隊の懲罰隊を送った（前者に対してはネヴリュイ軍、後者に対してはクレムサ軍）とし、それはタチーシチェフが証言している、とするが、タチーシチェフにはそのような箇所はみつからない。似たようなことはフェンネルも記しているが、かれの場合には『イパーチー年代記』を典拠にしており、しかもクレムサ軍の方は一二五五年のことであると注記している。（松木『ロシア中世都市の政治世界』一二六頁。Fennell, *The Crisis*. p.107, 123, n.41.）一二五二年の大公位をめぐる二人の兄弟とタタールとの関係については、拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」二七－三五、四五－四七、五五－五七、七一－七三頁を参照。

(43)『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III：80；『古代ロシア研究』XVIII，二九頁。ベグノーフはこのときのドイツ騎士団との和平交渉をアレクサンドル自身が執り行い、そして一二四二年の講和条約を確認したと記すが、年代記にはそうした記述はない。またかれはこの年アレクサンドルに二番目の結婚からの最初の子ドミトリーが生まれたとするが、これも年代記には記述がない。Ekzempliarskii, *Velikie i udel'nye kniaz'ia*. t.I, s.44. prim.120では、ドミトリーの生年について一二五〇年という説が紹介されている。ところでこの年の『ノヴゴロド第一（古輯）』の項には、ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公（アレクサンドルの弟）が下流地方から逃亡し、プスコフ公に迎えられる、という記述がある。*PSRL*.III：80；『古代ロシア研究』XVIII，二九頁。これは『ラヴレンチー（スーズダリ）』の翌一二五四年の項の、トヴェーリ公ヤロスラフ・ヤロスラヴィチが世襲領国（トヴェーリ）を去り、ラドガに向い、そこで公として迎えられたという記事（*PSRL*.1：473）と同じ事柄を指していると考えられる。ラドガとプスコフでは異なるが、いずれにせよ、ヤロスラフ公がノヴゴロドの影響下にあるラドガかプスコフの公となったということは、かれが

兄アレクサンドル（とその子ヴァシーリー）に敵対的な行動をとっていることを意味している。どちらの年のことか、決定することは困難である。

（44）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I：474. コンスタンチン・ヤロスラヴィチはガーリチ・コストロマー公でアレクサンドルの弟。

（45）『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III：80-81；『古代ロシア研究』XVIII，三〇頁。この事件は『ラヴレンチー（スーズダリ）』ではやや異なった描き方がされている。すなわち、そこでは、ノヴゴロド市民内部の分裂や反アレクサンドル的動きにはほとんど注意が払われておらず、アレクサンドルがノヴゴロドへ向うやいなやノヴゴロド人はたちまち大公に服従したとされている。大公の権威が強調されているのである。『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I：474. なおベグノーフはこのときアレクサンドルが騒乱をしずめた後、「首謀者を処刑」した、と記すが、これはやや疑問である。『ノヴゴロド第一（古輯）』でも、『ソフィヤ第一』でも、「人々は喜びに満たされ、悪人は悲しんだ」とあるのみであるからである。「悪人」にたいしなんらかの処罰がなされた可能性は排除できないにせよ。またベグノーフは、この年に公子アンドレイ・アレクサンドロヴィチが誕生したとするが、年代記には記述がない。ベグノーフはこの年のこととしてさらに、バトゥの死、サルタクのカン位就任についても記しているが、これらの事実が、年代記に明記されているわけではない。ラシード・アッディーンは、バトゥがヒジュラ暦六五〇年、すなわち西暦一二五二年三月一四日から一二五三年三月二日の間に没したとするが、これは不正確である。写本によっては六五四年としているものもあるというが、いずれにせよ正確な時期はここからはうかがえない。Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*. t.II.M-L., 1960, s.81；Tizengauzen, *Sbornik materialov*. II.s.67. この点に関しては Spuler, *Die Goldene Horde*. S.32, Anm.108 が詳しく触れている。それによると、バトゥの死の時期に関する情報は錯綜しており、一二五二／五三年から一二五七／五八年までの様々な説があるという。シュプーラー自身は一二五五年説を採っている。なおラシード・アッディーンによれば、サルタクは父バトゥの死後モンケ・カーンのもとに伺候し、父の後継者であることを確認してもらったが、帰路死去し、実際にはカンとして統治することはなかったという。カン位はただちにウラグチに与えられた。Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*. t.II.s.81；Tizengauzen, *Sbornik materialov*.II.s.67. ただルーシの諸年代記ではすでに、一二四六年から一二五〇年の項において、サライを訪れた諸公がサルタクに拝謁しているという記述がみられるので（たとえば、『ラヴレンチー（スーズダリ）』六七五四（一二四六）年の項では、バトゥはミハイル・チェルニゴフスキー公の孫ボリス・ヴァシルコヴィチ（ロストフ）公をサルタクのもとに行かせている。また同六七五七年の項では、グレープ・ヴァシルコヴィチ公が、翌年の項では、先のボリス・ヴァシルコヴィチ公が再びサルタクに拝謁している。*PSRL*.I：471, 472）、かなり早い時期から、サルタクは父の代理を務めていたという推測は可能である。バトゥはモンゴル宮廷からグユク・カーンの選出会議（一二四六年八月）への出頭を要求されたとき、病を理由にこれを回避しようとしながらついにサライ出立を余儀なくされ（選出会議は結局のところ、バトゥ到着を待たずに挙行された）、中央アジアにしばらく留まっていたことがあるが、すでにこのときにサルタクは父の代理として振る舞っていたことが上の『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述から裏付けられている。さらに Rashid-ad-Din, *Sbornik letopisei*. t.II.s.81；Tizengauzen, *Sbornik materialov*. II.s.67；Spuler, *Die Goldene Horde*. SS.28-29 を参照。

（46）『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I.474.『ノヴゴロド第一（古輯）』では、ボリス公のタタール行きに関する言及はない。代わりにスヴェイ人、ヤミ［エミ］ら異族人のノヴゴロド領への侵入とアレクサンドルの不在、同年冬のアレクサンドルの到来と、対ヤミ遠征への出発、その困難な行軍と勝利、無事の帰還、その後のアレクサ

ンドルのスーズダリ地方への出立と、息子ヴァシーリーのノヴゴロド公への任命についての記述がある。*PSRL*.III : 81.『古代ロシア研究』XVIII、三〇－三一頁。ベグノーフはスヴェイ人の司令官の氏名（ヤルル・ビルゲル）を記しているが、この名は年代記にはない。

(47)『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I.474-475. グレープ・ヴァシルコヴィチ公が「カンの地から is Kanu zemli」戻ったとし、「ヴォルダー［すなわちオルダー］」で結婚したとする『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述は興味深い。もしここの「カン」と「ヴォルダー」をカラコルムのことと理解できるとすれば（たとえばエクゼムプリャールスキーはそう考えている）、おそらくグレープ公はカラコルムで［おそらくモンゴル婦人と］結婚した唯一のルーシ公ということになる。しかしこの点について断定的なことを述べる根拠は不足している。むしろ本文テクストはそれがサライであることを示唆しているようにみえる。Ekzempliarskii, *Velikie i udel'nye kniaz'ia*. t.II, SPb., 1891, s.155. ポルボヤーリノヴァもサライと理解しているようにみえる。Poluboiarinova M.D. *Russkie liudi v Zolotoi orde*. M., 1978, s. 12.

人口調査ないしタタール税導入の試みについては、『ノヴゴロド第一（古輯）』では、この年にまずノヴゴロドにタタールが税を課そうとしているという「悪い」知らせが「ルーシ」、すなわちスーズダリ地方から届き、ノヴゴロド民に動揺が起ったこと、そして冬に、タタールの使者がアレクサンドルに伴われて到来し、課税しようとしたが、ノヴゴロド人がこれを承服せず、タタールは贈り物を得ただけで帰ったこと、アレクサンドルは、市民の反抗を助長しプスコフへ逃亡した息子のヴァシーリーを捕らえ、その側近の従士団を処罰したことが記されている。タタール徴税人のノヴゴロド到来の記事は、例えば、『ラヴレンチー（スーズダリ）』では一二五八年に、『ニコン』では一二五八、一二五九年の二回にわたって記されているが、ここでは『ノヴゴロド第一（古輯）』の伝えるところがもっとも事実に近いと考える。*PSRL*.III : 82 ;『古代ロシア研究』XVIII、三一頁。この年（一二五七年）の人口調査は、『ラヴレンチー（スーズダリ）』によれば、北東ルーシのみが対象であったが、上述のとおり、『ノヴゴロド第一（古輯）』ではノヴゴロドにも調査人が来たとされている。『ラヴレンチー（スーズダリ）』の翌一二五八年の記述によれば、この年にもアレクサンドルら四人の諸公がタタールへ行き、冬にはタタール調査人が（明らかに帰国する諸公らとともに）ウラジーミルへ来り、そしてさらにアレクサンドルら三人の諸公を伴ってノヴゴロドへも向ったとされている。諸公はノヴゴロドで戸口を「数え」たあとウラジーミルへ戻ったとされているので（もっともアレクサンドルは別で、しばらくノヴゴロドに留まった）、このときは首尾よく課税が実現したと考えられる。そして同年代記の翌一二五九年の項では、アレクサンドルがウラジーミルに帰着したとされている。つまり『ラヴレンチー（スーズダリ）』で言われている、ノヴゴロドにおけるタタール税徴収実現（一二五八年）の記事は、『ノヴゴロド第一（古輯）』の一二五九年のことを述べていると考えることができる。ところでこの『ノヴゴロド第一（古輯）』の一二五九年の項では、ノヴゴロドにおける本格的な人口調査が市民の反抗を排除して実現されたことが詳しく記されている。これら両年代記（さらに『ニコン』も加えれば三年代記）の一二五七～一二五九年の記述は、機械的につなぎ合わせて理解するわけには行かない。ここは別稿でも記したように、次のように理解すべきであろう。すなわち、まずタタール調査人の到来については、『ノヴゴロド第一（古輯）』にあるように、かれらは一二五七年と五九年の二回ノヴゴロドまで（ウラジーミルはいうまでもない）やってきたと考える。そのうち初回は課税を実行できず、二度目にはアレクサンドルらの強力な支援もあってこれを強行している。従って『ラヴレンチー（スーズダリ）』一二五八年の項の、ノヴゴロドにおける課税実現の記述は、翌五九年のことを前の年のこととして記録してしまったということになろう。『ニ

コン』はタタール徴税人のノヴゴロド到来を一二五八、一二五九年の二度とし、後者において徴税が実現されたとしている。従って前者は『ノヴゴロド第一（古輯）』の一二五七年に、後者は同じ一二五九年におおよそ対応すると考えることができよう。

次に、アレクサンドルら諸公のサライ行きに関してであるが、まず、ベグノーフがこの年（一二五七年）のアレクサンドルのサライ行きを三度目としているのは妥当である。しかしここでも上記三年代記では記述が異なっている。ここは結論的に次のように考えたい。『ラヴレンチー（スーズダリ）』にあるように、アレクサンドルは一二五七年と五八年に連続してサライへ向ったと考えたい。おそらく五七年のノヴゴロドにおける課税失敗の釈明が五八年に諸公によって行われ、諸公はカンから次には決して失敗してはならぬと厳命され、五九年の断乎たる強行に至ったと考えられる。以上に関しては、本稿（上）九六－九七、一〇六頁（注141）を参照されたい。

ところでベグノーフはここ一二五七年の項で、タタールによる人口調査実施の決定は「全ルーシの住民」「全員」を数えようとするものであったとしているが、これはおそらく正しくない。ルーシ全体にわたるものではなく（たとえば西部ルーシのいくつかの地方は免れた可能性がある）、また総員調査でもなく、戸数調査であった可能性が高いのである。これに関しては、拙稿「ルーシとモンゴル」三、二〇（注19）を参照。

(48) ベグノーフがここで一二五八年のこととして記すことは、おそらく『ニコン』に根拠をおいている。しかしこれは前注に記した通り、『ノヴゴロド第一（古輯）』や『ラヴレンチー（スーズダリ）』を考慮に入れて、前年のことと考えるべきである。

(49) 『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I: 475. ベグノーフがこのときのアレクサンドルのサライ行きを四度目とするのは正しいと考える。ただしかれはこれを「冬」のこととするが、根拠はない。むしろ『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述からすると、この記事の後に秋と指示されているので、秋以前と考える方が合理的であろう。同年代記のこの年の項の後半部に冬のこととして記されている、タタール人口調査人のウラジーミル、さらにはノヴゴロドへの到来と課税実施の記述は、上述の如く、本来は翌一二五九年のことをこの年に記録してしまったものと考えられる。

(50) 『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL*.III: 82-83;『古代ロシア研究』XVIII、三三頁。『ラヴレンチー（スーズダリ）』はこの年の項で、アレクサンドルがノヴゴロドからロストフ、さらにはウラジーミルへ至ったことを伝えているが、これは『ノヴゴロド第一（古輯）』の同年の項にあるノヴゴロドでの徴税実現後のことと考えられる。*PSRL*. I: 475. これにたいしベグノーフはアレクサンドルのノヴゴロド出立、ドミトリーのノヴゴロド公任命を翌一二六〇年のこととする。それは十分ありうることではあるにせよ、年代記に月の表示がないので、正確には特定できないところである。

(51) 『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I: 475-476.

(52) 『ラヴレンチー（スーズダリ）』*PSRL*.I: 476-477. ベグノーフは暴動がコストロマーや大ウスチュグでも発生したとするが、初期の年代記ではこれらの町にたいする言及はない。またこのときの徴税人はクビライ・カーンから派遣されたとするが、『ラヴレンチー（スーズダリ）』中の「クトゥルビー」をクビライと解す（ナソーノフ説）ことができるかどうかは疑問である。またかれは「アレクサンドルは［暴動には］介入していない」としているが、これが大公は暴動に参加しなかったの意味か、あるいは暴動を鎮圧せず、黙認したの意味か、定かではないけれども、いずれにせよ、これについて初期の史料は何も伝えておらず、あくまでもベグノーフの推測による意見の表明にすぎない。ただこの暴動に関し、後の『ウスチュグ年代記』ではアレクサンドル自身が蜂起を呼びかけたこと、また『ニコン』では、おそらくアレクサンドルを含む「ルーシの諸公」が率先して蜂起を指導したことが語られているのは事実である。しかしこ

れらの情報をそのまま受け容れるわけには行かない。*PSRL.*XXXVII: 70; *PSRL.*X: 143. 他方『ノヴゴロド第一（古輯）』はこの年の項で、秋、アレクサンドルの子ドミトリーがノヴゴロド軍とともに［リヴォニア騎士団領の］ユーリエフを攻撃、占領したこと（この記事は、本稿（下）第二章においても指摘したように、『伝』第一版、第一群の諸写本や、さらに『ノヴゴロド第一（古輯）』以外にも、『シメオーノフ』、『ロゴシュキー』、『トヴェーリ』、『アヴラムカ』等の諸年代記にも現れている）、また同年アレクサンドルがタタールのもとに出かけ、カン・ベルカ［イ］により「留めおかれ」たために、かれはその冬をタタールで過ごすことを余儀なくされたことを記している。反タタール暴動、ドミトリーのユーリエフ遠征、またアレクサンドルの最後のタタール行きの前後関係、あるいはそもそもそれらの間に何らかの関係があると考えるべきかどうかは、難しい問題である。ベグノーフはまず遠征が行われ、暴動はその後のこととしている。つまり両者に関係があるとはみていないのである。これにたいしかつてカラムジンは次のように推測した。すなわちまず暴動が起こり、アレクサンドルはその釈明のためにサライへ赴くことを余儀なくされたが、その前に北西方面の防備を固めるべく騎士団にあらかじめ攻撃をくわえさせた、というのである。なかなかに説得的な考え方ではある。Karamzin N.M. *Istoriia gosudarstva Rossiiskogo.* t.IV.M., 1992, s.53-54. ベグノーフはまた、アレクサンドルはカン・ベルケの「召喚により」サライへ赴いたとしているが、これは十分にありうることではあるけれども、年代記にはそうした記述はない。本稿の筆者もかつてそのように考えたことがあるが、あくまでも推測であることを確認しておきたい。*PSRL.*III: 83;『古代ロシア研究』XVIII、三三頁。一二六二年の暴動については、拙稿「ルーシとモンゴル」一二一一七頁、同「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」一五一一六、四九、六二一六三、七三一七四頁、さらには本稿（上）七二、八一一八四、九七頁を参照。またこのときのアレクサンドルのサライ行きは、かれの生涯における五度目にして最後のものと考えることができるが、そのことに関して、またこのサライ行きの目的をどう理解するかについては、さらに同拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」一〇一一〇二頁、注127、同注130、および本稿（上）八二一八四頁を参照。なおこのアレクサンドルのサライ行きは『ラヴレンチー（スーズダリ）』では言及されていない。『ノヴゴロド第一（古輯）』には記述がある。*PSRL.*III: 83;『古代ロシア研究』XVIII、三三頁。また先のドミトリー公のユーリエフ遠征と関連して、ベグノーフは［アレクサンドルが］リガ、リヴォニア騎士団などと平和・通商条約を締結したとする。これは年代記には記述はないが、*GVNP,* No.29.s.56-57 から確認できる。ただアレクサンドルがこの年二人の子、ドミトリーとアンドレイに、それぞれペレヤスラヴリとゴロジェツを分領として与えたとするのは、年代記では確認できない。

(53)『ノヴゴロド第一（古輯）』*PSRL.*III: 83-84;『古代ロシア研究』XVIII、三三頁。『ラヴレンチー（スーズダリ）』では短く「同年……アレクサンドルが崩御された」と記し、死の状況についてはまったく触れられない。そしてその直後に『伝』のテクストが置かれている。テクストは中途で切れている。*PSRL.*I: 477-481. なお『マズリンスキー・レトピーセツ』では、公は臨終に際して、修道士として剃髪し、アレクシーと名のったとされている。この一七世紀第四四半期の記録をそのまま信じることができるかどうかは判断に苦しむところである。*PSRL.*XXXI[M., 1968]: 74. また公のウラジーミル聖母生誕教会への埋葬の日が一一月二三日とするのは、『伝』のベグノーフにより復原された原初版で（Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury,* s.194)、同じベグノーフの校訂になる『伝』第一版では一一月二四日となっている(Begunov, *Pamiatnik russkoi literatury,* s.179)。

付　〈史料試訳〉

『ラヴレンチー（スーズダリ）年代記』（六七四五～六七七〇年）、『ソフィヤ第一年代記（古輯）』（六七三六～六七七一年）、及び『ニコン年代記』（六七三六～六七七一年）試訳。

以下には上記三年代記の邦訳を試みるが、それはあくまでもアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公と関連する部分に限定してのことである。なお史的アレクサンドル研究にとって不可欠の『ノヴゴロド第一年代記（古輯）』のテクストにはすでに邦訳があるので、ここで屋上に屋を架するようなことはしない。

翻訳にあたっては、特別の場合を除き異読を考慮にいれることはしなかった。下記の年代記全集のテクスト本文をそのまま邦訳することを試みたのみである。なお訳文中、［　］は訳者による説明ないし補足である。また（　）は原文である。

（一）『ラヴレンチー（スーズダリ）年代記』（六七四五～六七七〇年）試訳

PSRL.I : stolb.460-477.

「六七四五［一二三七］年……同年、冬、東の国から森を通ってリャザンの地へ、神を知らぬタタールがやって来た。そしてリャザンの地を戦い取り始めた。プロンスクまで［の地を］征服した。リャザン全土を荒らし、焼き払い、かれらの公を打ち殺した……[1]」

「六七四六［一二三八］年、大［公］フセヴォロドの子ヤロスラフがヴォロジーメルの［大公］位についた。そしてキリスト教徒に大いなる喜びがあった。神がその力強き御手によりかれらを神を知らぬタタールから解き放ったからである。そして［ヤロスラフ公は］統治し始めた……」

「六七四七［一二三九］年……サウルがダヴィデを迫害したが、神が［その］手からかれを救われたのと同様に、神は異族人の手から敬神なる信仰篤き大公ヤロスラフと高貴なるその子らとを救われた。かれの子は六人であった。オ［ア］レクサンドル、アンドレイ、コスチャンチン、オフォナーシー［ヤロスラフ］、ダニーロ、ミハイロである……」

「六七四八［一二四〇］年……同年、タタールがキエフを取った。聖ソフィヤ［聖堂］を破壊した。すべての修道院、イコーナ、尊き聖なる十字架、そしてすべての教会の貴重な宝物を取った。また身分の低い者から高い者まで、全ての民を剣で斬り殺した。この悪事は主の降誕祭の前、ニコラの日［一二月六日］におこった。」

「六七五〇［一二四二］年、大公ヤロスラフはおのが子アンドレイを大ノヴゴロドへ、ニェムツィ［ゲルマン系を中心とする北西ヨーロッパ人、ここでは主にリヴォニア騎士団士のこと］に対しオレクサンドルを助けるために送った。［かれらは］プレスコフ［プスコフ］の向こうの湖上でかれら［ニェムツィ］を破り、多くの虜を捕らえた。そしてアンドレイはおのが父のもとに栄誉とともに帰還した。[2]」

「六七五一［一二四三］年、大公ヤロスラフはタタール［の地］へ、バティのもとへ行った。そしておのが子コスチャンチンをカノーヴィ[3]

のもとへ送った。バティは大［公］ヤロスラフとかれの家臣を栄誉とともに敬意をもって受けいれ、そして帰国を許した。［その際］バティはかれに言った。ヤロスラフよ、汝がルーシの民の全諸公の年長者となれ、と。ヤロスラフはおのが地に大いなる栄誉とともに帰還した。」

「六七五二［一二四四］年、ヴォロジーメル・コスチャンチノヴィチ公、ボリス・ヴァシルコヴィチ公、ヴァシーリー・フセヴォロジチ公[4]がおのが家臣らを伴ってタタール［の地］へ、バティのもとへ、おのが世襲地［領国］のことで行った。バティはかれらをふさわしい栄誉とともに敬意をもって受けいれ、かれらそれぞれをその世襲地に定め、帰国を許した……」

「六七五三［一二四五］年、コスチャンチン・ヤロスラヴィチ公がタタール［の地］から、カノーヴィチのもとからおのが父のもとへ栄誉とともに帰着した[4a]。同年、大公ヤロスラフはおのが兄弟と甥らを伴ってタタール［の地］へバティのもとへと行った。」

「六七五四［一二四六］年、スヴャトスラフ［フセヴォロドヴィチ］、イヴァン［フセヴォロドヴィチ］公がおのが甥らとともにタタール［の地］からおのが世襲地に帰ってきた[5]。同年、チェルニゴフ公ミハイロがおのが孫のボリス[6]とともにタタール［の地］へ行った。かれらが［タタールの］本営についたとき、バティはミハイロ公に使者を遣わし、かれに火とかれらの木像に礼拝するよう命じた。ミハイロ公はかれらの命令に従わず、かれ［バトゥ］とかれの物言わぬ偶像をなじった。かくてかれは不浄な者たちにより情け容赦なく斬り殺され、生命の終わりの時を迎えた。殉教者エフスタフィーの[7]記念の日九月二〇日のことであった。バティはボリス公[6]を下がらせ、おのが子のサルタク[8]のもとへ行かせた。サルタクはボリス公を敬意をもって受けいれ、おのが国へ帰ることを許した。同年秋、フセヴォロドの子ヤロスラフ公がカノーヴィチのもとからの帰路、異族人の地で崩御された。聖グリゴーリーの記念の日九月三〇日のことであった。」

「六七五五［一二四七］年、オレクサンドルはおのが父の訃報を聞き、ノヴゴロドからヴォロジーメルにきたり、おのが年長者のスヴャトスラフとおのが兄弟らとともに父のことを想って泣いた。同年、フセヴォロドの子スヴャトスラフ公がヴォロジーメルでおのが父の座についた。そしておのが甥たちを、かれらに父ヤロスラフが命じたごとくに、諸都市に据えた。同年、ヤロスラフの子アンドレイ公がタタール［の地］へ、バティのもとへ行った。またオレクサンドル公も兄弟を追ってバティのもとへ行った。バティはかれらを敬意をもって受けいれ、かれらをカネーヴィチのもとへ送った。」

「六七五六［一二四八］年……同年冬、ミハイロ・ヤロスラヴィチ[9]が汚れし［異教徒］リトヴァ［リトアニア］人により殺害された。至福なる［ロストフ］主教キリルが人をやってかれの遺骸を引き取らせ、ヴォロジーメルへと運んだ……」

「六七五七［一二四九］年、グレープ・ヴァシルコヴィチ公[10]がタタール［の地］へ、サルタクのもとへ行った。サルタクはかれを敬意をもって受けいれ、おのが世襲地へ帰ることを許した。同年冬、オレクサンドルとアンドレイがカノーヴィチのもとから帰着した。かれらはオレクサンドルにキエフと全ルーシの地を［領するよう］命じた。アンド

レイはヴォロジーメルで［大公］位についた。同年冬、ヴォロジーメル・コンスタンチノヴィチ公[11]がヴォロジーメルで亡くなった……オレクサンドル公は兄弟らとともにかれのことでいたく泣いた……同年冬ヴァシーリー・フセヴォロジチ公[12]がヴォロジーメルで亡くなった……［遺骸は］ヤロスラヴリに運ばれた……オレクサンドル公がそれに付き添った……」

「六七五八［一二五〇］年、ボリス公[6]がサルタクのもとへ行った。サルタクは敬意をもって受けいれ、おのが世襲地へ帰ることを許した。同年秋、スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ[5]が子とともにタタール［の地］へ行った。同年秋、府主教キリルがスージュダリの地へ来た[13]。同年冬、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公がダニール・ロマーノヴィチ[14]の娘と結婚した。府主教［キリル］が、キリル［ロストフ］主教とともにヴォロジーメルの聖母教会で［かれらに］加冠した。大いなる喜びがあった。」

「六七五九［一二五一］年、府主教が主教キリルとともに大ノヴゴロドへ、オレクサンドルのもとへ行った。かれらはノヴゴロド人のたっての願いで、至福なるダルマートを［ノヴゴロドの］主教に叙任した……同年、オレクサンドル公が重い病にかかった。だが神がかれを憐れまれた。かれの父ヤロスラフと至福なる府主教及び主教キリルの祈り［もかれを守った］……」

「六七六〇［一二五二］年、ノヴゴロド公オレクサンドル・ヤロスラヴィチがタタール［の地］へでかけた。かれらはかれに全兄弟中の最年長者の地位を与え、大いなる栄誉とともに帰国を許した。同年、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公がおのが貴族らと相談し、ツァーリに仕えるよりは逃げるほうがよいと考え、おのが公妃とおのが貴族らとともに見知らぬ地へと逃げた。タタールはかれの跡を追い、ペレヤスラヴリの町の近くで追いついた。だが神がかれを守られた。かれの父の祈り［もかれを守った。］タタールは各地に散開し、ヤロスラフ[15]の公妃を捕らえ、子らを虜にした。また軍司令官のジドスラフを打ち殺し、公妃をも殺害した。［タタールは］ヤロスラフの子らを虜として［タタールの地へ］送り、無数の民と馬と家畜を連行し、多くの悪を働いて、去った……同年、大公オレクサンドルがタタール［の地］からヴォロジーメルの町へ帰着した。かれを黄金の門の傍らで府主教と全修道院長、町人たちが十字架をもって出迎え、かれをかれの父ヤロスラフの［大公］座に据えた。千人長職を勤めるロマン・ミハイロヴィチにすべての約定を［与えた。］ヴォロジーメルの町とスーズダリの全土に大いなる喜びがあった。同年、キリストを愛するスヴャトスラフ・フセヴォロジチ公[5]が亡くなった。」

「六七六二［一二五四］年、冬、神現祭［一月六日］の後、大公ヤロスラフの子であるトヴェーリ公ヤロスラフ[15]が、おのが世襲地［トヴェーリ］を捨て、おのが貴族らとともにラドガへ向った。ラドガの民はふさわしい栄誉とともに敬意をもってかれを受けいれた。」

「六七六三［一二五五］年、［復活祭の］大祭日後の光明週間に、［故］大公ヤロスラフの子コスチャンチン[4a]が亡くなった……オレクサンドル公がおのが兄弟の訃報を聞き……［その遺骸を］ヴォロジーメルの聖母教会に安置した。同年、ノヴゴロド人が協議のうえ、ノヴゴ

ロド主教ダルマートを、和を乞い求める書状をもたせて大公オレクサンドルのもとへ送った。大公がそれを遅らせていたからである。そのとき古来善を憎む悪魔は人々に敵意をおこさせ、かくてノヴゴロドに騒擾がおこり、［人々は］ヴァシーリー公[16]を追いだした。同年、ノヴゴロド公ヴァシーリーがトルジョクへ着き、そこでおのが父、大公オレクサンドルとドミトリー・スヴャトスラヴィチ[17]、また貴族らの来るのを待ち、それからノヴゴロドへ向った。ノヴゴロド人はこれを聞くと、十字架をもって行き、大いなる栄誉を示しつつかれ［大公］に深々と頭を下げた。大いなる喜びがあった。かれはおのが子をノヴゴロド［公位］に就け、自らはかれら［ノヴゴロド人］に和を与え、大いなる栄誉とともにかれらのもとを去った。」

「六七六四［一二五六］年、諸公がゴロジェツ、またノヴゴロドへ行った。ボリス公[6]はタタール［の地］へ行った。オレクサンドル公は贈り物を［もたせて使者を］送った。ボリスはウラフチ[18]のもとに行き、贈り物を与え、栄誉のうちにおのが世襲地に帰還した。同年冬、オレクサンドル公はスーズダリ人、またノヴゴロド人を率いてエミに対し遠征した……」

「六七六五［一二五七］年、諸公がタタール［の地］へ行った。アレクサンドル、アンドレイ、ボリス[6]である。かれらはウラフチに敬意を表し、おのが世襲地へ帰着した。その冬、グレープ・ヴァシルコヴィチ[10]がカンの地［カラコルム］から、ツェーサリ［皇帝］のもとから帰還した。かれはヴォルダー［オルダー］で結婚した。同年冬、人口調査人がやって来て全スジャリ［スーズダリ］、リャザンそしてミュロム［ムーロム］の地を数え、十人長、百人長、千人長、万人長を立て、ヴォルダー［オルダー］へ去った。ただ聖母と主なる神をみつめる修道院長、修道士、司祭、聖歌合唱人らは数えられなかった。」

「六七六六［一二五八］年……同年、諸公がタタール［の地］へ行った。オレクサンドル、アンドレイ、ボリス[6]、トヴェーリのヤロスラフ[15]である。かれらはウラフチとすべての軍司令官に敬意を表し、おのが世襲地へ帰ることを許された……同年冬、人口調査人がヴォロジーメルに到来した。調査人たちと諸公が大ノヴゴロドへ行った。アレクサンドル、アンドレイ、ボリス[6]である。［かれらは］数え、そして再びヴォロジーメルへ戻った。だがアレクサンドルはノヴゴロド人が引き止め、手厚く歓待した。オレクサンドルはかれらに約定を与え、おのが世襲地へ栄誉とともに去った。」

「六七六七［一二五九］年、オレクサンドルがノヴゴロドからロストフへ、聖母教会へやって来た。受難週の水曜日のことである……［オレクサンドルは］ヴォロジーメルへ行った。」

「六七六九［一二六一］年、オレクサンドルに子が生まれ、ダニールという名で呼ばれた[19]……同年、府主教はサライにミトロファン主教を任じた[20]。」

「六七七〇［一二六二］年、神はロストフの地の民をベセルメン[21]の残忍な抑圧から解き放たれ、キリスト教徒の心のうちに憤怒の念を注ぎ込まれた。かれらは汚れし者たち［異教徒］の強制に堪えかねて、民会を［召集しようと］望み、諸都市から、ロストフから、ヴォロジーメルから、スーズダリから、そしてヤロスラヴリから、［汚れし者た

ちを」追いだした。これらの呪われしベセルメンたちはダーニ［税徴収権］を請け負い、このことで民に大きな破滅をもたらしたからである。多くのキリスト教徒が働いて利子［を支払い］、［支払えないときには］あちこちに連れ去られた。人を愛する神はこれを見られ、［聖］母の祈りを聴き入れられ、おのが民を大きな不幸から解き放たれた。同年、背教者イゾシマが殺害された。かれは姿形は修道士であったが、実はサタンの僕であった。大酒飲みで、恥ずべきことを口にし、愚にも付かぬことを話し、聖物冒涜者であり、ついにはキリストを拒み、偽りの預言者マ［ホ］メトの誘惑に陥り、ベセルメンとなった。そのころチーチャムがタタールのツェーサリから［派遣されて］やって来た。かれはクトゥルビーという名の、邪しまなベセルメンであった。その者の助力を得て世に見放された呪われし者はキリスト教徒に多大の恥辱を与え、十字架と聖なる教会に罵詈雑言をあびせかけた。そこで人々はおのが敵であるベセルメンに襲いかかり、かれらを追いだし、別の者を打った。このときかの不信心な［イ］ゾシマもヤロスラヴリの町で殺害された。かれの遺体は犬が喰らい、からすがついばんだ……」

「六七七一［一二六三］年……同年、ヤロスラフの子、大公オレクサンドルが崩御した。かれの雄々しさと生涯を語ろう。ああ、われらの主なるイエス・キリスト、神の子よ、私は心貧しく、罪深く、［語る］資格もない。だがヤロスラフの子、フセヴォロドの孫、大公オレクサンドルの生涯を書き始めよう。というのも……」(22)

訳注

(1) 以下バトゥの侵入の詳細な記述が続く。大公ユーリーのシチ河畔における戦死もこの年の項で記される。

(2) いわゆるチュード湖上の氷上の戦に関する記述であるが、ここにみられるとおり、本年代記ではこれに関する記述はきわめて簡潔である。しかもアレクサンドルの立場からではなく、弟アンドレイの立場から記されている。

(3)「大カーンら」の意。ルーシの諸年代記では、一部例外はあるが、このような言い回し（カノーヴィ、カノーヴィチ、カネーヴィチなど）でカラコルムのことを指すのが一般的である。

(4) いずれもフセヴォロド大巣公（アレクサンドルはその孫）一門に属すロストフ諸公である。

(4a) 二年前にカラコルムへ派遣されていた大公ヤロスラフの子コンスタンチン（アレクサンドルの弟）がこの年に帰国したのである。

(5) いずれもヤロスラフ大公の兄弟。そのうちスヴャトスラフはヤロスラフ大公の没後、かれを継いでウラジーミル大公となる（本年代記翌年の項参照）。かれらは、本年代記の前年の項にあるように、兄で大公のヤロスラフとともに、サライへでかけたが、大公はバトゥの命でそのままカラコルムへ向かったのにたいし、ルーシに帰ることを許されたものと推測される。

(6) ボリス・ヴァシルコヴィチ（ヴァシーリエヴィチ）・ロストフ公（本年代記六七五二（一二四四）年に出てくるボリス公と同一人物）。ミハイル・チェルニゴフスキーの孫（母マリヤがミハイル公の娘）。

(7) ハドリアヌス帝期の聖殉教者。

(8) サルタクはバトゥの子。かれはバトゥ存命中から、その不在時などに代理として君臨していたことが知られているが、バトゥの死後間もなくしてかれ自身も死去したため、実際にはカンとして統治することはなかったと言われている。バトゥを継いだのはサルタクの弟のウラグチであった。本稿第三章注（45）を参照。

（9）アレクサンドルの弟の一人。
（10）ベロオーゼロ公。注（6）のボリス公の弟。
（11）アレクサンドルの従兄弟。ウグリチ公。
（12）アレクサンドルの父の兄の孫。ヤロスラヴリ公。
（13）アレクサンドルの良き理解者となった府主教キリルは、もともとガーリチの雄ダニール・ロマーノヴィチ公の推薦で府主教となったが、この頃にガーリチを去り、北東ルーシに到来したのである。
（14）ガーリチ公（一二六四年没）。
（15）ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ。トヴェーリ公。アレクサンドル、アンドレイ両公の弟。アレクサンドル没後ウラジーミル大公となった。
（16）アレクサンドルの子。このときノヴゴロド公であった。
（17）スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ公の子。アレクサンドルの従兄弟。
（18）ウラグチ・カンのこと。バトゥの後継カン。
（19）後にモスクワ公（初代）となる。
（20）初代サライ主教。このとき初めてサライに正教会の主教座がもうけられた。
（21）イスラム教徒のこと。
（22）以下、アレクサンドルの生涯を物語る伝記、すなわち『伝』が、ほとんど四頁にわたって続く。ただしこの伝記自体は途中で中断している。

（二）『ソフィヤ第一年代記（古輯）』（六七三六～六七七一年）試訳

PSRL. VI-1 : stolb.283-338.

「六七三六［一二二八］年……同年、ノヴゴロドからヤロスラフ公[1]が公妃とともにペレヤスラヴリへ行った。そしてノヴゴロドには二人の子、フェオドル公とアレクサンドル公を残した。またかれらとともにフェオドル・ダニーロヴィチとチウン［家令］のアキムを残した。」

「六七四一［一二三三］年、ヤロスラフの上の子、フェドルが亡くなり、聖ゲオルギー修道院に安置された。まだ若かった……」

「六七四四［一二三六］年、キエフの［大公］位に大公ヤロスラフ・フセヴォロジチ［フセヴォロドヴィチ］[1]が座した。同年……またノヴゴロドの公位にアレクサンドル・ヤロスラヴィチがついた。同年、神を知らぬタタールが到来し、ボルガルの全地を征服し、かれらの都市ヴェリーキーを取った。妻らも、子らもすべての者を斬り殺し、他の者は捕虜に取った。」

「六七四五［一二三七］年……**バティの襲来**［太文字原文、以下同様］。同年、冬、東の国から森を通ってリャザンの地へ、ツァーリ・バティに率いられた神を知らぬタタールがやって来た。かれらは到来すると、［オ］ヌザ川のほとりを最初の宿営地とし、その地一帯を取った[2]……」

「六七四七［一二三九］年、ヤロスラフの子アレクサンドル公がノヴゴロドで結婚した。ポロツクのブリャチスラフ［公］の娘を妻に迎え、トロペツで式を挙げた。同年、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ公がノヴゴロド人とともにシェロン川［のほとり］に木の砦を築いた。同年、バティがルーシ諸都市に［部隊を］送り始めた[3]……」

「**大公アレクサンドルについて**。六七四九［一二四一］年、われらの大公、賢く、分別あるアレクサンドル・ヤロスラヴィチについて。

マケドニアのツァーリ、アレクサンドル［アレクサンドロス］と同名の勇敢なる［大公］、強く、勇敢なる、ツァーリ、アレフヴィス［アキレウス］と似たる者について。以下はかれについての物語である。神はかれに［行い］正しきゆえに齢を加えられた。そして神はかれにその栄光のためにと［永き］日々と栄誉とを与えられた。ああ、主なるわれらの神よ、貧しく、罪深く、理解力に乏しいわたしは、それでも聖にして大いなる公、フセヴォロド大公の孫であるアレクサンドル・ヤロスラヴィチの生涯を書き記そうと思う。というのも……[4]大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはノヴゴロド人とともに［ネヴァ河畔の戦で］大勝利をえてノヴゴロドへ帰還した。すべての者が神と聖ソフィヤにより守られ……アーミン……同年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチの勝利の帰還の後、その冬に、再び、西の国からニェムツィ、チュジがヴォジを攻めにやってきた。かれらはすべてを征服し、かれら［ヴォジ］にダーニ［貢納］を課し、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ大公の父祖の地であるコポリエのポゴスト［ダーニ納入所］に砦を築いた。だがこのことは悪事ではなかった。［悪事は次のことであった。すなわち］かれらはテソヴォをも取り、ノヴゴロドの三〇露里のところまで迫り、商人を殺害したのである。またこちらではルガまで、さらにはサブリャまで［攻め寄せたのである］。ところが大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはノヴゴロド人と対立し、おのが母と公妃そして全従士団を引き連れて、スージュダリの地、ペレヤスラヴリの町へと去っていた。ノヴゴロド人は嘆願状を持たせた使者を大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとへ派遣し、かれに子［のアレクサンドル］を遣わしてくれるように乞うた。［これにたいし］かれ［大公ヤロスラフ］はおのが［別の］子アンドレイを与えた。そこでノヴゴロド人は協議し、大主教のスピリドンと貴族らに嘆願状をもたせて、再度大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとに送り、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチを自らに［与えるよう］求めさせた。またこのときノヴゴロドの領内にリトヴァ、ニェムツィ、チュジが襲来し、ルガ［川］沿いで馬と家畜を奪ったので、どうしても畑を耕すことができなくなった。そこで大公ヤロスラフはかれらにおのが子のアレクサンドルを再び与えた。」

「六七四九［一二四一］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがノヴゴロドへやって来て、間もなくノヴゴロド人、ラドガ人、コレラ人、イジェリャン人を率いてかれら［ニェムツィら］にたいし、コポリエの砦を攻めるべく出発した。そして砦を土台から完全に打ち壊し、ニェムツィ自身を打ち殺し、自ら他の者らをノヴゴロドへ連れ来たり、別の者らは憐れんで放してやった。公はこの上なく憐れみ深かったからである。またヴォジ、チュジ、裏切者らは絞首刑に処したうえ、ルーシへ戻った。大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチが［西の］王を破って勝利を得てから三年目の冬に、ニェムツィが四方から集結し、プスコフめがけて押し寄せ、プスコフ人の部隊を打ち破った。かれらはおのが代官らをプスコフに据えた。一方これを聞いた大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチは［流された］キリスト教徒の血を想って大いに悲しみ、勇を鼓し、聖なる三位一体と聖ソフィヤにたいするおのが熱き思いをもって心を奮い立たせ、瞬時もおかずに、おのが兄弟またお

のが全戦士を引き連れてノヴゴロドに来たり、聖ソフィヤに拝跪して涙ながらに祈った。」

「六七五〇［一二四二］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはおのが兄弟アンドレイ及びノヴゴロド人また下流地方の人々とともに大軍をもってニェムツィの地に攻め込んだ。［ニェムツィらが］『スラヴの民をおのが足下に従えよう』などとおごり高ぶって言うことのないようにである[5]……同年、大公ヤロスラフ・フセヴォロジチがオルダーへ行った。かれはタタールの使者によりツァーリ・バティのもとへ呼びだされたのである。」

「六七五三年［一二四五］年、リトヴァ人がトルジョクとベジツ近郊を占領した。かれらをヤロスラフ・ヴォロジーメリチ公がノヴォトルジョク人とともに追いかけ、かれらと戦った。［リトヴァ人は］ノヴォトルジョク人から馬を奪い、ノヴォトルジョク人を打ち殺した。そして捕虜とともに去った。かれらをヤヴェデとケルベトが……追った。ヤロスラフ・ヴォロジーメリチもノヴォトルジョク人とともに［かれらを］追った[6]……だが諸公はトロペツへ逃げ込んだ。翌日、町［トロペツ］に大公ヤロスラフ[7]がノヴゴロド人とともに急行し、かれら［リトヴァ人］から全捕虜を取り戻し、五〇人ほどの［リトヴァの］諸公を斬り殺した。そこからノヴゴロド人は引き返したが、大公アレクサンドルはおのが従士団とともにかれらを追い、ジジチ付近で戦闘に入り、かれらを一人として逃しはしなかった。そしてその場所で残りの者を打ち殺し、おのが子をヴィテプスクから取り戻し、わずかばかりの従士を引き連れてノヴゴロドへ向かったが、別の部隊と遭遇して、かれらと戦った。だがここでも神がかれを助けたまい、かれはかれらを打ち破り、自身もかれの全戦士も無事に帰着した。

オルダーにおけるミハイル・チェルニガフスキー公とその貴族フェオドルのツァーリ・バティによる殺害[8]。

「六七五四［一二四六］年、バティの最初の征服の後、大公ヤロスラフ・フセヴォロジチはスージュダリの地を復興させた。教会から死者の遺体を片づけ、その遺骨を安置した。［タタールの襲撃から逃がれてきた］多くの到来者を慰め、多くの人々を集めた。だが汚れし者たちはキリスト教徒にたいし抑圧を加えた。そのため［大公は］我が身を惜しむことなくオルダー[9]へ、破滅をもたらすタタールの大いなる地へ向かい、おのが父祖の地のために多くの苦しみを受けた。というのもフェオドル・ヤルノヴィチによりツァーリに誣告されたからである。かくて何日も苦しんだ末に、その年の秋、九月三〇日に大公ヤロスラフ・フセヴォロジチはオルダー[9]で非業の死をとげたのである。聖書に「おのが友のためにおのが命を捨てる者」とあるように、大公もルーシの地の全ての民のためにおのが命を捨てたのである……アーミン。同様にかれの子、大公アレクサンドルもおのが父の道を離れずに、オルダー[10]のツァーリのもとへ、神を知らぬタタールにより囚われの身となっているおのが民のために人を遣わした。多くの金銀を囚われ人らのために用い、神を知らぬタタールから買い戻し、かれらを災いと襲撃［による恐怖］から解き放ったのである。丁度そのころ東の国のある強きツァーリ[11]がおのが使者を大公アレクサンドルのもとに遣わし、次のように言った。「神は余に多くの国々を服従させた。だが汝一人

がわが権力に従うのを望んでいない。しかし今、汝、もしおのが地を保たんと欲するなら、余のもとに出頭し、余の支配の栄誉と栄光を［その目で］みよ。」父の没後、大公アレクサンドルは［ノヴゴロドから］ヴォロジーメルへ大軍勢を率いてやって来た。かれの到来の様はものものしく、その知らせはヴォルガ河口地方にまで達した。そしてモアビト人の女たち[12]は、「大公アレクサンドルがやって来る」といっておのが子供らを脅かした。大公アレクサンドルがオルダーへ、ツァーリのもとへ出かけるとき、［ロストフ］主教キリルがかれを祝福した。かれはツァーリのもとに到着した。ツァーリ・バティはかれを見て驚き、おのが高官らに言った。「この公に並ぶ者は他にはいない、と人々が言うのはまことであった。」こうして［バトゥはかれに］多くの贈り物を与え、敬意をもってかれを受けいれ、そして大いなる栄誉とともにかれがルーシに帰ることを許した。[12a]」

「六七五八［一二五〇］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがオルダーから帰還し、ルーシに大いなる喜びがあった。」

「六七五九［一二五一］年、ノヴゴロドへ、キエフおよび全ルーシの府主教キリルと、同じくキリルという名のロストフ主教がやって来て、大ノヴゴロドに大主教ダルマトを任じた……同年、ネヴリュイとコチヤ、そして勇敢なるオラブガが多くの軍司令官とタタールの軍勢を率いてスージュダリの地へ、大公アンドレイ・ヤロスラヴィチ[13]に向ってやって来た。大公ヤロスラフ崩御の後、ヴォロジーメル大公位はその子アンドレイ公に与えられていたからである。それはボリスの日の前日のことであった。神を知らぬタタールはヴォロジーメル付近でクリャズマ川の浅瀬を渡り、気づかれぬようにペレヤスラヴリの町へ向かった。翌朝ボリスの日に大公アンドレイはおのが部隊を率いてかれらに立ち向かった。両軍は衝突し、激しい戦が起った。われらの罪が増し加わったために神の怒りが発せられ、汚れし者たちが勝利し、大公アンドレイは辛うじて逃れた。かれは大ノヴゴロドへやって来たが、ノヴゴロド人はかれを受け容れなかった。そこでかれはプスコフへ向かった。そこには短期間しかいなかった。おのが公妃のくるのを待ったのである。かれのもとへ公妃が来たとき、大公アンドレイは公妃とともにニェムツィの町コルィヴァンにやって来た。かれはそこに公妃を残して、自身は海の向こうのスヴェイの地に渡った。スヴェイの支配者［メステル］はかれを迎え、敬意をもってかれを受けいれた。かれ［大公］はコルィヴァンへ人をやり公妃を呼び寄せた。かれはスヴェイの地にしばらくの間留まっていたが、その後ニェムツィとの戦闘で戦死した[14]。神を知らぬタタールはペレヤスラヴリの町を荒し、そこからおのが地に戻っていった。ネヴリュイの寇略の後、大公アレクサンドルは［処々の］教会を再建し、町々を人々で満たし、逃げ去っていた住民を呼び戻し、それぞれの家々に［帰らせた。］……神はかれの地と富と栄光を増し加えさせ、かれの齢を長くさせられた。あるときかれにたいし大いなるリム［ローマ］から教皇が使者を送ってよこした。使者たちは大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチにこう言った。「われらの教皇はこのように言われる。『われらは汝が誉ある類いまれなる公であり、汝の国は偉大であると聞いている。それゆえわれらは汝に一二人の枢機卿のなかからもっとも賢き二人の者、ガルドとゲモ

ントを派遣する。われらの教えを聞かれよ。』大公アレクサンドルはおのが賢人らと相談して、教皇にたいし次のように書き伝えた。『アダムから大洪水まで、大洪水から言葉の分裂まで、言葉の分裂からアヴラアムの初めまで……われらはこのこと［教え］をすべてよく存じておる。それゆえわれらは汝らから教えを受けとることはないのである。』かれら［使者たち］は自分の国へ帰っていった。[15] 神は大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチの富を増し加えさせた。かれが聖職者を愛し、府主教ら、主教らをあたかもキリストその人のように敬い、すべてのキリスト教徒を愛したからである。

同年、大公アレクサンドルの崩御。これから後、大公アレクサンドルの崩御を深く偲ばれよ。ああ、いたましきかな、汝、哀れなる人間よ。汝は、如何におのが主人たる大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチの臨終を書き記すことができるだろうか？　如何にして汝の瞳から涙があふれ出ないことがあろうか？……府主教キリルはこう語った。『わがいとしき子らよ！ルーシの地の太陽が沈んだことを知るがよい！』司祭、輔祭、修道士ら、貧しき者も富める者もすべてが、また多くの民が泣きながらこう言った。『もはやわれらは滅びるであろう！』かれの聖なる遺骸はヴォロジーメルの町へ運ばれた……[16]」

「六七六一［一二五三］年……同年、ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公が[17]冬に下流［スーズダリなど北東ルーシ］地方から逃げ出した。［プスコフ人は］かれをプスコフ［の公位］に据えた。」

「六七六三［一二五五］年、ノヴゴロド人がプスコフからヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公を連れ出し、かれをノヴゴロドの公位に据えた。ヴァシーリー公[18]は追放した。これを聞いたヴァシーリーの父、大公アレクサンドルは兵を率いてノヴゴロドへ進んだ。大公アレクサンドルが多くの軍勢とノヴォトルジョク人とを率いて進んでくると、これをラチシュコ[19]が迎え、挨拶をしてこう言った。『公よ、急いで進みなさい。汝の兄弟、ヤロスラフ公は逃げました。』これにたいしノヴゴロド人は部隊を聖［キリスト］降誕教会の背後の地区に駐留させ、歩兵については聖イリヤ教会の傍らにゴロジシチェ[20]の方に向って配置した。聖ニコラ教会の傍らの民会の場で小さき者たちは言った。『一体、大公アレクサンドルはなんと言っているのか。〝わが敵を引き渡せ！〟と言っているではないか。』小さき者たちは聖なる神の母［のイコーナ］に接吻し、全員が一つとなって、生命を賭して、ノヴゴロドの真実のために立つことを誓った。他方大いなる者たちのなかでは悪しき相談が行われた。いかにして小さき者たちを打ち負かすか、またいかにして大公をかれが望むように［町に］入れるかについて話し合われたのである。そしてミハルコ[21]が町から聖ゲオルギー［ユーリエフ修道院］へと逃げた。かれはおのが部隊を用いてこちら側に攻撃をしかけ、人々を追い出そうとした。アナニヤ[22]はこれを知ると、かれによかれと願って、ひそかにヤクン[23]を送ってかれを連れてこようとした。それを庶民が知り、かれ［ヤクン］の跡を追い、かれの屋敷を襲おうとした。だがオ［ア］ナニヤがかれらにそれを許さず、こう言った。『兄弟たちよ、かれを殺そうとするなら、先に私を殺しなさい。』かれ［アナニヤ］はかれら［貴族ら］がかれについて悪しきことを図り、かれを捕らえて、市長官職をミハルコに渡そうとしていることを知らなかっ

たのである。大公はボリス[24]を民会に派遣してこう言わせた。『余に市長官のオナニヤを渡しなさい。もし渡さなければ、余は汝らの大公ではなく、町にたいし兵を率いて進むであろう。』そこでノヴゴロド人は大公のもとに大主教と千人長クリムを嘆願状をもたせて派遣した。かれらは言った。『公よ、おのが［公の］座につかれよ。悪人たちの言うことに耳を傾けないように。そしてオナニヤとノヴゴロドのすべての男たちにたいする敵意を解かれんことを。』だが大公は大主教の懇願にも、クリムの嘆願にも、またノヴゴロド人［の願い］にも耳をかさなかった。ノヴゴロド人は言った。『兄弟よ、もしわれらの大公がわれらの宣誓違反者らとこのように談合したとしても、神と聖ソフィヤがかれらの［裁き手となろう］。われらが大公に罪はない。』こうして全軍が三日間おのが真実のために立った。そして四日目に大公が人を派遣して、こう言わせた。『もしオナニヤが市長官職から解かれるなら、余も汝らにたいする敵意を解こう。』こうして和議がなった。大公アレクサンドルは町へ入り、かれをノヴゴロド大主教ダルマトが教会の聖職者たちとともに十字架をもってプリクポーヴィチ館の傍らで出迎えた。町全体が喜びに満たされ、悪人は悲しんだ。というのもキリスト教徒には喜びが、悪魔には滅びがあったからであり、キリスト教徒の血が流されることがなかったからである。こうして大公アレクサンドルはおのれの公の座に座った。同年冬、タタールから人口調査人がやって来て、ルーシ全土を数え、十人長、百人長、千人長を任じた。ただ修道院長、司祭、修道士ら、聖なる教会に仕える者たちだけが数えられなかった。これはすべてわれらの罪のゆえにルーシの地に起ったのである。主よ、汝の怒りをわれらの［悪しき］行いゆえにわれらに向けられることのなからんことを。人を愛される主よ、汝の憐れみによりわれらを救われんことを[25]！」

「六七六四［一二五六］年……同冬、大公アレクサンドルがノヴゴロドへやって来た。府主教もかれとともに来た。そして大公はおのが軍勢とノヴゴロド人を率いてスヴェイの地へ、チュジに向って進み……海岸地方全域を征服した。ある者は打ち殺し、ある者は捕虜にとり、多くの捕虜を連れておのが地に帰還した……それから大公アレクサンドルは下流地方に向かった。かれはノヴゴロドの使者オルフェリーとミハイル・ピニャシチニチを伴っていた。またおのが子のヴァシーリー公をノヴゴロドの公座に据えた。」

「六七六五［一二五七］年、ルーシから悪しき噂が届いた。タタールがノヴゴロドにおいてデシャチーナとタムガー[26]を欲しているというのである。夏の間中ノヴゴロドの人々は騒々しかった。同年冬、タタールの使者が大公アレクサンドルとともにノヴゴロドにやって来た。かれ［大公］の子ヴァシーリー公はプスコフへ逃げた。使者たちはデシャチーナとタムガーを要求し始めた。ノヴゴロド人はそれに応じず、ツァーリへの贈り物を与え、かれらを平和裏に帰らせた。大公アレクサンドルはおのが子をプスコフから追いだし、下流地方へ護送させた。そしてオレクサンドルとかれの従士団を処罰した。ある者は鼻を削ぎ、別の者は目を刳りぬいた。かれらはヴァシーリー公を悪へ導いたからである。悪はすべて悲惨な最期をとげるのである。」

「六七六六［一二五八］年……同年、タタールがリトヴァの全土を

取り、リトヴァ人を打ち殺した。」

「六七六七［一二五九］年……同年秋、ミハイロ・ピニャシチニチが下流地方から偽りの知らせをもってやって来て、こう言った。『汝らが数[27]に応じようとしないなら、すでに［タタールの］軍勢が下流地方へと向っている［そしてすぐにこの地へも押し寄せるであろう］。』

一方ノヴォトルジョク人は数に応じた。同年冬、呪われし生肉喰らいの、アブラアムの女奴隷アガルの子孫たち[28]、ベルカイとカサチクが、おのが妻らを伴って、またその他大勢の者たちとともにやって来た。かくして町には大きな騒擾が起った。また［ノヴゴロド領内の］諸地方では多くの悪がなされた。呪われしタタールのためにトゥスカ[29]がとられたのである。それから呪われし者たちは死を恐れ始めた。かれら神を知らぬ者たちは大公アレクサンドルにこう言った。『われらに護衛を与えよ。われらが打ち殺されないように。』そこで大公は市長官の子らと全ての小士族［ジェチ・ボヤールスキエ］にかれらを夜ごと守るよう命じた。タタールは言った。『われらに数を与えよ。さもなくばわれらは［兵を呼びに］立ち去るであろう。』庶民は数を与えることを望まなかった。『われらは聖ソフィヤのために、教会の家々のために潔く死のう。』そのとき人々は二つに割れた。善き者は聖ソフィヤのために、正しき信仰のために、自らの立場を主張したのである。だが大いなる者たちは小さき者たちに数に応じるよう命じた。それから呪われし者たち［タタール］は聖霊に追われて、逃げ出そうと欲した。かれら［呪われし者］は悪しき相談をして、町のあちら側［市場側］を攻撃しようとした。また別の者たちは湖の［方から］こちら側［ソフィヤ側］を［攻撃しようとした。］だがキリストの目にはみえない力がかれらを阻んだ。かれらはあえて［進むことが］できなかった。［ノヴゴロドの］人々は恐れを抱き、次のように言いながら、あわててかの側、聖ソフィヤ側へ移りはじめた。『聖ソフィヤの傍らでわれらの生命を捧げよう。』　翌日になった。大公アレクサンドルがゴロジシチェを出た。呪われしタタールもかれとともにあった。貴族らは悪しき謀［相談］により数に応じた。かれらは自らには軽く、小さき者たちには重く負担がかかるようにしたのである。かくて呪われし者たちは街路を馬で走り回り、キリスト教徒の家々を書き留めた。これも神がわれらの罪ゆえに荒野から獰猛な野獣を引き入れられ、［かれらに］強き者らの肉を食らわせたのである。こうして呪われし者たちは、数をとって立ち去った。大公アレクサンドルも、おのが子のドミトリー公をノヴゴロドの公座に据えた後、［タタールの］跡を追って立ち去った。」

「六七七〇［一二六二］年、神が聖母の祈りにより、ロストフの地の人々をベセルメン[30]の残忍な抑圧から解き放たれ、キリスト教徒の心のうちに憤怒の念を注ぎ込まれた。かれらは汚れし者たちからの強制に堪えかねて、鐘を鳴らして民会を召集し、かれら［ベセルメン］を諸都市から、ロストフから、ヴォロジーメルから、スージュダリから、ヤロスラヴリから、ペレヤスラヴリから追いだした。というのもこれらの呪われしベセルメンはタタールからダーニ［貢納徴収権］を請負い、このことで人々に大きな破滅をもたらしたからである。キリスト教徒の民は利子のために働き、多くの者があちこちに連れ去られた。

人を愛するわれらの善き神はこれを見られ、［聖］母の祈りを聴き入れられ、おのが憐れみによりおのが民を大きな不幸から解き放たれた。同年、背教者のゾシマが殺された。かれは姿形だけは修道士の姿をしていたが、実はソトン［サタン］の手先で、大酒飲み。恥ずべきことを口にし、愚にもつかぬことを話し、終いには聖物を冒涜し、キリストを拒絶し、偽りの預言者マフメトの誘惑に陥り、ベセルメンとなった。この年にタタールのツァーリからチーチャムが使者としてルーシにやって来た。それはクトゥルベイという名の、邪しまなベセルメンであった。[31] この者の助力を得て、世に見放された呪われし者はキリスト教徒らに多大の恥辱を与え、十字架と聖なる教会に罵詈雑言をあびせかけた。人々がそれぞれの町においておのが敵にたいし怒りを発し、ベセルメンに襲いかかり、かれらを町々から追いだし、別の者を打ち殺したとき、かの不信心でおぞましき、また背教者で異端のイゾシマもヤロスラヴリの町で殺害されたのである。その遺体は犬が喰らい、からす［がついばんだ。］またその足は悪事をなすのに素早かったが、犬が［それを］町中を引きずってまわり、すべての者を驚かせた。背教者にたいする神の裁きは最後にはこのようなものなのである。その不浄なる肉体は奪われ、また不浄なる者の霊についてはこう言われている。「かれらのウジは死なず、かれらの火は消えることがない。[32]」……さてキリスト教徒を捕らえ［て兵にしようとす］る部隊が［ツァーリのもとから］送られてきた。そのとき汚れし者たちから大きな苦難がもたらされた。人々［キリスト教徒］を駆り立て、かれらを［汚れし者たちと］一緒に戦わせるように命令が出されたのである。大公アレクサンドルはオルダーのツァーリのもとへ行こうと望んだ。人々を不幸から救い出すべく［ツァーリに］懇願しようとしたのである。一方、［アレクサンドルは］おのが弟ヤロスラフ公とおのが子ドミトリーをノヴゴロド人とともに西方の国々に送った。おのが［アレクサンドルの］全軍もかれらとともにあった……そのとき大公アレクサンドルはオルダーへ、ツァーリ・ベルカイのもとへ着いた。ツァーリはかれを留めおき、[33] ルーシへ帰ることを許さなかった。かれは冬をオルダーで過ごし、その地で発病した。そしてノヴゴロド・ニジニーにいたり、そこに短期間留まった後、ゴロジェツにやって来た。かれは重病に陥り、一一月一四日に剃髪して修道士となったが、その夜崩御した。かれはヴォロジーメルの聖母教会に安置された。」

「六七七一［一二六三］年、大公アレクサンドルが崩御した……」

訳注

（1）ペレヤスラヴリ及びノヴゴロドの公、ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチ。後のウラジーミル大公。アレクサンドル公の父。

（2）以下バトゥ軍によるリャザンから北東ルーシ一帯の攻略の様子が記される。六七四六（一二三八）年までの記事が一一頁にわたって続く。

（3）以下バトゥ軍による南・西ルーシ、とりわけ六七四八（一二四〇）年のキエフ攻略の様子が三頁にわたって記される。

（4）以下、アレクサンドル『伝』と基本的には同じ記述が続く。この記述は同年の項の、「ネヴァ河畔の戦」の記述中の「六人の勇者たち」のくだりの途中まで、すなわち1269の「他の者らは恥辱のうちに逃げ去った。そしておのが大いなる軍司令官ら戦死者の遺体は三艘の

舟に放り込まれ、舟もろとも海に沈められた」という文章まで続き、その後は通常の年代記の記述に移っていると考えられる。当年代記における『伝』的な記述は『伝』自体の記述よりやや詳しく、具体的になっている。また多くの箇所が『ノヴゴロド第一（古輯）』の文言と同じかそれに近い形になっている。なぜこの年の項に『伝』がおかれているのかは不明である。おそらくここでネヴァ河畔の戦について記述しようとして、『伝』を利用したのであろう。六七四九（一二四一）年にアレクサンドルはまだ大公になっていないにもかかわらず、大公とよばれているのは、この部分が死後に執筆された『伝』を利用しているからである。もっとも本年代記では、この点については大雑把で無頓着である。アレクサンドルは大公位に就任する（一二五二年）前でも、これ以後の地の文で一貫して「大公」と称されているのである。

（5）以下、有名なチュード湖上の戦（いわゆる「氷上の戦」）の描写が続く。この項は四頁にわたる。『ノヴゴロド第一（古輯）』、『ラヴレンチー（スーズダリ）』などに比し、格段に詳しくなっている。

（6）ヤロスラフ・ヴォロジーメリチはムスチスラフ・ロスチスラヴィチ（勇敢公、スモレンスク公）の孫、プスコフ公。またヤヴェデはトヴェーリの、ケルベトはノヴゴロドの軍司令官。

（7）『ノヴゴロド第一（古輯）』では、これに対応する箇所ではヤロスラフではなく、アレクサンドルとなっている。おそらくはその方が正しい。

（8）以下殉教者ミハイル・チェルニゴフスキー（フセヴォロド・スヴャトスラヴィチ・チェルムヌイの子）の伝記の記述が八頁にわたり続く。

（9）この時大公ヤロスラフはまずバトゥ・カンのもとへ、ついでそこからカラコルムへ向かい、その帰路、「非業の死」を遂げている。従ってここの「オルダー」は、「破滅をもたらすタタールの大いなる地」とも言われているので、通常そうであるようにサライではなく、カラコルムととるべきである。

（10）一転してここの「オルダー」はサライをさしている。この年の項の「オルダー」の用法から判断するならば、本年代記の（この部分の）執筆者は（あるいはルーシの年代記一般といってよいかもしれない）、「オルダー」の語でタタール・モンゴル国一般を指し、通常はサライないしキプチャク・カン国及びその後継諸国のことを念頭においているが、時にはカラコルムの宮廷のことも意図していることがあると考えることができるように思われる。同様のことは、ここでは「ツァーリ」についても言うことができ、カラコルムのオルダーの「ツァーリ」は大カーン（モンゴル皇帝）であるし、サライのオルダーの「ツァーリ」はキプチャク・カンということになる。

（11）バトゥ・カンのこと。

（12）ここではヴォルガ下流域のイスラム教徒の民のことを指していると考えられる。モアビトは旧約聖書のモアブ人（ロトの子モアブの子孫、ヨルダン東部に住む）に由来する語。

（12a）バトゥがこのときアレクサンドルに帰国を許したとするこの年代記の記述はおそらく誤りである。これについては本稿（上）七八－七九頁を参照。

（13）アレクサンドルの弟。ここで本年代記はアンドレイを正しく「大公」と呼んでいる。

（14）アンドレイ・ヤロスラヴィチがスウェーデンで「ニェムツィ」のために死亡したというのは歴史的事実に反すると考えられる。かれは『ラヴレンチー（スーズダリ）』によれば、一二五七年にアレクサンドルなどとともに「タタール」へ向かったとされているので、その前にアレクサンドルと和解し、スウェーデンからルーシに帰国していたと考えられるからである。これについては拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」八八頁、注66を参照。

（15）『伝』にも記されている教皇使節の到来は、教皇インノケンティウス四世からアレクサンドルにあてられた二通の書簡（一通目は一二

四八年一月二二日付け、二通目は同年九月一五日付け）と関係があろう。いずれもアレクサンドルがノヴゴロドからサライ、さらにはカラコルムへの旅の途中にルーシに届いた（二通目はアレクサンドル自身には届かなかった）とされるので、年代記に記されている使節がこれらの書簡を持参したと仮定するならば、使節の到来は彼の留守中（一二四八年春以降、一二四九年末までの間）ということになろう。

(16) 以下、棺に入れられた大公の奇蹟についての記述をも含む『伝』の末尾とほぼ同じ記述が続く。なぜこの年に唐突にアレクサンドル崩御の『伝』の記述が置かれているのか不明である。本年代記では『伝』が分解されて、あちこちに挿入されている。

(17) アレクサンドル、アンドレイ両公の弟。トヴェーリ公。後のウラジーミル大公。

(18) アレクサンドルの子。ノヴゴロド公。

(19) ノヴゴロドの軍司令官。

(20) ノヴゴロド市郊外のノヴゴロド公の居館の所在地。

(21) ノヴゴロド貴族の一人。

(22) ノヴゴロドの市長官。

(23) ノヴゴロド貴族の一人か。

(24) アレクサンドル公の従者か。

(25) 本年代記は、この年の冬のこととして、タタールの人口調査人が到来し、全ルーシにおいて課税を実施したかのように記している。しかしこれは『ラヴレンチー（スーズダリ）』などでは確認できない。後者では一二五七年にリャザン、ムーロムと並んで北東ルーシ（スーズダリ）地方が課税されたことが記されている。おそらく『ラヴレンチー（スーズダリ）』の記述の方が正確である。

(26) いずれも税を表す言葉。デシャチーナは十分の一税の意、タムガーは家畜に捺した所有者を示す焼き印、転じて取引などに課される税であろう。

(27) チスロー。おそらく人口ないし戸口「数」を表す。戸口調査及びそれに基づく課税のこと。

(28) イスラム教徒のこと。アガル（ハガル）はアブラハムの妻サラのつかえめで、エジプトの女性。アブラハムとの間にイシマエルを産んだ。

(29) 不詳。税の一種か。

(30) イスラム教徒のこと。

(31) ここのところは以下のように訳すこともできる。「同年、名をクトゥルベイというタタールのツァーリからチーチャムが使者としてルーシにやって来た。それは邪しまなベセルメンであった。」ナソーノフはこう理解し、クトゥルベイをクビライ・カーンのことと考えた。本稿の筆者はこの説には反対であるが。『ラヴレンチー（スーズダリ）』の同じ箇所も原文はほぼ同様で、したがって同じ可能性が存在する。拙稿「ルーシとモンゴル」一三頁参照。

(32) イザヤ66：24。

(33) この「留めおき」をどう理解するかについては、本稿(下)三の注(52)、さらには同(上)八二―八四頁を参照。

(三)『ニコン年代記』（六七三六～六七七一年）試訳

PSRL.X：96-143.[1]

「六七三六［一二二八］年……そのときヤロスラフ・フセヴォロジチ［フセヴォロドヴィチ］公はおのが公妃とともにペレヤスラヴリに行った。そしてノヴゴロドには、全ノヴゴロドの望み通りに、二人の子フェオドルとアレクサンドルを、おのが貴族フェオドル・ダニーロ

ヴィチとその他の家来たちとともに残した……同年、ヤロスラフ・フセヴォロジチの子ら、フェオドルとアレクサンドル両公は、かれらの貴族フェオドル、またかれらの父のその他の家来たちとともに、夜、ノヴゴロドからペレ［ヤ］スラヴリのおのが父のもとへ逃げた。」

「六七三八［一二三〇］年……ミハイル・フセヴォロジチ［フセヴォロドヴィチ］の子ロスチスラフ公[2]はノヴゴロドの市長官とともにトルジョクに行った。ノヴゴロド人はセミョン・ボリソヴィチ[3]の屋敷を荒らし、かれの妻を捕らえ、かれ自身を死に渡した。同様に市長官ヴォドヴィク……らの屋敷を荒らし……かれら自身を死に渡した……［ノヴゴロド人は］ロスチスラフ・ミハーイロヴィチ公にたいし、トルジョクを出てチェルニゴフの父ミハイルのもとへ退去するように申し渡した……ノヴゴロド人はペレ［ヤ］スラヴリに人をやってヤロスラフ・フセヴォロジチ公を呼ぼうとした。［使者は］こう言った。「もし汝がわれら［の国］において、われらノヴゴロドの意志に従って公でありたいと願うなら、われらのもとに来れ。」ヤロスラフ・フセヴォロジチ公は急いでノヴゴロドに来た。ノヴゴロド人はかれを敬意をもって迎えた……かれはノヴゴロドに二週間留まり、おのが二人の子フェオドルとアレクサンドルを残して、再びペレスラヴリに帰った……」

「六七四一［一二三三］年……同年、ノヴゴロドでフェオドル・ヤロスラヴィチ公……が亡くなった。」

「六七四三［一二三五］年……そしてキエフの大公座にかれ［ウラジーミル・リュリコーヴィチ］の後にノヴゴロド公ヤロスラフ・フセヴォロジチが即位し、ノヴゴロドではかれの子アレクサンドルが公位に就いた。」

「六七四五［一二三七］年……

バティの来襲［原文隔字体、以下同様］［この項アカデミーXIV写本等による］同年、東の国から森を通ってリャザンの地へ、神を知らぬタタールがそのツァーリ・バティに率いられてやって来た。かれらは到来すると、初めオノザ［オヌザ］河畔を最初の宿営地とし、［その地域を］占領し、焼き払った[4]……」

「六七四六［一二三八］年、大公ユーリー・フセヴォロジチ［フセヴォロドヴィチ］[5]の兄弟、ヤロスラフ・フセヴォロジチ公が、大ノヴゴロドからヴォロジーメルに来たり、大公位に就いた。ノヴゴロドにはおのが子アレクサンドルを残してきた。というのも主なる神といとも清き聖母がかれ［ヤロスラフ］をタタールから守られたからである。かれとともにかれの八人の子も守られた。それはアレクサンドル・ネフスキー、アンドレイ・スズダールスキー、コンスタンチン、アフォナーシー、ダニール、ミハイル、ヤロスラフ・トヴェールスキー、ヴァシーリーである。その他かれの兄弟スヴャトスラフ・フセヴォロジチ公……またその甥ウラジーミル・コンスタンチノヴィチ公……も守られた……こうしてすべてで一五人の公がタタール［の刃］を免れたのである。」

「六七四七［一二三九］年［トルストイVII（ゴリーツィン）写本］……同年、ノヴゴロド公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがポロツク公ブリャチスラフの娘と結婚した。婚姻の式はトロペツで行われた……」

「同年［アカデミーXIV写本にもどる］、アレクサンドル・ヤロスラ

ヴィチ公はノヴゴロド人とともにショロン［シェロン］河畔に砦を築いた。バティについて。同年、バティはルーシの町々に軍隊を送り始めた。バティにより送られた［軍隊は］ペレアスラヴリ・ルースキー……に来たり、町を取った……同年、バティは別の大部隊をチェルニゴフに送った……」

「六七四八［一二四〇］年、ツァーリ・バティはおのが軍司令官メングカクを送り、キエフの町を探らせた。かれ［メングカク］は行ってドニェプル川の向こう側の小さな町ペソチュニーのところに立ち、キエフの町を見て、その美しさと堂々たる姿に驚いた……そのころキエフの大公座に就いていたのは、フセヴォロド・チェルムヌィの子、大公ミハイル[2]……であった……メングカクはかれに使者を送り、こう言わせた。『汝、もしこの町を無傷に保とうと欲するならば、われらのツァーリ・バティのもとに行き、服従し拝跪せよ……』[6]……」

「六七四九［一二四一］年……」

［［以下はPub.VI（Laptev.）写本のみに見られる。］**大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチについて。**この信仰篤く、高貴にして、神に嘉せられし、誉め称うべき大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチは、ルーシの地を聖なる洗礼にて照らした専制君主、使徒にも似た大公ウラジーミル・スヴャトスラヴィチ[7]から数えて八代目にあたり、徳高きことで人からのみならず、神からも多くの誉ある称賛をかち得たリューリク[8]からは一一代目、幼少の、物心ついたばかりの頃から、敬神の、神の知恵にあふれ、威厳にみてる父、ヤロスラフ・フセヴォロジチとおのが聖なる母、すなわち神を愛し、剃髪し修道女になってからはエウフロシニヤと呼ばれた大公妃フェオドシヤによりあらゆるよき行いを教えられ、あらゆるよき掟のうちに育まれたのである。かくてかれの心のなかには神への畏敬の念が芽生え、主の戒めを守り、それを力の限り行うようになった。というのもかれは聖職者と修道士を深く敬ったからである。おのが青年時代には常に賢くも身を低く持することに全身全霊を傾け、節制に努め、霊的肉体的に身を清く保ち、柔和を心がけ、虚栄を排した。腹［の欲望］の満足は全き知恵の働きを乱し、警戒心をなえさせ、その他の美徳を損なうことを知って、それを抑えることに熱心に努めた。かれの口には常に神の言葉があり、それはかれを蜂蜜以上に喜ばせた。かれは神の言葉を熱心に読み、それを受け容れ、行いによって満たすことを望んだ[9]……そのころ人々はすでにいたるところで、神を知らぬツァーリ・バティが、神の許したもうところによりルーシの大いなる地において多くの悪事を働いていたことを聞いていた。このときかの至福なるアレクサンドルはおのが父ヤロスラフとともに、大ノヴゴロドにあって統治していた。だがこの地［ノヴゴロド］に汚れし者たちが襲来することは神の力が許されなかった。かれら［タタール］は大ノヴゴロドの国境に近づくことすら許されなかったのである。［アレクサンドルらは］しばらくそこ［ノヴゴロド］に留まって、敵であり対立するリトヴァとニェムツィと戦ったが、そのときも残忍なかのタタールは神の許しを得てかれら［アレクサンドルら］にたいし戦を挑むことはできなかったのである。[10]」

［［Pub.VI（Laptiv.）写本］［アカデミーXIV、オボレンスキーその他の諸写本では簡略的。］**ネヴァ［河畔］における戦について、聖殉教**

者ボリスとグレープの出現及び天使の助力による勝利、そして六人の勇者について。その後、西の国々から……アンドリアシュという名の誉れ高き男が来て、賢明にして勇敢、麗しき姿形の、至福のアレクサンドル・ヤロスラヴィチを見ようと望んだ[11]……この……称賛の言葉を聞いたリム［ローマ］の地の北国の王は、嫉妬と憎しみにかられ、丁度このときルーシをバティが襲ったことを知って、傲慢にも好機到来と考えた。王はおのが国の側から［バトゥが征服しなかった］ルーシの残りの部分を征服しようと望み、驕りたかぶって次のように言った。『大ノヴゴロドとその他の諸都市に軍を進め、征服しよう。すべてのスラヴの民をわが奴隷としよう。大公アレクサンドル自身を打ち負かすか、生きたままこの手で捕らえよう。』そしてかれは多くの人々を集めた。それは騎士団士、おのが司教たち、スヴェイ人、ムルマーネ、スミ、エミたちであった。そしておのが多くの戦士を舟に乗せ、大部隊で出立した[12]……」

「イジョラ人のペルグーシーについて。イジョラの地に、アレクサンドルの軍司令官の一人で、名をペルグーシーという長老がいた。かれは洗礼名をフィリップといい、海の警護がゆだねられていた[13]……かくして［アレクサンドルは］急きょ昼の第六時に必死になってやって来た。そして戦がおこった。［Pub.VI（Laptev.）写本］それはローマ人にたいする大きな［戦であった。］かれは数えられぬほど多くのローマ人を打ち殺し、王自身の顔にもおのが鋭い剣で傷を与えた。ここに大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチの軍に六人の勇者が現れた[14]……」

「［原写本に戻る。］同年、バティ軍のタタールがウグル人を征服し、王子ミヌシュを捕虜にし、バティのもとへ連れ去った……同年、バティ軍のタタールがルィルスク公ムスチスラフを殺害した。同年、ノヴゴロド人がアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公と仲違いした。ノヴゴロドに大きな騒擾がおこった。そしてアレクサンドルがおのが父、ウラジーメル大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとへ去った。」

「［Pub.VI（Laptev.）写本］……同年、ニェムツィ……がヤロスラフ・ヴォロジーメリチ公[15]とともにイズボレスクの砦を取った……同年、大公アレクサンドルの［ネヴァ河畔からの］帰還と勝利の後、その年の冬に、西方の国から再びニェムツィとチュジがヴォジに向って［攻めて］きた。そして［ヴォジの］すべてを攻め取り、かれらにダーニ［貢納］を課した。かれらはアレクサンドル公の父祖の地の、コポリエのポゴスト［ダーニ納入所］に砦を築いた。だが悪事はこのことではなかった。［それは次のことであった。］かれらはチェソフを取り、ノヴゴロドまで三〇露里のところまで押し寄せ、大商人を打ち殺し、こちらではルガとサブリャまで迫ったのである……そのときノヴゴロド人は大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとへ嘆願状とともに使者を送り、かれの子をノヴゴロドの公として派遣するように懇願した。だがかれはかれらにおのが子のアンドレイ公を与えた。そこでかれらは再び大公アレクサンドルを乞うたが、かれらには［アレクサンドルは］与えられなかった……同年、ノヴゴロド人は、おのが慣習にしたがって、民会を召集し、大主教スピリドンを貴族や主立った人々とともに再び大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとへ嘆願状をもたせて送り、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチをおのがために求めた。

大主教スピリドンは先にあげた貴族やノヴゴロド人らとともに全ノヴゴロドを代表してヴォロジーメルの大公ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとに嘆願状をもって来たり、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチをノヴゴロドの公として求めた。かれ［大主教］はすべての点でノヴゴロド人を罪ありとし、次のように述べた。『かれらが大きな騒乱をおこし、汝の子、大公アレクサンドルと仲違いをしたのは、正しくない。だがこのことで汝が抱いた大ノヴゴロドにたいする敵意を解いて、おのが子アレクサンドル公を再び公として与えられんことを。』そこでかれはかれらにおのが子アレクサンドル公を与えた。」

「［Pub.VI (Laptev.) 写本］六七五〇［一二四二］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがノヴゴロドへやって来た……ノヴゴロド人はかれを十字架をもって町の門において出迎え、かれを多くの栄誉とともに大いなる公座に就けた。ノヴゴロドに大いなる喜びがあった。」

「［原写本に戻る］そして間もなく［公は］ノヴゴロド人、ラドガ人、コレラ人、イジョラ人とともにニェムツィの町コポリエを攻め、町を完全に破壊し、ニェムツィ自身を打ち殺し、他の者はノヴゴロドへ連れ帰ったが、それ以外の者はおのがニェメツの地へと帰してやった。［公は］この上なく憐れみ深かったからである。だがヴォジ人とチュジ人の騒乱者は絞首刑にし、再びクレシチノ湖のほとりのペレスラヴリへ向った。」

「［Pub.VI (Laptev.) 写本］大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチが王を破った勝利の後の三年目の冬に、ニェムツィがこちら側から集結し、プスコフを攻めて来た。かれらはプスコフ軍を破り、プスコフにおのが代官らを据えた。これを聞いた大公アレクサンドルはキリスト教徒の［流された］血のために大いに悲しみ、瞬時もおかずに、霊をもって、また聖三位一体と聖ソフィヤに対するおのが熱き心をもって心を奮い立たせ、おのが兄弟またおのが全戦士を引き連れて、ノヴゴロドに来たり、聖ソフィヤ［聖堂］に拝跪して涙ながらに祈った。**氷上の戦**。六七五〇［一二四二］年……[16] この戦が行われたのは四月五日であった。聖母を称え、聖なる殉教者クラウジアン[17]を記念する日で、ここで神は全軍の前でアレクサンドル公の誉れを現したのであった。あたかもエリヒン［エリコ］においてイスス・ナヴィン［ヨシュア］［の誉れを現されたように］。というのもニェムツィは『大公アレクサンドルを生け捕りにしよう』と言ったのである。だが神は［逆に］かれらをかれの手に渡したのであった。戦においてかれに敵対しうる者はけっしていなかった……かくしてかれはノヴゴロドに大いなる勝利とともに凱旋した……同年、大公ヤロスラフ・フセヴォロジチはオルダーへ、ツァーリ・バティのもとへ行き、おのが子のコンスチャンチンをカノーヴィ［大カーン］のもとへ派遣した。バティはヤロスラフを敬意をもって受けいれ、かれにルーシの全民族中の最年長者の地位を与えた上帰国を許した。かくてかれは大いなる栄誉のうちにおのが地に戻った。」

「六七五二［一二四四］年、フセヴォロドの孫……のヴォロジーメル・コンスチャンチノヴィチ・ウグレツキー公、およびかれの甥ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公、またかれのもう一人の甥ヴァシレイ・フセヴォロジチ公がオルダーへ、ツァーリ・バティのも

とへ、おのが父祖の地のことで出かけた[18]。かれ［バトゥ］はこのことでかれらから事情を聴き、熟慮の末、かれらにかれらの世襲領を与え、栄誉のうちにかれらに帰国を許した……」

「六七五三［一二四五］年、フセヴォロドの孫……のコンスチャンチン・ヤロスラヴィチ公がバティのオルダーから、カノーヴィチ［大カーン］のもとから、ヴォロジーメルのおのが父ヤロスラフ・フセヴォロジチのもとへ栄誉のうちに帰還した[19]。同年、リトヴァがトルジョクとベジェツキー郷を攻め取った。ヤロスラフ・ヴォロジーメリチ公[15]がノヴォトルジョク人とともにかれら［リトヴァ人］を追って出征し、かれらの間に戦があった。リトヴァが勝った。かれらは多くの者を打ち殺し、馬を捕らえ、おのが地へ戻っていった。だがトヴェーリの軍司令官が、ヤヴェデイとケルベト[20]とともに、トヴェーリ人とドミトロフ人を率いて、かれらを追跡した。ヤロスラフ・ウラジーメリチ公[15]もノヴォトルジョク人を率いて［同様に追跡した］。トロペツ近郊で激しい戦がおこった。打ち合いは一日中続き、リトヴァが勝利した。［ルーシの］諸公はトロペツへ逃げこんだ。その夜かれらのもとへアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公がノヴゴロド人を率いて援軍としてやってきた。大いなる喜びがおこり、かれらはお互いに抱きあい、接吻した。翌日、かれらはリトヴァと戦うために進発した。かくして激しい戦と壮絶な斬り合いがおこった。そして［ルーシが］リトヴァを打ち破り、かれらからすべての捕虜をとった。ノヴゴロド人はそこから［自領へと］戻った。だがアレクサンドル公はおのが従士団とともにかれら［リトヴァ］を追い、かれらをジジチ近郊で打ち破った。かれらのうち［無事］逃れた者は少なかった。それからかれはおのが子をヴィテプスクから連れ出し、ノヴゴロドへ向った……同年、ユーリー・ドルゴルーキーの孫……の大公ヤロスラフ・フセヴォロジチはおのが兄弟らとともに、すなわち甥ウラジーミル・コンスチャンチノヴィチ公、また［別の］甥ヴァシルコ・ロストフスキー公とその子のボリスとグレープ、また［さらに別の］甥フセヴォロドとその子のヴァシーリー・フセヴォロジチ……とともにオルダーへ、ツァーリ・バティのもとへ出かけた。」

「六七五四［一二四六］年、ユーリー・ドルゴルーキーの孫たち……スヴャトスラフ・フセヴォロジチ公とイヴァン・フセヴォロジチ公は、おのが子らとタタール［の地］からおのが父祖の地へと戻った。また大公ヤロスラフ・フセヴォロジチであるが、ツァーリ・バティはかれをカノーヴィチ［大カーン］のもとへ送った。」

「聖なる［二人の］殉教者、大公ミハイル・フセヴォロジチ・チェルニゴフスキーおよびその貴族フェオドル、苦難を共にした［両人］に関する物語[21]。……同年、ツァーリ・バティはボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公をおのが子サルタクのもとへ行かせた。サルタクはかれを敬意をもって迎え、栄誉とともにおのが父祖の地、ルーシへと帰ることを許した。同年、大公ヤロスラフ・フセヴォロジチはカノーヴィチ［大カーン］のオルダーにあったが、フェオドル・ヤルノヴィチによりツァーリ・バティに中傷され[22]、ルーシの地のためにタタールにより大いに苛まれた。そこでかれが帰国を許されたときには、すでに衰弱しており、カノーヴィチのもとを離れて後間もなく、九月三

○日に異教徒の地において非業の死をとげた。」

「六七五五［一二四七］年、アレクサンドル公はノヴゴロドでおのが父、大公ヤロスラフ・フセヴォロジチ崩御の報を聞き、ノヴゴロドからウラジーメルに来たり、おのが叔父で、ユーリー・ドルゴルーキーの孫、スヴャトスラフ・フセヴォロジチやおのが［その他の］兄弟らとともに父を想って泣いた。同年、スヴャトスラフ・フセヴォロジチ公がおのが兄弟ヤロスラフ・フセヴォロジチの没後にヴォロジーメルにおいて大公の座に就いた。そしておのが従兄弟たち、すなわちアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公、アンドレイ公、コンスチャンチン公、またアファナーシー、ダニール、ミハイル、ヤロスラフ、ヴァシーリーを、かれの兄弟ヤロスラフ・フセヴォロジチ大公が定めたように、諸都市に任じた。かれ［スヴャトスラフ］はかれ［ヤロスラフ］の言葉［意志、命令］に違わなかったのである。同年、フセヴォロドの孫、アンドレイ・ヤロスラヴィチ公がオルダーへ、ツァーリ・バティのもとへ行った。バティはかれを敬意をもって受けいれた。」

「［Tolst.VII（Golitsynsk）写本］**アレクサンドルのオルダー行き。バティはかれに驚嘆し、大いなる栄誉を与えた。**同年、不信心のツァーリ・バティは、神に守られた大公アレクサンドルの雄々しく高貴なる様と不屈なる勇気について、またあらゆる敵にたいする幾多の誉れ高き勝利について聞き知り、かれのもとにおのが使者を遣わして、こう言わせた。『ルーシの支配者たちのなかで最も名高き公アレクサンドルよ！余は、神が余に多くの民族を征服させられたことを汝が理解しておることを知っている。すべての民族が余の支配に服しておるのだ。何ゆえ汝一人が余の力に従おうとはしないのだ？　よく聴くがよい。もし汝が汝の地を無傷で保とうと思うなら、万難を排しただちに余のもとにやって来るがよい。そうすれば汝は余の帝国の栄光と誉れとを見るであろう。汝と汝の地によき事態を見いだすことになるであろう。』神にあって賢き大公アレクサンドルは、聖なるかれの父ヤロスラフが、この世の移ろいやすい帝国のことを重んぜず、オルダーへ出立し、かの地で敬神とおのがすべての民のためにおのが生命を捨て、そのようにして天の国を得たことに思いを巡らし、かくて至福なるアレクサンドルも、父の正しく熱き敬神の想いに倣って、キリスト教徒の苦難を除くべくオルダーへ行こうと考えるに至った。こうしてかれは栄えある町ウラジーメルに大部隊を率いてやって来た。その到来の様は物々しかった。この物々しい到来の噂は当時ヴォルガ川河口地方にまで伝わり、モアビト人の母親たちは、『静かになさい。ほら大公アレクサンドルが来るよ』と言って、その物々しさで子どもたちを脅かした。かれは［ウラジーミルの町に］長くは留まらず、短い滞在の間にキリル主教から祝福を得ただけで、ただちに先を急いだ。そしてツァーリ・バティのもとへ到着したが、神の恵みはいたるところでかれの上にあった。ツァーリ・バティはかれをみて大いに驚き、おのが高官らにこう言った。『この公のような者は他にいないと聞いていたが、まことにそうであった』と。かくしてかれは公を敬意をもって受けいれ、多くの贈り物を与えた。このように神は、不信心なる者らの心に自らを恥じ、神が選び給うた者らを敬う気持ちをもたせて、かれら［神に選ばれたる者］を驚嘆させられるのである。その後［バトゥは］かれ［ア

レクサンドル」とその兄弟アンドレイ・ヤロスラヴィチをカノーヴィチ［大カーン］のもとへ行かせた。」

「［原写本］同年、極悪不信なツァーリ・バティは大軍を率いて西方のウグル人［ハンガリー人］、すなわちかれらが以前に攻めきれなかった夕方［西］の国々を攻撃すべく進み、多くの町を破壊し、征服した。だれ一人かれに抗して立つことのできるものはなく、［バトゥは］多くの諸公、軍司令官らを生きたまま捕らえ、おのが子のサルタクのもとへ送った。かれは夏の間中その地に留まり、戦い、荒し、かれに抵抗する者すべてを剣で斬り殺し、火にかけた。同年、ベルデベクと呼ばれたバティの高位の公がウグルの地で殺害された。」

「六七五六［一二四八］年……同年、ツァーリ・バティは軍勢とともにウゴルのヴァラジン[23]の町へ向って進んだ。周囲の多くの町々を荒し征服した。誰もかれに刃向かうことはできなかった。かれはヴァラジンの町に到達した。それはウゴルの地にあったのである。町のまわりには普通の樹木は少なく、すべては葡萄の木ばかりで、あらゆる種類の果実と葡萄酒のにおいを放っていた。町は四方が完全に水［堀］で囲まれており、きわめて堅固であった。この要塞のゆえに［町の者は］何者をも恐れることがなかった。町の中央に非常に高い石造の塔が立っていた。当時この地を支配していたのはヴラスロフ王[24]で、ウグル、チャフ［チェコ］、ニェムツィ、さらに大いなる海に至る全沿海地方を［治めていた。］ウグルは以前は正教を奉じていた。というのもかれらは聖なる洗礼をギリシア人から受けたからである。だがかれらは［神の］文書をおのが言葉で書き表すことができず、近くにいたローマ人がかれらをおのが邪説［異端］に仲間入りさせ、それ以来今日に至るもかれらと一つになっているのである。先に記したヴラスロフ王も同様に、かれのもとにセルビア大主教の聖サヴァ[25]がやってくるまでは、ローマ教会に属していた。この聖人は再び［王に］キリスト教信仰であるギリシアの法に加わるように働きかけた。ただ公然とではなく、密かにである。自身に対するウグル人の反乱を恐れたからである。聖サヴァはかれ［王］にギリシアの正教の法を教えながら五ヶ月の間留まり、その後一人の司祭をかれの傍らに残しただけで、帰っていった。かくてこの司祭が王に仕える者の一人として留まったのである。ツァーリ・バティはウゴルの地にやって来ると、町という町を破壊し、人々を捕らえた。支配者ヴラスロフは（かれのことを聖サヴァはヴラジスラフと呼んだのであるが）、それぞれの地域が遠く離れていたために急ぎ人々［兵］を集めることができなかったのである。バティはもっとも恵まれた時期をとらえ、望むがままに［征服活動を］行った。ヴラジスラフ王は何日もの間先の塔に留まっていた。悲嘆に暮れ、口に入れるべきパンも、飲むべき水もなく、ただ涙ながらにキリストなる神に祈りを捧げ、その怒りを憐れみに変え、かれをその敵から救い出してくれるよう祈ったのである。そのときかれは、みずからが座っている塔の上から、おのが姉妹が、町へ、かれの方へ走ってくるのを見た。だがタタールが追いかけてきてかの女を捕まえ、バティのもとへ連れていった。ヴラジスラフ王はこれを見て、再び激しく泣き、涙ながらにキリストなる神に、そのご加護と憐れみによりかれを敵から救い出されんことを訴え、かつ祈ったのである。かれはこのよ

うに祈ったが、かれの眼から流れ出た涙は、あたかも川の奔流となって、大理石の上に落ち、穴を穿って流れ落ちたのである。それは今日に至るもこの塔の大理石に見ることができる。そしてこのことからかれとともにいた貴族やすべての人々は、神のご加護と憐れみがかれにもたらされることを知ったのである。その後まもなくして何者か、明るく輝く、威厳にみちた人物が王の前に立った。王とともにいた者はみなかれをみて恐れ、おののいた。かれは言った。『汝の涙ゆえに主なる神は汝がツァーリ・バティに打ち勝つことを許された。すぐに今のときにかれにたいし打って出なさい。』人々はこう語った者の顔を見ようとしたが、見えなかった。そこでかれらがその塔から出ると、鞍をつけた馬を見た。それは誰も抑えているわけでなく、自ら立っており、［鞍の］上には斧がおかれていた。かれら［王とその側近］はこのことから神のご加護のあることを理解したのである。ヴラジスラフ王はすぐにこの馬に乗り、その斧を手に取り、かれとともにいただけのおのが軍勢を引き連れて町から出撃し、ツァーリ・バティの本営に気づかれずに突如として攻め寄せた。このときバティにはほんのわずかな兵力しかなかった。というのもかれのすべてのタタール兵はあちこちへ［略奪のため］展開していたからでる。かれとともにいたタタールはこのとき神の怒りにより打ち破られ、死者となるか、恥も外聞もなく逃げ去った。ツァーリ・バティはおのが不幸を見て、起こったことを理解できなかった。かれは神の怒りにより追われ、逃走した。王の姉妹もかれとともにあった。ヴラジスラフ王はおのが軍勢を率いて、かれらに混じって［バトゥを］追い、多くのタタールを打ち殺し、そしてツァーリ・バティ自身に追いついて、自らかれと打ちあった。すると王の姉妹がバティに加勢し始めた。ヴラジスラフ王は大きな悲嘆の声をあげながら、涙ながらに主なる神にかれに加護を下されるよう祈った。かくてかれは神のご加護により、ツァーリ・バティとかれとともにあったおのが姉妹を打ち殺したのであった。それからかれはおのが貴族や全軍とともにバティの本営に立った。タタールが起こったことを知らずに各地での戦からおのが本営に戻ってきた。ウグル人はかれらを捕らえて死に渡し、かれらの無数の富をすべて奪った。だがキリストの信仰を望んだ者は生かしたままにおかれた。主なる神はその目には見えない力によってこのように行われ、不信心なツァーリとその無数の軍勢をすべて死に渡されたのである。聖書に次のように言われることが成就したのである。『主は言われる。復讐するのは私であると。』その後ヴラジスラフ王の銅像が造られた。馬に乗り、手には、神のみえざる力の助けでツァーリ・バティとおのが姉妹を打ち殺した斧をもっている像である。それは後世の人々が記念として目にすることができるように、町の中央に立つかの塔の上に据え付けられ、このようにして今日までも立っているのである。以上でバティに関する物語は終わる……[26] 同年、ヤロスラフの子、フセヴォロドの孫……のホロブリトと呼ばれるミハイロ公が、ウラジーメル大公位から、おのが叔父で、ユーリー・ドルゴルーキーの孫……である大公スヴャトスラフ・フセヴォロジチを追い、自らがヴォロジーメルで大公位に就いた。[27] 同年、ウラジーメル大公ミハイロ・ヤロスラヴィチ・ホロブリトはリトヴァを討つべく遠征を行った。リトヴァがフセヴォロドの孫……

ウラジーメル大公ミハイロ・ヤロスラヴィチを殺害した。ロストフ主教、至福なるキリルが人をやってかれの遺体を引き取り、かれをヴォロジーメルのいとも清き聖母教会に安置した……」

「六七五七［一二四九］年、コンスチャンチンの孫……のグレープ・ヴァシルコヴィチ公がオルダーへ、バティの子、ツァーリ・サルタクはかれに大いに敬意を表して迎え、その後おのが父祖の地へ帰ることを許した。同年、アレクサンドル・ヤロスラヴィチ公とその兄弟アンドレイ公がカノーヴィチ［大カーン］のもとから帰着した。かれらはアレクサンドル公にキエフと全ルーシの地を、かれの兄弟アンドレイ公にヴォロジーメルの大公位を与えた……」

「六七五八［一二五〇］年、ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公がオルダーへ、バティの子、ツァーリ・サルタクのもとへ行った。ツァーリ・サルタクはかれに大いに敬意を表して迎え、その後おのが父祖の地へ帰ることを許した。同年、キエフおよび全ルーシの府主教、いとも聖なるキリルがキエフからチェルニゴフへ向い、さらにリャザン、またスーズダリの地にやって来た。そしてかれを諸公と貴族らが大いなる敬意をもって迎えた。同年、フセヴォロドの子……大公スヴャトスラフがおのが子ドミトリーとともにオルダーへ、バティの子、ツァーリ・サルタクのもとへ行った[28]。ツァーリはかれとかれの子を敬意をもって迎えた。同年、フセヴォロドの孫……アンドレイ・ヤロスラヴィチ公がヴォロジーメルにおいて、ダニール・ロマノヴィチの娘と結婚した。婚姻の式はキエフと全ルーシのいとも聖なる府主教キリルにより、ロストフ主教キリルの参列を得て、ヴォロジーメルのいと清き聖母教会において執り行われた。祝宴は盛大に行われ、大いなる喜びがあった。」

「六七五九［一二五一］年、キエフと全ルーシのいとも聖なる府主教キリルが、ロストフ主教キリルとともに、ヴォロジーメルからノヴゴロドに行った。大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチが主だった人々とともにかれを大いなる敬意をもって迎えた……同年、ノヴゴロドで大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチが発病した。かれの病は非常に重かった。だが主なる神がそのいとも清き［聖］母とともに、おのが僕なる聖人方、すなわち、キエフと全ルーシのいとも聖なる府主教キリル、ノヴゴロド大主教ダルマト、ロストフ主教キリル、および神聖なる全［教会］会議が行う公のための懇願と公の祖先と両親の祈りを聴き入れられ［公は治癒され］た……」

「［Pub.VI（Laptev.）写本］**ネヴリュイの寇掠**。同年［六七六〇＝一二五二年］、大公アレクサンドルは栄えある町ヴォロジーメルと全スーズダリの地の守りをおのが兄弟アンドレイに委ねて、再びオルダーへ、新ツァーリ・サルタクのもとへ行った[29]。この公［アンドレイ］はたとえ高貴な生まれと勇猛な性格の持ち主であったとしても、国の統治を軽んじ、狩猟に熱をあげ、知恵乏しい助言者に耳を傾け、そのためかれらのゆえに非常に多くの混乱がおこり、人々のなかには困窮があり、富は失われてしまった。かれ［の失政］ゆえに神が［これを］許されたのである。同年、ツァーリ・サルタクがおのが軍司令官ネヴリュイ、カチァク公、勇敢なるアルィブガ公をその他のタタールとと

もに［ルーシへ］送った。フセヴォロドの孫で、ユーリー・ドルゴルーキーのひ孫にあたる大公アンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキーにたいし戦をしかけるためである。それはボリシュ［ボリス］の日の前日であったが、神を知らぬタタールはヴォロジーメル近郊でクリャズマ川を渡り、ひそかにペレスラヴリの町に向った。ボリシュの日の朝、大公アンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキーは、自らこう言って思い惑っていた。『主よ！いつまでわれらは互いに争いあい、互いにタタールをけしかけあうのであろうか。わたしはタタールと睦みあい、かれらに仕えるよりは、見知らぬ国へ逃れるほうがよいのではなかろうか。』こうして大公アンドレイはおのが軍勢を集め、おのが諸部隊を率いてかれら［タタール］を迎え撃った。両軍が衝突し、激しい斬り合いがおこった。だがわれらの罪が増し加わったために神の怒りが発せられ、アンドレイ公は汚れし者たち［異教徒］に打ち負かされ、辛うじて逃げた。かれは大ノヴゴロドにやってきたが、ノヴゴロド人はかれを受けいれなかった。かれはプスコフに向ったが、そこでも短期間留まっただけであった。おのが公妃を待ったのである。かれの公妃がかれのもとへ到着すると、かれはそこから公妃とともにニェムツィの町コルィヴァンに向った。そしてそこに公妃を残して、自らは海の向こうのスヴェイの地へ向った。スヴェイの主人がかれを迎え、敬意をもってかれを受けいれたのである。かれはコルィヴァンに公妃を呼びに人をやった。かれはそこにしばらくの間いた。公妃とともにスヴェイの地に再び滞在したのである。」

［［原写本に戻る。］［アンドレイがスウェーデンに逃れる前に］タタールはかれ［アンドレイ］を追跡し、クレシチノ湖畔のペレスラヴリの町でかれに追いついた。だが神といとも清き聖母がかれを守られた。タタールはかれを追い、あちこちに分かれ［て探し］たが、かれはかれらのただ中から脱出したのである。そのときかれが大公座についてから三年が経過していた。皇子［ツァレーヴィチ］ネヴリュイはおのがタタールの軍勢とともにクレシチノ湖畔のペレスラヴリを取り、ヤロスラフ[30]の公妃と子らを捕らえ、かれらを殺害、ヤロスラフの他の子供たちを捕虜として連れ去った。かれらはかれらの軍司令官ジジスラフを殺害し、すべての民を捕虜として連行し、すべての財産を奪い、オルダーへ去った。［ここでPub.VI (Laptev.) 写本は終わっている。］［以下、原写本］同年、フセヴォロドの孫で、ユーリー・ドルゴルーキーのひ孫である大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがオルダーから多くの栄誉を受けて帰国した。いとも聖なる、キエフと全ルーシの府主教キリルが十字架を携えてかれを出迎えた。かれとともに聖なる教会会議［の聖職者］、それに多くの人々がいた。いとも聖なるキリル府主教はツァーリの許しを得て、かれ［アレクサンドル］をヴォロジーメルの大公位、かれの父ヤロスラフ・フセヴォロジチの座に就けた。そしてかれ［アレクサンドル］はネヴリュイによる寇掠後［荒れ果てた各地に］教会を建立した。同年、タタールはオルダーから、イーゴリの孫……オレーグ・リャザンスキーをそのおのが父祖の地に帰らせた。同年、ユーリー・ドルゴルーキーの孫……大公スヴャトスラフ・フセヴォロジチが崩御した。二月三日のことである。」

［六七六二［一二五四］年、大公ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ・ト

フェールスキー［トヴェールスキー］[31]が、おのが世襲地であるトフェーリ［トヴェーリ］を去り、プスコフに向った。プスコフ人はかれを大いなる栄誉とともに敬意をもって受けいれた……」

「六七六三［一二五五］年……同年、ノヴゴロド人はプスコフから大公ヤロスラフィフ・ヤロスラヴィチ・トフェールスキーを迎え、かれを自らのノヴゴロドの公位に据えた。そしてヤロスラフ［フセヴォロドヴィチ］の孫……ヴァシーリー・アレクサンドロヴィチをノヴゴロドから追放した。かれ［ヴァシーリー］はすぐにヴォロジーメルのおのが父アレクサンドル・ヤロスラヴィチのもとへ使者を送り、自らはトルジョクへ向かい、そこでおのが父を待った。大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはおのが兄弟［従兄弟］ドミトリー・スヴャトスラヴィチ（フセヴォロドの孫である、というのもアレクサンドルとドミトリーはそれぞれ二人兄弟［ヤロスラフとスヴャトスラフ］の子であったからである）と、多くの軍勢を引き連れてトルジョクへ向った。かれをかれの子ヴァシーリーが出迎えた。かれらはそこからノヴゴロドへ向ったが、かれをノヴゴロド人のレテシカ[32]が迎えて、挨拶の言葉とともに次のように言った。『ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公はノヴゴロドから逃げ出しました。』　だがノヴゴロド人はかれらの旧習に従い民会を開催した。『兄弟たちよ！聖母とノヴゴロドの真実、またおのが父祖の地のために堅く立とうではないか。死のうと生きようとわれらはおのが身を惜しまぬであろう。』そしてノヴゴロド人はおのが大主教ダルマトをおのが有力者たちとともに大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチのもとへ送り、かれらに対する怒りを解くよう［懇願した。］かれ［アレクサンドル］はかれらに言った。『わが敵である市長官アナニヤを私に渡しなさい。もし汝らがかれを私に渡さないなら、私は汝らに対し軍勢を率いて向おう。』ノヴゴロド人は自分たちの主張を長いこと譲らなかった。大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはかれらに使者を遣わして、こう言った。『もし私にわが敵アナニヤを渡さないのであれば、かれから市長官職を剥奪しなさい。そうすれば私は汝らから怒りを解こう。』ノヴゴロド人は集まってこう語り合った。『これは公がわれらの十字架宣誓違反者らと談合してやったことだ。かれらのことは神と聖ソフィヤが裁かれるだろう。かれらは公をわれらにけしかけたのであるから。』かくてかれらはオナニヤから市長官職を奪い、市長官職をミハイル・ステパンコヴィチに与えた。そしてかれらは大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチとおのがノヴゴロドのすべての［人々の］意志において和平を結び、かれとともに十字架に接吻してそれを確認した。その後アレクサンドル・ヤロスラヴィチ公がノヴゴロドへ入城した。かれを大主教ダルマトが十字架を携えてすべての聖なる教会会議とともに出迎えた。かくして大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチはおのが子ヴァシーリーをノヴゴロドの公位に据え、自らはノヴゴロドのかれらのもとから大いなる栄誉のうちに出立した。大いなる平和と静寂があった。」

「六七六四［一二五六］年……ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公が多くの贈り物をもってタタールへ行った。同様にアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公も多くの贈り物をもたせたおのが使者をタタールへ送った。ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公は

ウラヴチ［ウラグチ・カン］のもとへ出頭し、贈り物を与え、多くの栄誉を受けとり、多くの栄誉とともにおのが父祖の地に帰った……」

「六七六五［一二五七］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチ・ヴォロジーメルスキー、また大公ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー[33]、そして大公アンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキーが多くの贈り物をもってオルダーへ行った。かれらはウラヴチに敬意を表し、多くの栄誉とともにそれぞれのおのが父祖の地に帰った。同年、グレープ・ヴァシルコヴィチ公がオルダーで結婚した。かれはカンの地[34]から、ツァーリのもとから多くの栄誉とともにおのが父祖の地に戻った。同年冬、タタール［の地］から調査人がやって来た。かれらはスーズダリ、リャザン、ムーロムの全地を数え、十人長、百人長、千人長、万人長を任命し、すべてを定めて、オルダーへ帰った。ただ掌院、修道院長、修道士、司祭、輔祭、聖歌合唱人そして教会のすべての聖務者、すなわち主なる神といとも清き聖母を仰ぎ見、主の家に住み、神の教会に仕える人々は数えられなかった。」

「六七六六［一二五八］年……同年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチ・ウラジーメルスキー、大公アンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキー、ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー、大公ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ・トフェールスキーがオルダーへ行った。かれらはウラヴチとオルダーのすべての公、軍司令官らに敬意を表し、多くの栄誉とともにルーシへ帰ることを許され、その年の秋、それぞれおのが父祖の地に戻った。同年秋、ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキーとその兄弟グレープ・ヴァシルコヴィチ公とその公妃がオルダーからロストフへ帰った……同年、タタール［の地］から調査人がヴォロジーメルへやって来た。オルダーの調査人と大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチ・ウラジーメルスキー、アンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキーそしてボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキーはノヴゴロドの地を数えるために［そこへ］向った。このことを聞きつけたノヴゴロド人は大いに動揺した。ノヴゴロドへタタールの調査人と大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチ、その他のルーシ諸公が到着すると、ノヴゴロド公ヴァシレイ・アレクサンドロヴィチはノヴゴロドのおのが父のもとからプスコフへと逃走した。タタールはダーニを要求し始めた。だがノヴゴロド人はこれに応じなかった。かれらはツァーリとその使者たちに多くの贈り物を与え、かれらを平和のうちに帰らせた。そして市長官のミハルコを殺害し、同様にもう一人の市長官のミハルコをも殺害した。市長官のオナニヤが死去した……アレクサンドル・ヤロスラヴィチ公はおのが子ヴァシリーをプスコフから追放し、かれを下流地方に送った。かれの従士団は処罰した。ある者からは鼻と耳を切り取り、他の者からは目を剜り抜き、手を切断した。かれらがかれにあのようにするように助言したからである。このように悪人は悲惨な最期を遂げ、タタールの調査人たちはこのようになだめられ鎮められたのである……」

「六七六七［一二五九］年、ミハイロ・ピニャチンがノヴゴロドへ来て、こう言った。『もし汝らがオルダーのツァーリにたいする数［戸口調査、貢納］に応じないならば、すぐにタタールの軍勢が下流地方からやって来て、すべての者に災いがあるであろう。』かくてノ

ヴゴロド人は恐れをなし、数に応じた。かれらはおのが使者に多くの贈り物をもたせてオルダーへ、ツァーリのもとへ送り、かれがかれらにたいするおのが怒りを解き、望むがままにかれらの地のすべてを数えるようにと嘆願した。同年、オルダーのツァーリのもとからヴォロジーメルへ調査人がやって来た。かれらは大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチ・ウラジーメルスキーとアンドレイ・ヤロスラヴィチ・スズダーリスキー公、ボリス・ヴァシルコヴィチ・ロストフスキー公を伴って、ノヴゴロドへ向った。かれらはノヴゴロドとプスコフの全地を数えた。ただ掌院、修道院長、司祭、輔祭、修道士、聖歌合唱人、そしてすべての下級聖務者は数えなかった。かれらは主なる神といとも清き聖母を仰ぎ見、主の家に住み、神の教会に仕える者だからである。タタールは数を取った後引き返し、オルダーへ向った。こうしてノヴゴロドにおいて大いなる平和と静寂があった。ノヴゴロド人はアレクサンドル・ヤロスラヴィチ公にかれらのもとに留まるよう懇願し、かれに大いなる敬意を払った。だが公はかれらのもとにおのが子ドミトリーを任じ、自身はヴォロジーメルへ去った……」

「六七六九［一二六一］年、大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチに子ダニール[35]が生まれた……同年、キエフと全ルーシの府主教、いとも聖なるキリルがサライにミトロファンを主教として任じた。」

「六七七〇［一二六二］年……同年、ルーシの全都市においてタタールにたいする集会があった。これらのタタールはツァーリ・バティが、そしてバティ殺害後はその子サルタクが、その後は他の者がルーシの全都市の統括者として任じていたのである。ルーシの諸公は互いに相談しあって、おのが町からタタールを追放した。かれらから抑圧があったからである。富める者たちがタタールからダーニ［徴収権］を買い取り、私利私欲を図り、多くの貧しき者たちは利子［支払い］のために苦役を強いられたからである。こうしてルーシ諸公はタタールを追いだし、ある者は打ち殺し、かれらのなかの別の者は父と子と聖霊の名において洗礼を受け［命を助けられ］た。このときヤロスラヴリにおいて背教者イゾシマが殺された。かれはキリスト教の信仰と修道士の身分を捨て、きわめて悪らつなベセルメンとなった。かれはツァーリの使者チチャクから援助を受け、キリスト教徒に多くの災いをなした。そこで正教キリスト教徒たちがかれを打ち殺し、犬が喰うままにした……」

「六七七一［一二六三］年……同年、フセヴォロドの孫……の大公アレクサンドル・ヤロスラヴィチがオルダーへ、ツァーリ・ベルカイのもとへ行った。四度目であった[36]。そしてそこで冬を過ごした。かれは重病となり、ルーシに帰ることを許されたが、ゴロジェツに至り、剃髪して聖なる天使の修道士の姿をとり、スヒーマ[37]となり、一一月一四日、その日の夜崩御した。かれの遺体はヴォロジーメルへ運ばれ、いとも清き聖母教会に安置された。同じ一一月の二三日であった。そのときキエフと全ルーシの府主教、いとも聖なるキリルが贖宥状をかれの手のなかにおこうとし、修道士のサヴァスチアンが近づいて、かれの手を開こうとしたとき、公自身があたかも生ける者であるかのように、手を差し上げた。そして府主教キリルが贖宥状をかれの手におくと、公は再びあたかも生ける者のようにそれを閉じた。全ての者が

これをみて驚いた。［公の遺体は］ヴォロジーメルの町のいとも清き聖母の生誕修道院におかれている。公は一〇年間在位した。その子はヴァシーリー、ドミトリー、アンドレイ、ダニーロ・モスコーフスキーである。」

訳注

（1）以下のテクストは、基本的には、*PSRL.X* 自体が主要テクストとして利用している Akad.XIV のルーコピシ（手写本、以下原写本と略記）に基づいている。部分的には別の手写本をテクストとしたが、その場合には、利用する写本名を［ ］中に示した。（これも *PSRL.X* により利用されているものである。）

（2）ミハイル・フセヴォロドヴィチはオルダーで殉教死したミハイル・チェルニゴフスキーのこと。その子ロスチスラフは一二二九～一二三〇年にノヴゴロド公であった。

（3）ノヴゴロドの市長官。

（4）以下バトゥのリャザンから始まる北東ルーシ一帯の征服の記事が八頁あまりに渡って続く。

（5）ウラジーミル大公。アレクサンドル・ネフスキーの伯父。バトゥの侵入の際、一二三八年三月四日、シチ河畔で敗死した。

（6）以下、ミハイル・チェルニゴフスキーのキエフ脱出、その後のスモレンスク公ロスチスラフ、ついでガーリチ公ダニールの相次ぐ大公位就任、後者によるその千人長ドミトルへのキエフ守備の命令、そしてバトゥ軍のキエフ攻略の記述が続く。キエフを一二月六日に陥落させたバトゥは、その後ヴォルィニのウラジーミル方面へ向って進撃する。

（7）キエフ大公。ルーシに正教キリスト教を導入した。一〇一五年没。

（8）リューリク朝の伝説的創始者。『過ぎし年月の物語』によれば、八七九年没。

（9）以下アレクサンドルがいかに信仰深く、行い正しい人物であるかについての聖者伝風の記述が続く。

（10）最後の部分はバトゥ軍が一二三七～三八年の侵入の際に、ノヴゴロドを攻撃することができなかったことを独特の仕方で描いている。これを一二四一年の項のなかで描いていることは、この年代記があまりそうしたことに注意を払っていないことを示している。

（11）以下、アンドリアシュはアレクサンドルに会い、その立派な人物に驚き、帰国して報告したとする、基本的には『伝』と同じ記述が続く。またこの後の部分も基本的には『伝』に依拠して書かれている。

（12）以下ネヴァ河畔の戦に至る経過が、ここでも『伝』と似た形で、しかしより敷衍して、多くの説明と形容句を加えながら記述される。ここでローマ（人）と記されるのは、カトリック（教徒）という意味であろう。

（13）ここも同様に、『伝』を敷衍しつつこのテーマに関する記述が続く。

（14）ハンガリー人のこと。

（15）ムスチスラフ・ロスチスラヴィチ（勇敢公）の孫。ウラジーミル・ムスチスラヴィチの子。プスコフ公。

（16）以下、氷上の戦について二頁余りにわたって記される。

（17）不詳。『正教神学百科事典』には、聖殉教者クラウジーは七人あげられているが、四月五日を記念日とするものはいない。

（18）この三人の公はいずれもアレクサンドル公の伯父コンスタンチン・フセヴォロドヴィチを父ないし祖父とするロストフ諸公。

（19）コンスタンチン・ヤロスラヴィチは大公ヤロスラフ・フセヴォロドヴィチの子。アレクサンドルの弟。

（20）ヤヴェデイはトヴェーリの、ケルベトはノヴゴロドの軍司令官。

（21）以下三頁半にわたりミハイル・チェルニゴフスキー公のオルダーにおける殉教の記事が続く。

（22）これは明らかな誤り。『ソフィヤ第一』の同年の項の記述によれば、

ヤロスラフ大公はフェオドル・ヤルノヴィチによりカラコルムで大カーンの前で告発されたのである。本年代記もヤロスラフが「カノーヴィチ」のオルダーで告発されたことを伝えているにも関わらず、「バティ」にたいして中傷されたかのように記しているのは、混乱としか言い様がない。

(23) 現北セルビア、ノーヴィ・サード近郊のペトロヴァラジュディンか。

(24) ここに言われるヴロスラフ王は、おそらくセルビア王ステファン・ヴラジスラフであろう。在位一二三四～一二四三年。以下に出てくる聖サヴァの兄弟である。ただしこの王がチェコやドイツさらにはバルト海と推測される「大いなる海」にいたる全沿海地方まで支配したことはない。おそらくこの点では一五世紀にボヘミアとハンガリーを領有したヤギェウォ朝のヴラジスラフ王と混同したものであろう。なおバトゥのハンガリー方面への襲来時に実際にハンガリー王であったのはベーラ四世である。

(25) セルビア教会のギリシア（ビザンツ）からの独立を実現させた聖人（一二三五年没）。ステファン・ネマーニャ王の子。

(26) このハンガリーにおけるバトゥの殺害に関する物語は、いうまでもなくフィクションである。いつ、どのようにして、なにゆえこのような物語がつくられるに至ったのかは興味深い問題として残されている。この物語は最初『一五世紀末のモスクワ年代記集成』や『エルモーリン』に現れたと考えられるが、これについては本稿(上)八八－八九頁を参照されたい。

(27) スヴャトスラフ・フセヴォロドヴィチ大公のその甥ミハイルによる追放に関しては、本稿(上)七六－七七頁参照。『ニキフォルの簡略年代記』などはスヴャトスラフを追放したのはアンドレイ・ヤロスラヴィチとしている。

(28) 上記の如く、スヴャトスラフは一二四八年に、本年代記によればミハイロ・ホロブリトにより放逐されていたが、ここでは依然として大公とされている。

(29) ここは、アンドレイではなく、あたかもアレクサンドルがウラジーミル大公であるかのような書き方であるが、アレクサンドルがアンドレイに代わって正式に大公位についたのは一二五二年、この後のことである。

(30) ヤロスラフ・ヤロスラヴィチ公。アレクサンドル、アンドレイ両公の弟。トヴェーリ公。

(31) トヴェーリのヤロスラフ・ヤロスラヴィチがウラジーミル大公となるのは、アレクサンドルの没（一二六三年）後のことである。

(32) ノヴゴロドの軍司令官。『ノヴゴロド第一（古輯）』や『ソフィヤ第一』の同年の項ではラチシュコ。

(33) ボリス・ヴァシルコヴィチがウラジーミル大公位に就いたことはない。

(34) ここの「カンの地」をどう理解するかは難しい問題である。既述のようにエクゼムプリャールスキーはこれをカラコルムととったが（本稿(下)第三章注(47)）、むしろサライととったほうが自然にみえる。

(35) 後のモスクワ公。

(36) 本年代記編者はアレクサンドルのオルダー行きを明瞭に計四回と記している。この点ベグノーフや本稿の筆者は見解を異にし、計五回と考えている。この点について、またベグノーフと筆者の相違については拙稿「アレクサンドルとモンゴルのルーシ支配」六二頁、及び注(127)、また本稿(上)九六－九七頁、及び注(141)、さらには本稿(下)第三章注(47)を参照されたい。

(37) 最高位の修道士のこと。